

み、焼成は良好である。2は角頭状の口唇部形態を呈し、平坦な上面に指紋か貝殻背圧痕か判別できないが、圧痕が僅かに認められる。条痕は表裏とも横位に施文される。3、4は口唇部に刻目が施されないもので、口唇部形態は3が丸頭状、4が角頭状を呈する。5は口唇上に深い刺突文を施すものである。いずれも纖維を少量含む。6、7は胸部破片であり、表裏面に条痕が施文される。纖維を少量含む。8、9は底部であり、尖底というよりは丸底である。表裏面とも条痕が施文され、纖維を少量含む。

第8号炉穴（第207図2）

出土土器は全て第V群土器であり、復原可能な1個体分が出土している。2は口縁部を欠損する尖底土器で、最大径約20cm、現存高28cmを測る。胸部と直接接合はしないが、先端部が乳頭状に突出した底部が存在する。条痕は表裏面に施文されているが、器面の剥落する箇所がある。胎土は纖維を少量含むが緻密であり、色調は淡橙褐色を呈する。

第10号炉穴（第201図10～17）

出土土器は全て第V群土器である。10は口縁下に細隆起線が1本廻り、口縁部文様帯が分帯される。器面が荒れているため不明瞭であるが、この部分に貝殻腹縁文が斜位に充填されている。これ以下細隆起線文のみでモチーフが構成されている。口唇部は角頭状を呈し、刻目は施されない。表裏面とも条痕が施文され、胎土に纖維を少量含む。11は細い隆帯が口縁下に配され、隆帯から下に太い沈線が垂下するものである。太沈線は部分的に押し引き状となる。口唇部の外側に刻状の押捺が加えられ、表裏面とも条痕が施文されている。纖維を少量含む。12～16は表裏面に条痕が施文される胸部破片である。いずれも纖維を含む。17は丸底状の底部であり、表裏面とも条痕が施文される。纖維を少量含む。

第3号土壤（第201図18）

18は口縁部破片で、口縁下の併行沈線間に「C」字状の連続爪形文が施文されている。第VI群土器であり、諸磯b式に比定される。

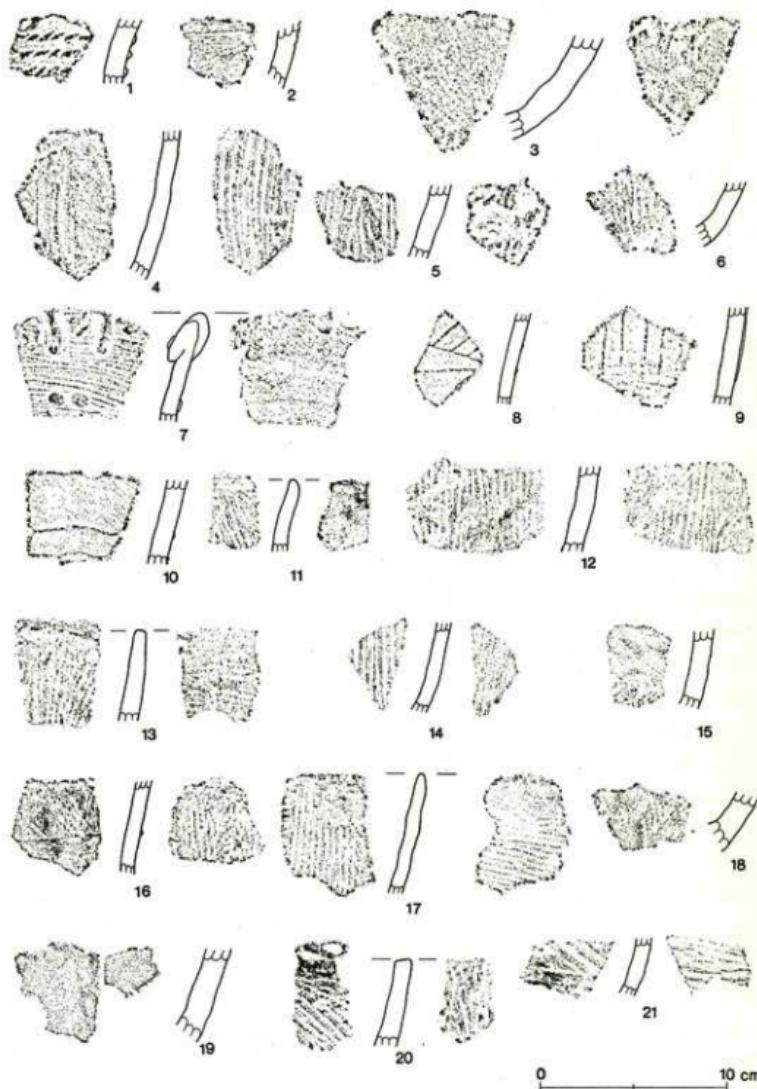
第4号土壤（第201図19～25）

19は表面にヘラ状の工具でナデた様な痕跡が認められ、裏面は良く磨かれている。赤褐色を呈し、胎土は緻密であるが、白色粒子が多く含まれている。第VI群土器と思われ、田戸下層式の特徴を類似する。

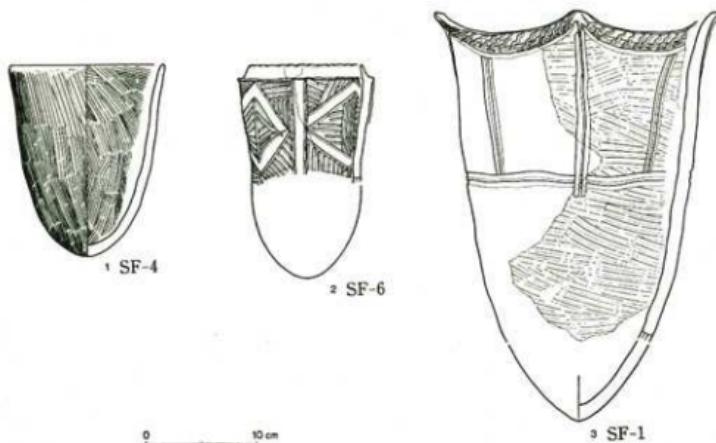
20は細隆起線のみ施文されるものであり、水平に配される細隆起線に向って、併行する細隆起線が垂下されている。表面には条痕が僅かに認められるが、裏面では不明瞭である。胎土は纖維を若干含むが緻密である。21、23、25は表裏面に条痕が施文されるものであり、いずれも纖維を含む。22、24はヘラ状工具によると思われる擦痕が観察されるものである。22は表裏面にナデた様に施文されており、23は表面のみ強く削る様に施文されている。以上は第VI群土器である。

第5号土壤（第202図1～6）

1は刻目の付く隆帯が貼付されるものであり、2は細い纖維L Rが施文された上に沈線が引かれるもので、第VII群土器の諸磯b式に比定される。3～6は表裏面に条痕の施文されるもので、いずれも胎土に纖維を含む。第V群土器である。



第2022図 造構出土土器(4)



第203図 遺構出土器実測図(1)

第6号土壤 (第202図7)

7は口縁が内面に折り返され、2個対の棒状と円形の貼付文がみられる。口縁内側にも円形貼付文がみられる。地文は条痕状の細い沈線が施文される。第Ⅶ群土器の諸職c式に比定される。

第8号土壤 (第202図8)

8は細隆起線で幾何学的なモチーフが区画され併行する細隆起線が充填されるもので、繊維を若干含む。表裏面に条痕ではなく擦痕が観察される。第V群土器である。

第9号土壤 (第202図9, 10)

9は併行する細隆起線が垂下するもので、胎土に繊維を若干含む。表面に条痕がみられるが、裏面は擦痕がみられる。10は細隆起線が水平に配されるもので、胎土に繊維を若干含む。条痕は表面に浅く施文されて、裏面は擦痕である。いずれも第V群土器である。

第10号土壤 (第202図11, 12)

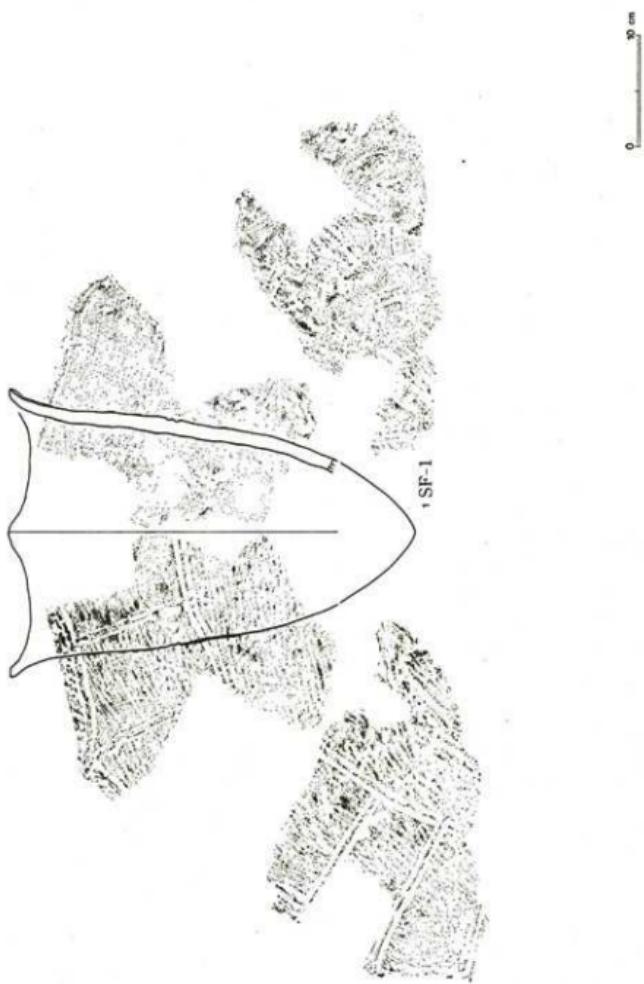
11, 12とも表裏面に条痕が施文され、胎土に繊維を含む。11の口唇部に刻目はみられない。第V群土器である。

第16号土壤 (第202図13)

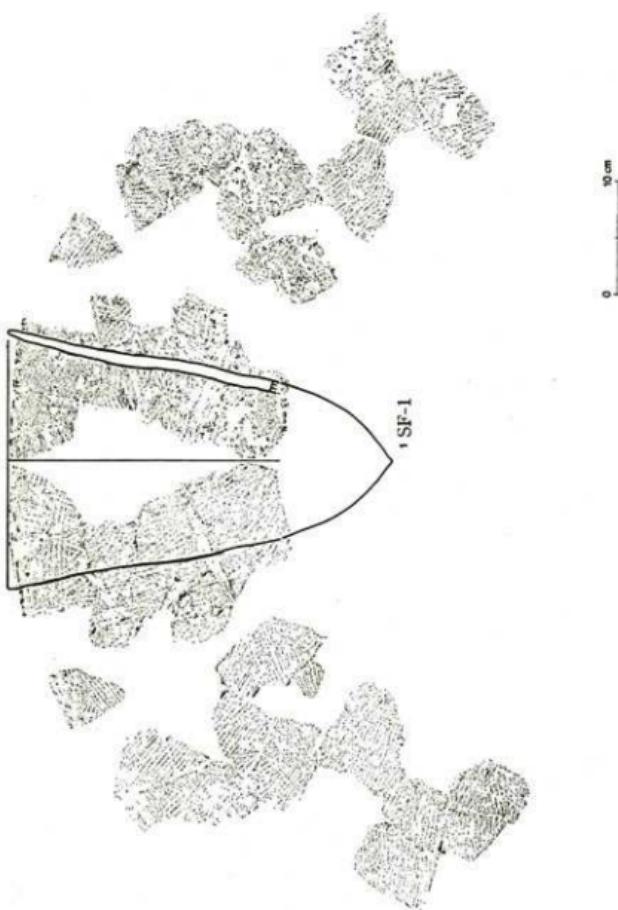
13は口縁部破片であり、刻目は施されない。胎土に繊維を含み、表裏面に条痕が施文されている。第V群土器である。

第17号土壤 (第202図14, 15)

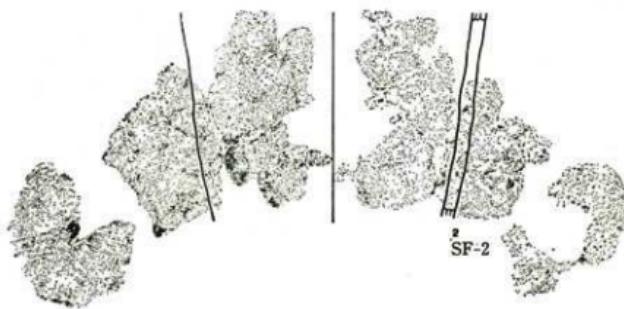
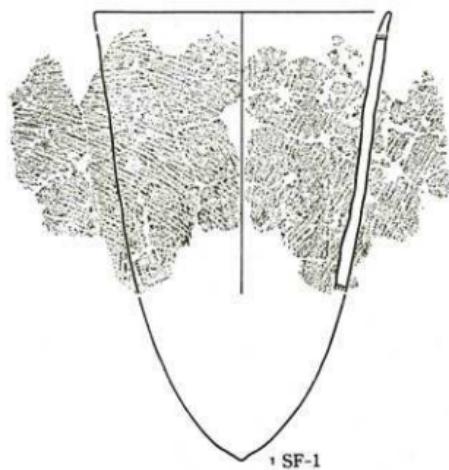
14は表面に深い、裏面に浅い条痕が施文される。15は表面に擦痕、裏面に条痕が施文される。い



第204圖 遺構出土土器實測圖(2)

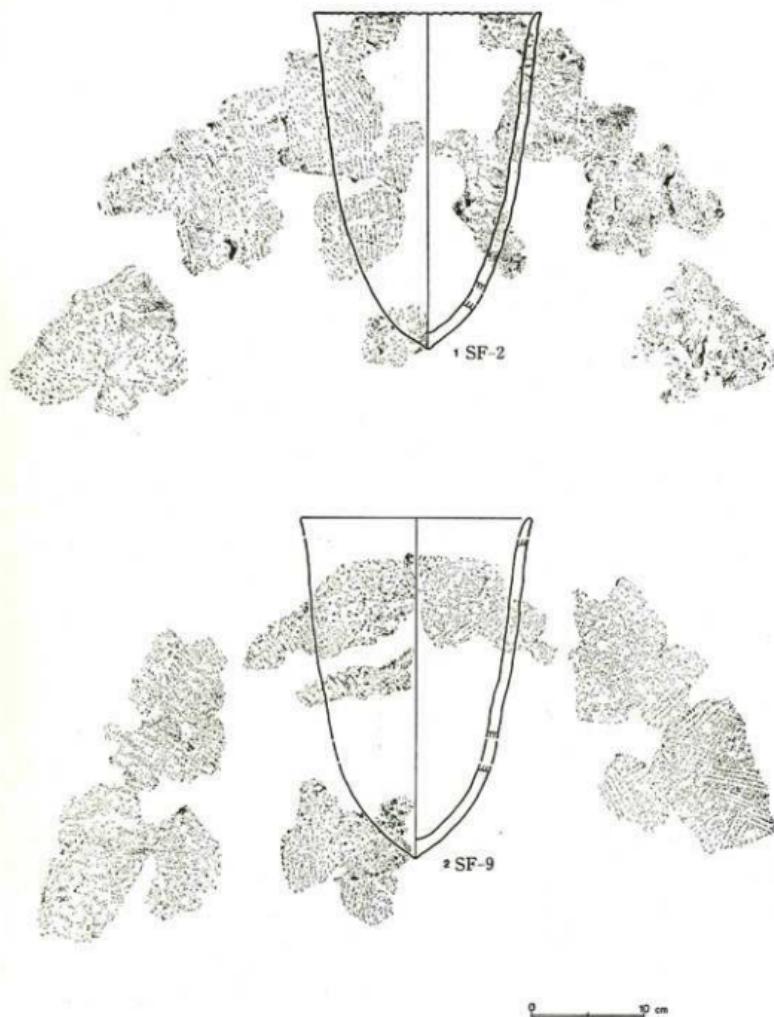


第205図 遺構出土土器実測図(3)

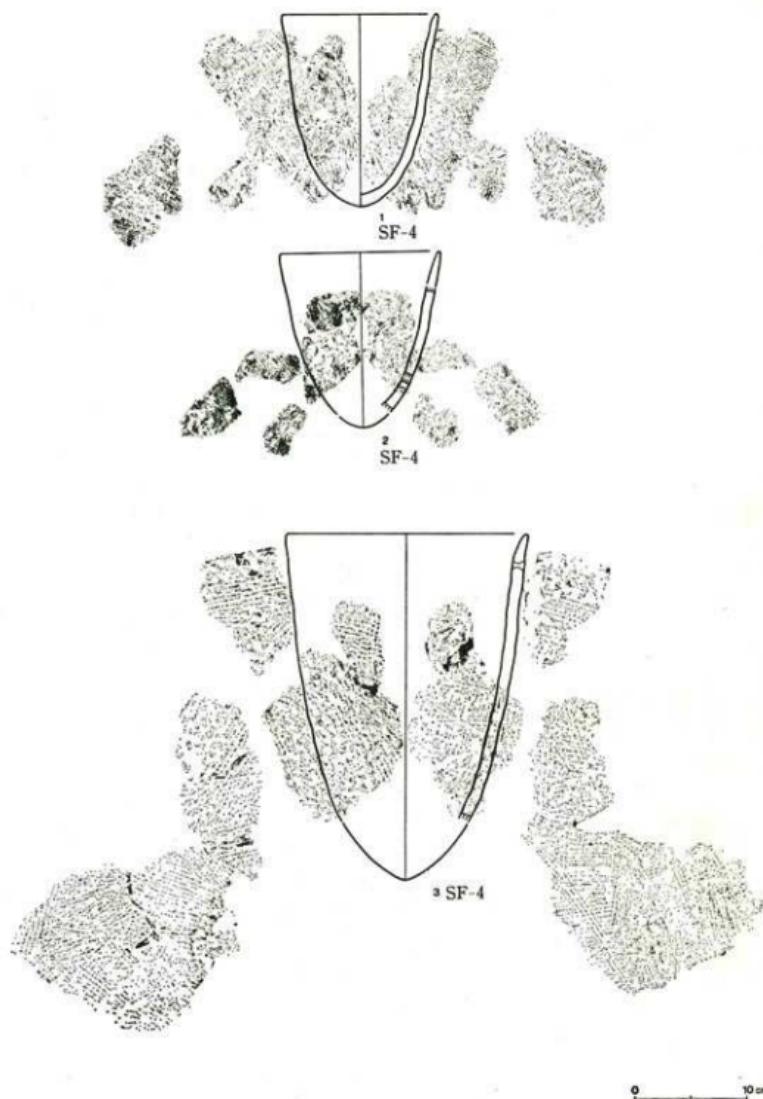


0 10 cm

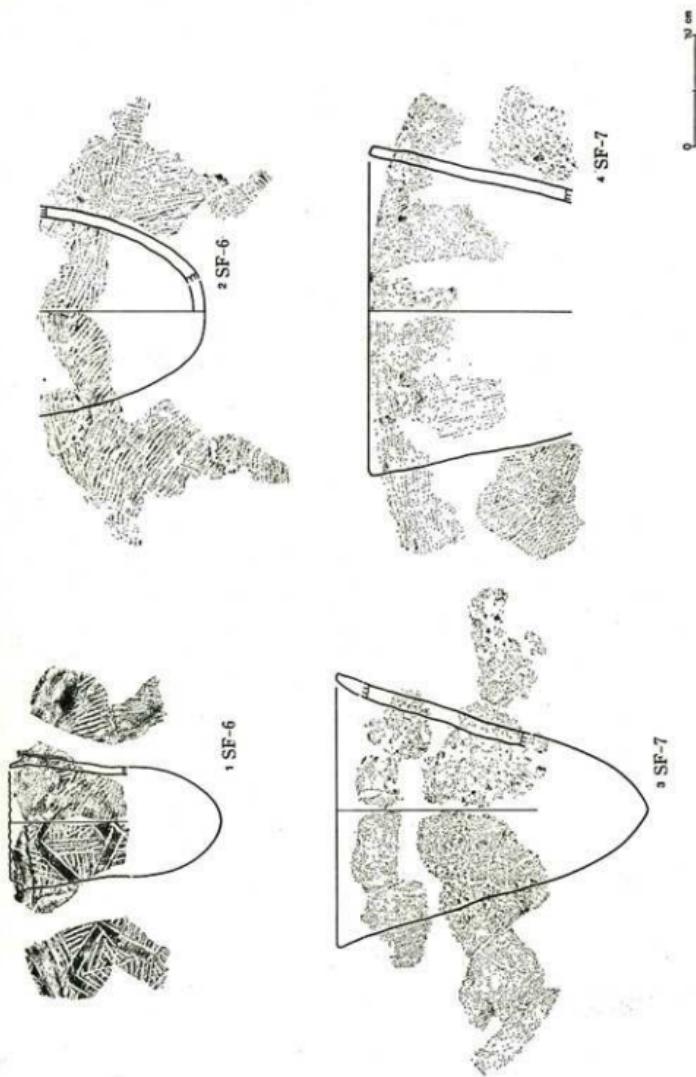
第206図 遺構出土土器実測図(4)



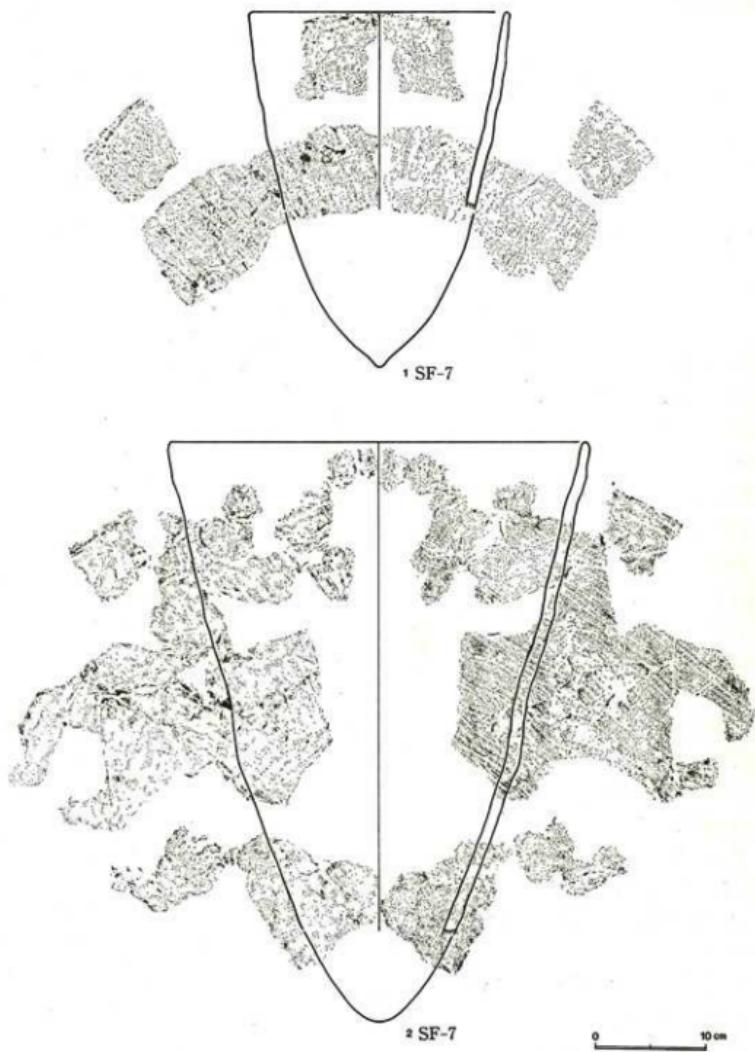
第207圖 遺構出土土器實測圖(5)



第208圖 造構出土土器実測図(6)



第209図 造構出土土器実測図(7)



第210図 造構出土土器実測図(8)

すれも繊維を含む。第V群土器である。

第19号土器（第202図16～18）

16は細隆起線で文様帶下端が分帯され、文様帶内に爪形状の刺突文が不規則に施文されている。表面は擦痕がみられ、裏面は条痕が施文される。胎土に繊維を若干含む。17は口縁部であり、口唇部に刻目は施されない。表裏面にくっきりとした条痕が施文される。18はやや鋭角な尖底部であり、表面に条痕が施文される。いずれも繊維を少量含む。第V群土器である。

第21号土器（第202図19～21）

19は無文の土器であり、表面に僅かに擦痕が認められる。繊維を若干含む。20、21は表裏面に条痕が施文されるものである。20は口唇部に押捺状の刻目が施される。いずれも繊維を少量含む。第V群土器である。

(5) グリッド出土の土器

明花向遺跡C区から出土した土器は、小破片を除いて約3,200余を数える。その大部分は第V群土器であり、他第I群～第IV群、第VI群～第XI群が少數出土している。第V群以外、図示したもののが殆ど全ての土器である。C区も遺構確認面位まである時期に削平されていることから、欠損した遺物も多かったものと思われる。以下群別に従って分類してみたい。

第I群土器（第211図1～18）

早期前半の撚糸文系土器群である。施文される繩文、撚糸文や口唇部形態によって分類できる。

第1類（1）

1点のみ出土した。口唇部が肥厚して外反するもので、3段に亘って繩文LRが施文される。口縁下に凹線状の窪みが認められるが、それ以下は剥落しており、胸部の繩文は不明である。胎土は砂粒を多く含み、石英、長石類及び黒色の粒子が目立つ。井草式に比定されるものである。

第2類（17, 18）

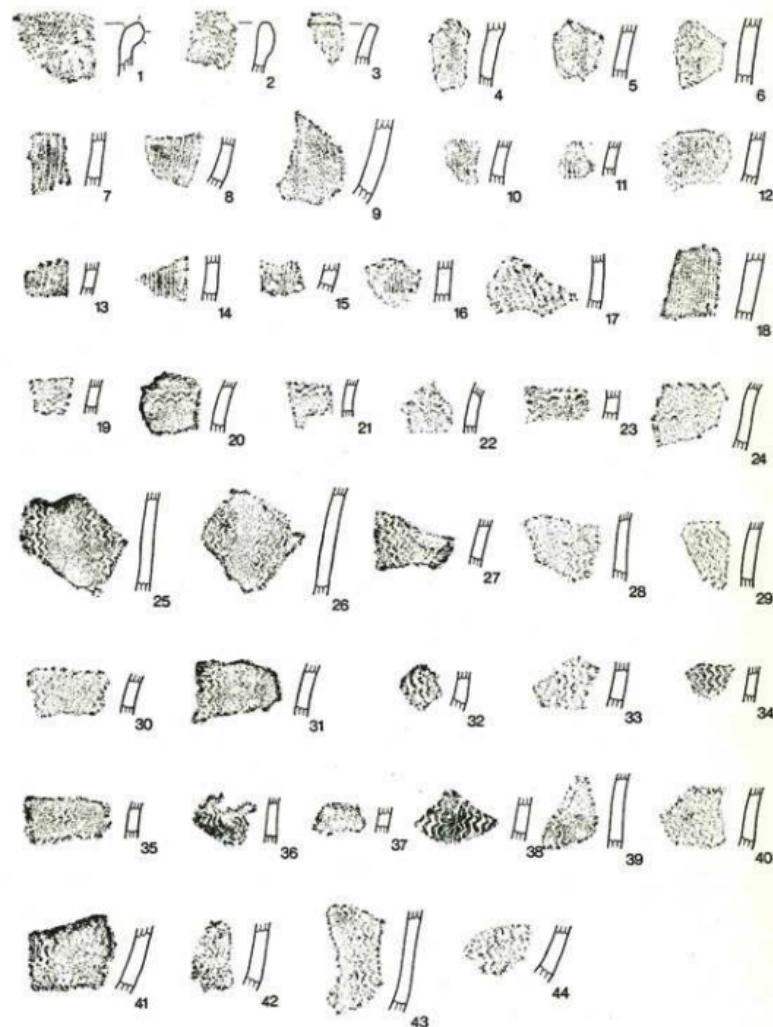
17は繩文RLが施文されており、18は細い撚糸Rが条間を密に全面施文されている。17は胎土が緻密であり、他のものと若干異なることから、この類から外れる可能性もある。18に砂粒を多く含み、白色粒子が目立つ。この類は施文の特徴から、夏島式に比定されるものと思われる。

第3類（2～16）

撚糸文が条間を開けて施文されたり、帯状施文されたりするものを一括する。2は肥厚する口縁部が無文となり、胸部に撚糸Rがやや条間を開けて施文されている。3は口唇部が丸味を帯びるが、口縁下から撚糸Rが施文される。4は口縁の肥厚部分が一部みられ、そこでは撚糸Rが斜位に施文されている。5～8胸部は条間を開けて縦に施文される。5～8はやや条間を開けた撚糸Rが帯状に施文される。7は撚りが戻りかけている。9, 10は粗い撚糸Rが施文されている。いずれも砂粒を多く含み、石英、長石類が目立つ。稻荷台式から稻荷原式にかけての段階に比定される。

第II群土器（第211図19～44）

山形の押型文土器であり、合計27点出土した。19～24は口縁部付近の破片であり、横位に山形文が帯状に施文されている。24は山形の帯状横位施文の直下に同種の山形文が帯状に垂下している。



0 10 cm

第211図 グリッド出土土器(I)第Ⅰ群・第Ⅱ群



第212図 グリッド出土土器(2) 第III群・第IV群

25~44は胴部破片であり、無文部を挟んで縦位に帯状施文されている。山形文が密に施文されるものではなく、口縁部付近で横位、胴部で縦位の構成をとるものと思われ、施文は全て帯状である。山形の単位を捉えられる破片はなく、比較的大きな破片をみると、5重単位になっていることが窺われる。器壁は口縁部付近で5mm前後、胴部で7mm前後を測る。いずれも胎土に長石・石英類が多く含み、雲母片岩が目立っている。焼成は良好であり、色調は淡橙褐色を呈する。胎土は第Ⅰ群土器と類似するが、第Ⅰ群土器には殆ど雲母片岩は含まれていない。文様構成からすると、樋沢タイプの押型文土器である。

第Ⅱ群土器（第212図1~36）

沈線文系土器群を一括する。施文具及び施文方法によって分類される。

第1類（1）

併行する細沈線で菱形状のモチーフが描出され、更に同種の沈線が斜格子状に充填されるものである。帯状格子目文に相当するものと思われる。1は表面が研磨された後に施文されているが、砂粒は沈み込んでなく、石英、長石類が器面に目立つ。焼成は良好で、色調は淡橙褐色を呈する。

第2類（2~16）

比較的深い太沈線で水平の併行沈線が描出されるものを一括した。

第1種（2~13）

半截竹管状施文具の外側を使用して施文したものと思われるものである。沈線は太く、断面は緩い「U」字状を呈する。沈線は一律的に施文されるのではなく、引きながら雜に何度も繰り返されているため、重複する箇所がみられる。2~7は口縁部破片であり、2と3の口唇部には押捺状の深い刻目が施される。口唇部形態は2、4~7が上部の平坦な角頭状を呈し、3がやや内削状を呈する。いずれも水平な太沈線が粗雑に施文されており、器面はざらついている。胎土は石英、長石類が多く含まれ、4は長石の小礫が多く含まれている。また3、5は白色粒子が目立っている。6、7の裏面は良く研磨されているが、表面は砂粒が目立ちざらついている。9、10は同一破片であり、裏面は良く研磨され砂粒は目立たないが、表面はざらついている。石英、長石を多く含む。11~13は若干薄手の土器で、表裏面の様相は他と同様である。

第2種（14~16）

半截竹管状施文具の内面を使用して、併行沈線を水平に施文するものである。14~16は同一個体と思われる。14、15は口縁部破片であり、角頭状の口唇部に浅い押捺状の刻目が施されている。胎土は砂粒を多く含み、長石、石英類は少ない。焼成は良好で、色調は暗赤褐色を呈する。裏面には整形時の凹凸がみられる。

第3種（17~23）

半截竹管状施文具の外側を使用して、浅い凹線状の沈線が施文されるものである。沈線の施文手法、胎土、色調等は第2類土器と類似する。

第1種（17、18、20、21）

口縁に水平な併行沈線が描出されるもの。17、18は口縁破片であり、平縁である。口唇部に刻目は施されない。口唇部形態は上面が平坦な角頭状を呈する。裏面はよく研磨されているが、表面は

砂粒が浮き出でて、器面はざらついている。20, 21は更に沈線が浅くなり、器面整形時の擦痕の様な沈線となっている。21には補修孔が穿たれる。

第2種 (19, 22)

浅い短沈線が連続して施文され、脣部を水平に廻るものである。施文具、施文手法は第1種と同様であるが、沈線が短く切れるものである。19は沈線間が狭く施文され、22はやや開いている。胎土は砂粒を多く含み、石英、長石類が目立ち、器面はざらついている。裏面は丁寧に研磨される。

沈線の施文方向は、口縁を上にすると右から左へと施文されており、第3類の施文方向は殆ど右から左である。

第3種 (23)

浅くやや細目の沈線文で、帯状の文様帯を持つものと思われるものである。23は水平沈線で帯状区画された内部に、異斜方向の短沈線や刺突列を施文するものである。刺突列が施文される部分は水平沈線間が狭くなるものと思われる。胎土は第1, 2種と若干異なり、石英、長石類は目立たず、白色粒子を多く含む。器面の研磨も第1, 2種よりは優える。

第4種 (27~29)

断面が「V」字状を呈する沈線が、口縁と水平に施文されるもので、併行沈線のみ施文されるものである。27は口縁部破片であり、口唇部は外削状を呈し、刻目は施されない。28の併行沈線はやや浅いもので、29のそれは深く刻み込まれている。沈線はヘラ状施文具の先端を器面に対してやや傾けて引いているため、同一施文具を使ったとしても深さと幅に変化が認められる。27~29は同一個体と思われるが、沈線に変化がみられる。胎土は細砂を多く含むが緻密であり、白色粒子が目立つ。器面は研磨というよりも擦痕が認められ、若干ざらついている。

第5種 (24~26, 30, 32)

太沈線と細沈線が組み合わされ、部分的に刺突文が施文されるものである。胎土は緻密であり、第2, 3種と異なる。器面はよく研磨され、砂粒によるざらつきはみられない。24, 25, 30, 32は同一個体と思われる。凹線状の太沈線と断面三角形状の細沈線が組み合はさって水平に施文され、部分的に刺突列が施文される。焼成は良好であり、色調は赤褐色を呈する。31は沈線と刺突がみられるもので、刺突は「D」字状となっている。

第6種 (33~36)

無文土器を一括する。

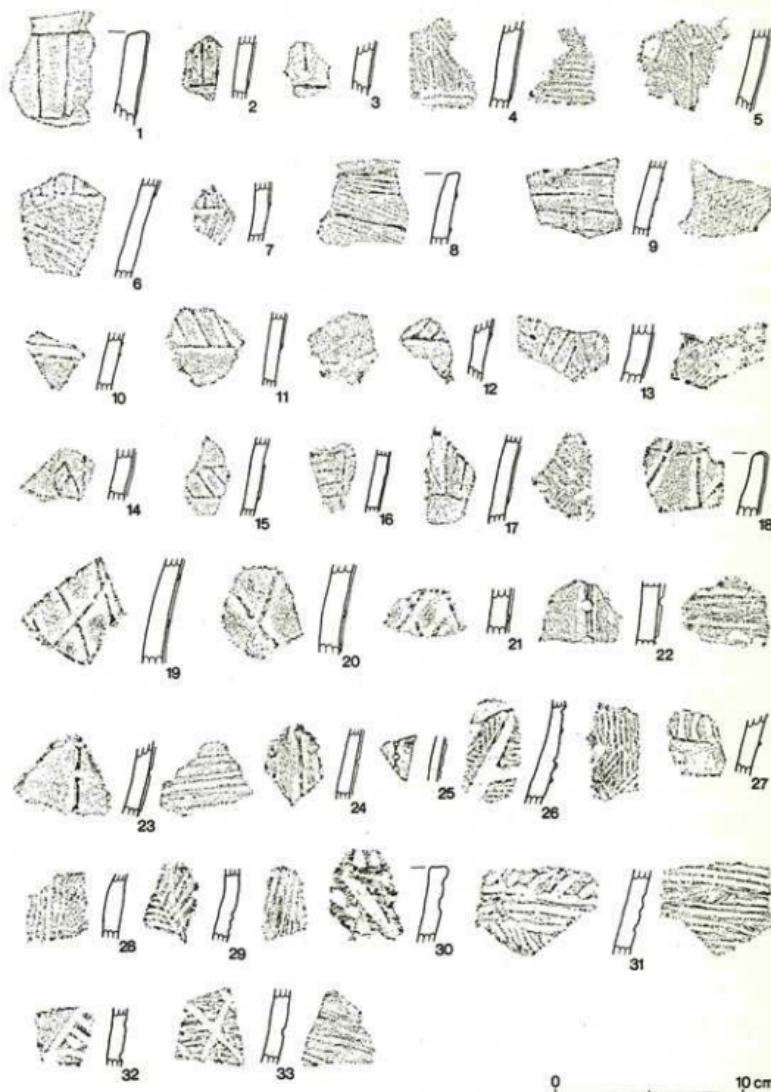
第1種 (33~35)

外削状の口唇部を持ち、器面に擦痕が認められるものである。胎土及び器面整形等、第3種と酷似する。34は一部分に短沈線状の痕跡がみられるが、大部分は擦痕である。34, 35は同一個体と思われる。いずれの口唇部にも刻目は認められない。

第2種 (36)

外削状口唇部の表裏端部に刻目が施されるものである。器面は表裏面とも良く研磨されており、色調は赤褐色を呈する。胎土は砂粒を多く含むが緻密であり、白色粒子が目立つ。

第Ⅳ群土器 (第212図37~42)



第213図 グリッド出土土器(3) 第V群

貝殻文系土器群を一括する。貝殻文施文手法によって分類できる。

第1類 (37)

貝殻腹縁文が横位に施文されるものである。37の貝殻腹縁文は緩い波状を呈するものと思われる。器面に対して、浅く施文されている。口縁は波状を呈し、口唇部裏の端部に刻目が施文されている。胎土は砂粒を多く含むが緻密であり、石英、長石類が目立つ。器面は研磨されており、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。

第2類 (38)

口縁下に1条の貝殻腹縁文が施文されるものである。38は緩い波状を呈するものと思われ、平坦な口唇部には刻目は施されない。胎土は緻密であり、白色粒子が目立つ。表裏面ともヘラ工具による擦痕がみられる。

第3類 (39, 40)

貝殻腹縁文が縱に施文されるものである。39, 40は同一個体と思われる。胎土は緻密であり、色調は橙褐色を呈する。表面は良く研磨されているが、裏面は荒れている。

第4類 (41, 42)

貝殻腹縁をロッキングしながら鋸歯状文を描くものである。打越式とは異なり浮島式と思われるが、胎土・顔付きが異なる。41はロッキングの幅が広く、器面に対して貝殻をやや斜めに当てている。破片の下部に押し引き状の刺突列がみられる。42はロッキングの幅が狭い。いずれも胎土は緻密であり、41橙褐、42は赤褐色を呈する。

第V群土器 (第213図1~33、第214図1~17、第215図1~16)

条痕文系土器群前半期の土器であり、文様の有無、施文手法、モチーフの相違で類別される。

第1類 (第213図1~21)

細隆起線文のみでモチーフが構成されるものあり、モチーフの相違によって細別される。

第1種 (1~7)

胴部に1本の細隆起線が通り、それに向って口縁から併行する細隆起線が垂下されるものである。1は口縁部破片であり、やや太目の細隆起線を口縁から併行させて垂下させている。口唇部は角頭状を呈し、緩い波状口縁を呈するものと思われる。器壁は厚く、やや大形の土器であり、表裏面とも横位の条痕が認められる。纖維を少量含む。2~7は若干薄目の器壁を呈するもので、2~4, 6, 7は文様帶の下端を示す破片である。いずれも胴部に通る細隆起線に向って、併行細隆起線が垂下されている。胎土に皆若干の纖維を含む。5は垂下される細隆起線の幅が広い。全て表裏面に浅い条痕が認められる。

第2種 (8~10)

水平の併行する細隆起線が配されるものである。8は口縁部であり、内削状の口唇部を呈する。刻目は認められない。表裏に横位の条痕が施文される。纖維を若干含み、砂粒を多目に含む。9, 10は併行する細隆起線が水平に配されるもので、9は間隔が広く、10は狭い。両者とも纖維を若干含むが、9は表裏面に条痕が、10は擦痕が施文される。

第3種 (11~17)

細隆起線で幾何学的な区画を施した内に、併行細隆起線を充填するものである。11, 12は文様帶下端を示す破片であり、胴部の細隆起線に向って斜位の併行細隆起線が施文されている。両者とも繊維を若干含み、表裏面に擦痕が観察される。13は異方向の細隆起線が組み合わさるものであり、14, 15は併行細隆起線間に、斜位の細隆起線を梯子状に充填するものである。16は垂下する細隆起線と垂直方向に併行する細隆起線が配されるものであり、17は文様帶下端の細隆起線がやや弯曲し、曲線状になっている。いずれも繊維を若干含むが、胎土は紙密である。13, 17は裏面に条痕が施文されるが、14~16は表裏面とも条痕ではなく擦痕が認められる。

第4種 (18~21)

やや太目の細隆起線で、斜格子目状のモチーフが描出されるものである。18は口縁部であり、丸頭状を呈する口唇部の上から細隆起線が貼付されている。口縁は緩い波状を呈する。裏面には条痕が施文されるが、表面は条痕が磨り消されている。繊維を少量含む。19~21はやや太目の細隆起線で斜格子目文が描出されており、左傾する細隆起線が優先している。いずれも繊維を少量含み、裏面に条痕が施文されている。18~21は同一個体の可能性が高い。

第2類 (第213図22~25)

文様帶が垂下する隆帶によって分割されるものであり、隆帶上には刻目が施されるものである。22~25の隆帶上の刻目は、丸拂状施文具を隆帶と直角に押捺したものである。24は2本の隆帶が垂下する。他は1本しか認められないが、2本であつ可能性が高いと思われる。22, 23の裏面には条痕が施文されるが、表面は擦痕である。24は表裏面に条痕が認められる。25は表裏面とも擦痕である。

第3類 (第213図26, 27)

細隆起線で区画された内部に、沈線が充填されるものである。26は細隆起線区画内に細沈線が充填されている。繊維を少量含み、裏面に条痕が施文される。27細隆起線区画内に太目の沈線が充填される。繊維を若干含み、裏面に条痕が認められる。

第4類 (28, 29)

細沈線で文様が描出されるものである。28は細隆起線が4本垂下して文様帶を分割するものと思われ、区画内は分割線より細い沈線が充填される。裏面に擦痕がみられ、繊維を若干含む。29は細沈線で区画され、区画線よりやや太い沈線が充填されている。裏面に条痕が施文され、繊維を若干含んでいる。

第5類 (31, 32)

太沈線で区画され、区画に同種の太沈線を施文するものである。31は併行する3本の太沈線で文様帶が水平に分割されており、同種の太沈線が上下に施文されている。裏面には整然とした横位の条痕が施文される。繊維を少量含む。32は太沈線で幾何学的な区画が成され、同種の太沈線が充填されている。繊維を少量含み、裏面には条痕が微かに認められる。

第6類 (33)

太沈線で斜格子目文が描出されるものである。33の1点のみ出土したが、表裏面に横位の条痕が施文されている。斜格子目文は右傾する沈線が後から施文されている。胎土に繊維を少量含む。

第7類 (30)

太沈線で区画され、同一施文具によって刺突列が施文されるものである。30は口縁部であり、口唇部には押捺状の刻目が施される。胎土に少量の繊維を含み、裏面に条痕が施文されている。刻目、区画、刺突は同一施文具によって施文されている。

第8類 (第214図1~17、第215図1~16)

文様が描出されなくて、条痕、擦痕等が施文される所謂無文土器である。条痕施文手法等で類別できる。

第1種 (第214図1~17、第215図1~2)

表裏面に条痕が施文されるものである。

a…口唇部に刻目の施されるもの (1~5)。1, 3, 4は口唇部に深くて幅の広い刻目が施文されるものであり、2は角棒状の施文具で刻目が施文される。5は太くて浅い刻目がみられる。条痕は口縁部付近では殆ど横位に施文される。いずれも繊維を少量含む。

b…貝殻背圧痕が口唇部に施文されるものである (6~9)。6, 8, 9は貝殻背圧痕が、深くくっきりと施文されるものであり、7は浅く施文されている。いずれの表裏面も条痕は横位に施文される。繊維は少量含まれる。

c…口唇部に刻目の施文されないものである (10~15)。10, 12, 14の口唇部上面は平坦にナデられており、11は丸頭状、13は先細りの丸頭状、15は肥厚して外反する口唇部形態を呈する。10, 11, 12, 13は表裏とも条痕が縱に施文され、13, 15は横に施文されている。

d…脇部破片であり、口縁部が不明なもの (16~17、第215図1, 2)。くっきりとした条痕が16では縦位に、17では横位に施文される。18~21は細かな条痕が施文される。第215図1, 2は表面は条痕が明瞭であるが、裏面は僅かに認められる。いずれも繊維を少量含む。

第2種 (第215図3~5)

表面に条痕が施文され、裏面が無文となるものである。無文といつても器面整形の擦痕は認められる。3は浅条痕が、4, 5は深くて明瞭な条痕が施文されている。いずれも繊維を少量含む。

第3種 (6~8)

裏面に条痕が施文され、表面が無文となるものである。6, 8は太い条痕が施文され、7は細い条痕が施文される。表面はいずれも器面整形の擦痕がみられる。

第4種 (9~16)

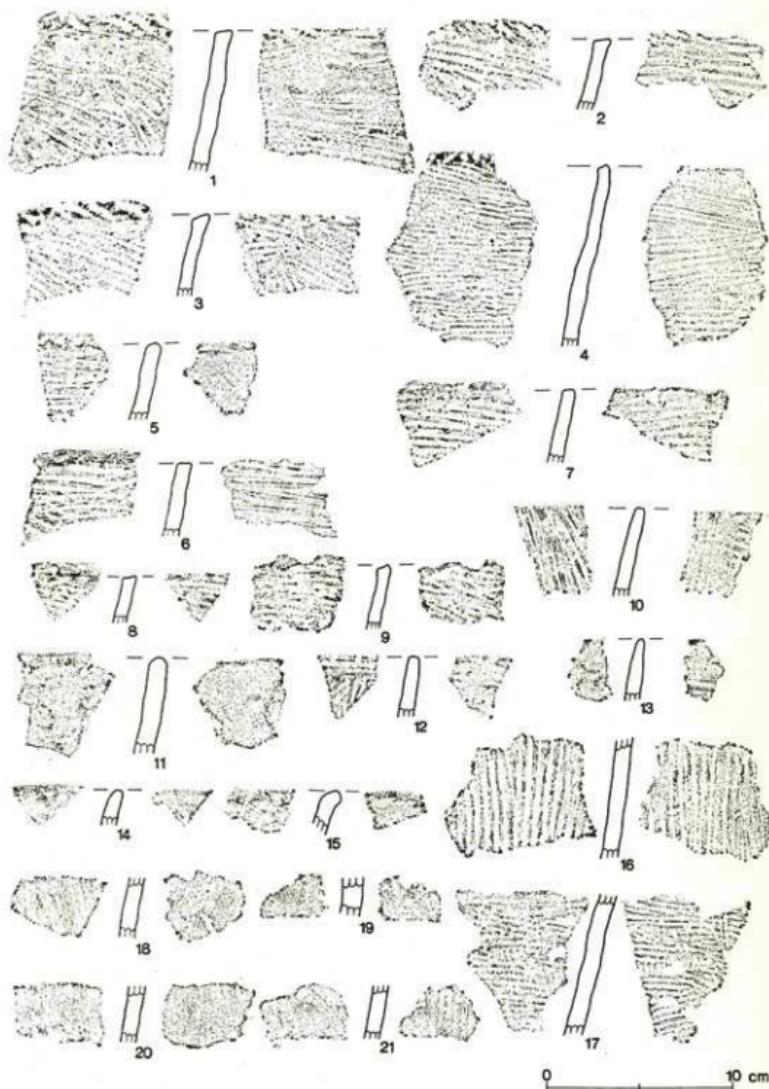
条痕が施文されない土器を一括する。いずれも繊維を含む。9, 10は口縁部で、角頭状の口唇部形態を呈するが、刻目は施されない。11は丸頭状の口唇部を呈し、指頭による整形痕がみられる。12, 13, 14の器面は擦痕が認められ、15, 16は幅が広く丸味のある工具で整形されている。器面が丁寧に整形されるものと、雑なものとが存在する。

第VIII群土器 (第215図17~28、第216図1~32)

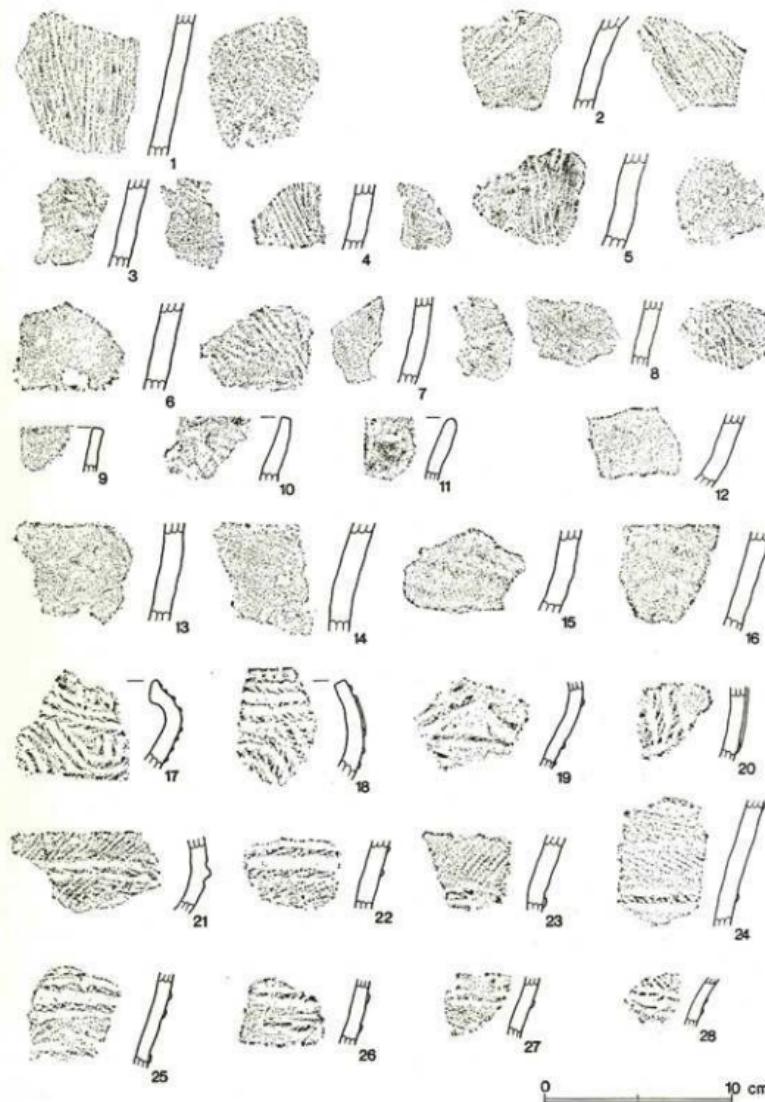
前期後半の諸畿b式からc式にかけての土器群を一括する。

第1類 (17~28)

浮線文系の土器群を一括する。17は波状口縁のキャリバー形深鉢土器である。口縁に沿って3本



第214図 グリッド出土土器(4) 第V群



第215図 グリッド出土土器(5) 第V群・第VI群

の隆起線が配され、口縁部の文様帶内に曲線を主にした自在なモチーフが描かれる。口唇上にも隆起線が施文されている。18は平線のキャリバー形深鉢土器である。口唇部には押捺状の刻目が施されている。口縁に沿って3本の隆起線が配され、以下曲線を主体としたモチーフが描かれる。隆起線の上には刻みが施されている。19, 20は頸部付近の破片であり、19は曲線が主体となり、20は3本の隆起線が垂下している。隆起線上には刻みが施される。

21~28は浮線が横位に施文されるものであり、主に頸部以下の破片と思われる。21, 23, 26, 28は隆起線の上に押捺状の刻みが施されるが、22, 24, 25, 27は隆起線上に縄文が施文されている。21~23は地文に縄文LRが施文され、25~28は縄文RLが施文されている。

第2類（1~6）

半截竹管状施文具による連続爪形文が施文されるものである。

第1種（1~4, 6）

併行沈線でモチーフが描かれ、沈線間に半截竹管状施文具による連続爪形文が施文されるもの。a…「D」字状の爪形文がみられるものである。1, 2は同一個体であり、半截竹管状施文具の外側を器面に向けて押し引き状に施文されるものである。爪形文の間隔はやや開け気味になる。

b…「C」字状の連続爪形文が施文されるものである。半截竹管状施文具の内面を器面に向けて施文するものである。3は器面の剥落が著しいが、併行する爪形文間に刻み状のやや大き目の刺突がみられる。4は施文具を器面に対して立て気味に施文しており、地文は縄文RLである。6は爪形文が右から左へ施文される。

第2種（5）

併行沈線が施文されずに、連続爪形文が施文されるもの。5は地文に縄文LRが施文され、連続爪形文が施文具をかなりねかせて施文されているものであり、爪形文の間隔は狭い。

第3種（7~11）

併行沈線のみで文様が描出されるものである。7, 8は頸部付近の土器であり、併行沈線は半截竹管状施文具によって施文される。7は併行線の間隔が狭く、8は広い。地文は7, 8とも縄文RLRが施文されている。文様モチーフは曲線を主体とするもので、第1, 2類と類似する。

9~11は破片内に直線の併行沈線のみみられる破片である。いずれも縄文が施文され、11は復節RLRが施文されている。他は不明瞭である。

第4類（第216図12~14）

浮線文を有する浅鉢を一括する。器形により分類される。

第1種（12, 13）

口縁が内折する浅鉢土器である。12, 13は同一個体と思われ、口縁と水平に2本の浮線文が配されるもので、浮線上に刻みは施されない。12から推定すると、口縁は緩い波状を呈する。

第2種（14）

口縁が開く浅鉢土器である。口縁部内面に浮線文が1本廻り、それに向って短浮線が垂下している。浮線上には部分的に刻みが施される。口縁は折り返し状を呈し、肥厚する部分に押捺が加えられている。この破片は、第1号併居跡出土土器（第198図1）と同一個体と思われ、やはり丹彩が



第216図 グリッド出土土器(6) 第Ⅲ群

施される。

第5類（第216図15～25）

集合沈線が帶状施文されるものを一括する。この集合沈線は梯齒状施文具によるものではなく、半截竹管状施文具によるものである。集合沈線の帶状施文は段構成をとるものと思われ、水平方向と斜方向又は羽状の帶が交互に施文されるものである。15は羽状構成をとる帶と水平集合沈線とが段構成をとる。16～18は斜行沈線と水平沈線とが組み合わるものである。19は口縁部破片である。20は沈線が水平方向、21、22は羽状を呈する。24、25は底部であり、24は底部直上まで沈線が施文される。25は胴下半が強く括れる器形を呈し、括れ部に細沈線が帶状施文される。また、その上の段では斜沈線が施文されている。

第6類（第219図31、32）

浮島式土器を一括する。2点のみ出土した。

第1種（31）

貝殻旗縁をロッキングして梯齒状文を呈するものである。貝殻は器面に対してやや斜めに施文されている。胎土に砂粒を多く含み、白色粒子が目立っている。

第2種（32）

半截竹管状施文具の支点を変えながら施文することによって、変形の爪形文が施文されるものである。32は不明瞭であるが、諸磯式とは異なるものである。

第7類（27～30）

器面全面に梯齒状施文具による細沈線が施文され、短浮線が貼付されるものである。

第1種（27、28）

棒状の短浮線が貼付されるものである。27は2cm位の浮線であり、半截竹管状施文具による細かな刻みが施される。施文具は器面にやや立ち気味に押し引かれている。細沈線は口縁に併行して施文されている。28は1cm弱の短浮線が貼付されており、刻みが施されている。地文沈線は縦位に施文されている。

第2種（29、30）

円形貼付文がみられるものである。29は縦位の、30は横位の細沈線が施文されており、豆粒状の貼付文である。

第8類（第216図26、第217図1～4）

繩文のみ施文される土器を一括する。第216図16、第217図4は繩文LRが、同1、2は繩文RLが、同3は羽状繩文が施文されている。

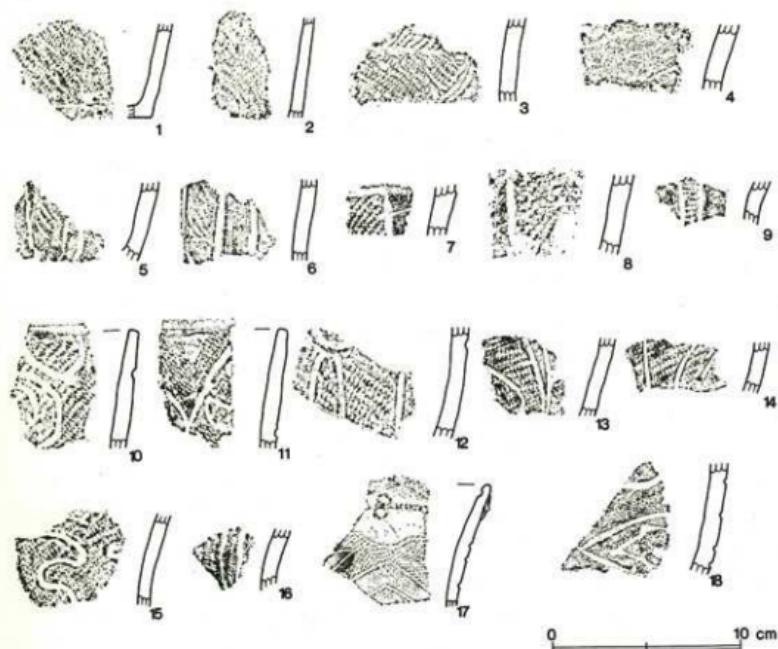
第Ⅸ群土器（第217図5～9）

中期後半加曾利EⅡ式土器を一括する。全て、胴部破片であり、磨消懸垂文帯を持つものである。5は複節LRL、6はLRL、7～9は繩文RLが施文されている。

第Ⅹ群土器（第217図10～17）

後期初頭、掘之内式土器を一括する。

第1類（10～16）



第217図 グリッド出土土器(7) 第Ⅸ群～第XI群

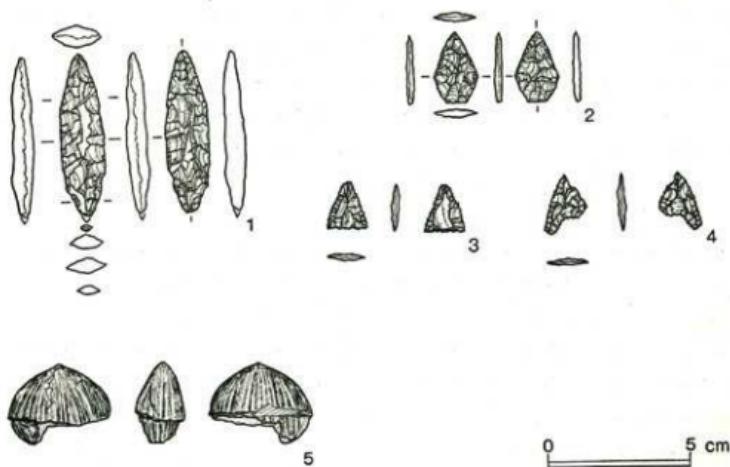
掘之内Ⅰ式に比定される土器群である。1は口縁部に半円状のモチーフが描かれ、それよりやや下に同心円状のモチーフが描出されている。11は口縁下のモチーフと下位のモチーフが連結されるものである。12は円形モチーフ下に「匚」字状の懸垂文が垂下する。10, 11は地文に繩文LRが、12はRLが施文される。13, 14は曲線モチーフが描出され、15は蛇行沈線が垂下する。また、16は併行沈線が垂下するものである。いずれも繩文LRが施文された後、沈線が描出されるものである。

第2類 (17)

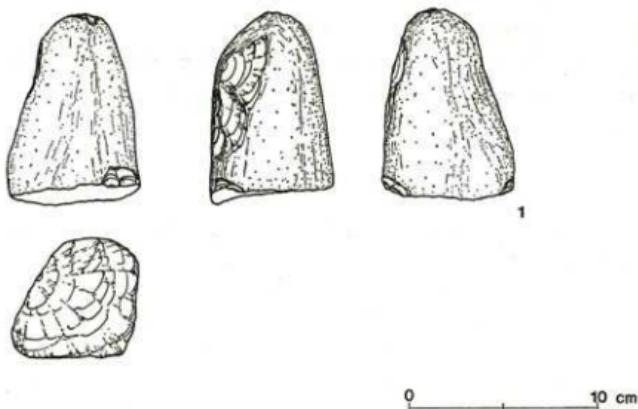
口縁が外反する深鉢形土器であり、口縁裏側に沈線が1条巡る。口縁下に刻目の施される隆帯が1本巡り、部分的に「8」字状の貼付文がみられる。腹部は磨消繩文帯による菱形状のモチーフが描出される。掘之内Ⅰ式に比定されるものである。

第Ⅺ群 (第217図18)

晩期安行式に比定されるものである。1点のみ出土であるが、18は沈線で三叉状入組文が描出されるものである。文様内に点列等は認められない。赤褐色を呈し、堅緻な土器であるが、裏面は荒れている。



第218図 土製品・石器(1)



第219図 石 器(2)

栗形土製品（第218図5）

C-3-6グリッドから出土したものであるが、栗の形をした土製品である。高さ3cm、幅3.6cm、厚さ1.8cmを測る。5は表面に栗の渋皮の痕跡が認められ、本物の栗で型取ったことが理解される。栗をへたの部分で二つに分け、身とへたの部分に土を詰めて再度合わせたものであり、剥離痕及び合せ目に見られる粘土の隆起で製作手法が理解される。栗形土製品の出土した地区では縄文時代の遺構しか検出されておらず、胎土も縄文時代のものと類似する。

(6) 石器

本遺跡から出土した石器は僅か5点しかなく、後世の攪乱によりかなりの遺物が損失してしまったと言えよう。また、遺構内からも石器は殆ど出土していない。

A類…尖頭器（第218図1）

1点のみ出土した。1は基部が若干括れる有舌尖頭器である。頁岩製であるため風化が著しく、また、器表は後世につけられた多類の擦痕がみられ、剥離痕の切り合い関係は不明瞭である。草創期所産と思われる。

B類…五角形鐵（第218図2）

1点のみの出土であるが、チャート製の石鐵である。かなり薄身に成形され、周辺部の加工も細かく丁寧である。A類と同様、草創期所産と思われる。

C類…石鐵（第218図3、4）

二等辺三角形を呈する石鐵である。3は黒曜石製であり、基部の抉込みは認められない。4はチャート製であり、基部は深く抉れる。片脚部が欠損する。

D類…スタンプ形石器（第291図1）

1点のみの出土である。四角柱状の礫が使用されており、切断面は一度の加熱によるものである。握りの部分は粗い調整剥離が施される。石材は硬質砂岩が使われている。

（金子 直行）

VII 明花上ノ台遺跡の調査

1. 遺跡の概観と調査経過

明花上ノ台遺跡は、明花向遺跡とは支谷を挟んで西方へ約0.4kmを隔てている。大宮台地の南垂する一舌状台地最先端部に位置し、標高約14m、沖積低地との比高8~9mを計る。表土(40~60cm)下はきれいに削平されており、一部はハードローム層にまで達している。さらに多数のムロ穴による擾乱、土砂採取のための台地南端部急崖化等、環境の破壊は既に著しいものとなっていた。

検出された遺構は縄文時代早期の住居跡1軒、炉穴2基、土墳8基、近世の溝5条、土墳16基他である。近世の遺構は他の遺跡と同様のものであるが、溝は直線的で区画を思わせる。土墳の覆土も自然堆積とは思われず、ローム塊が多量につめられたものであった。尚、先土器時代についてはグリッドによる試掘を広範に行なったが、遺物は何ら見られなかった。

本遺跡の土層序も明花向遺跡C区に準ずるが、以下にその概略を示す。

第Ⅰa層 茶褐色土層 しまり・粘性ともに弱くバサバサする。再堆積土層。

第Ⅰb層 茶褐色土層 第Ⅰ層に近似するが、ローム粒を多含して粘性を帯びる。下層との境界が削平面となる再堆積土層。

第Ⅱ層 茶褐色土層 しまり・粘性が強く、縄文式土器を包含する。下層へは漸移的変化となる。

第Ⅲ層 褐色土層 ソフトローム層で、下層との境界は凹凸が激しい。

第Ⅳ層 褐色土層 ハードローム層

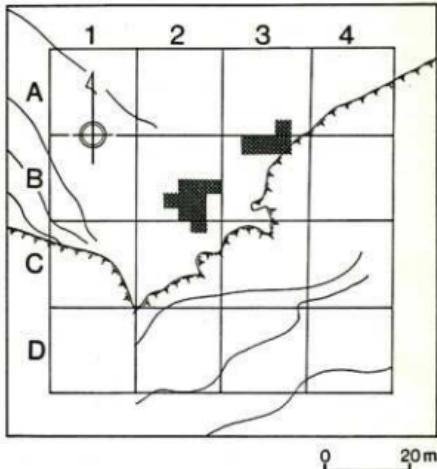
に相当するが、10~15cmと薄い。

第Ⅴ層 暗褐色土層 第Ⅰ黑色帯に当たると思われるが、色調が明るいために先後層との境界は不明瞭である。

第Ⅵ層 褐色土層 先後の黒色帯に挟まれるため、その中間的な土層となる。第Ⅴ層よりも若干色調が明るくなる。

第Ⅶ層 暗褐色土層 第Ⅰ黑色帯上部に相当すると思われるが、下部との境界は不明確である。

第Ⅷ層 暗褐色土層 第Ⅰ黑色帯下部に当たると思われるが明



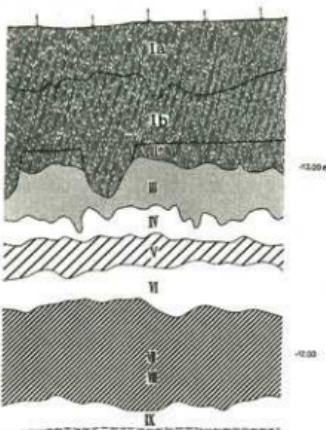
第220図 明花向上ノ台遺跡先土器時代調査区

確ではない。

第Ⅳ層 黄褐色土層 粘性に優れるが、全体にやや柔軟な土層となる。先土器時代の確認は本層の途中まで行った。

調査は昭和56年4月より遺跡中央部から西へ向けて開始した。西側部分は近世の土壤が密集する他、風倒木痕と思われるものが南端に添って分布するため、削平以前の造構は破壊されつくしているものと思われた。しかし、4月7日に1基は風倒木痕、もう1基は近世土壤のそれぞれ底面より縄文時代早期の炉穴を検出した。これらの精査とともに造構確認を中央から東部へ向け、4月22日には鶴ヶ島台式土器を伴う住居跡を検出する。さらに4月30日に条痕文土器を出土する土壤を検出する。該期の集落が台地南端へ延びていたことが想定される。5月21日、遺跡測量を終えて航空写真撮影を行う。ただちに先土器時代の調査に着くが、5月29日に何ら遺物の出土を見ないまま、明花上ノ台遺跡すべての調査を終了する。

(飼持 和夫)



第221図 明花向上ノ台遺跡層序

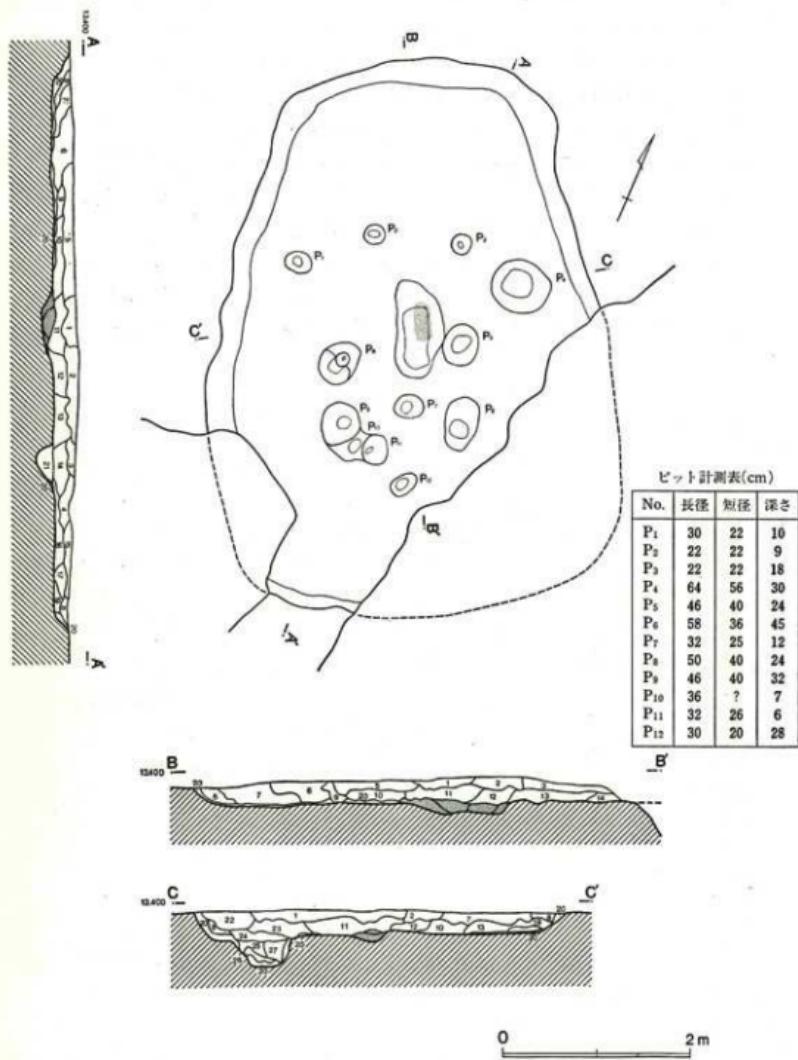
2. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡 (S I-1) (第222・223図)

B-3-13グリッドを中心に位置しており、台地の掘削やムロ穴によって南側を大きく切断されている。プランはやや四辺の張る隅丸長方形を呈するものと思われ、長軸6.0m、短軸4.3mを測る。主軸方向はおよそN-25°-Wを指す。

- 覆土は以下の27層に分けられるが、このうち第21層はP₂₁、第24~27層はP₄に伴うものである。
- 第1層 黒褐色土 きめ細かく、しまり良い。微量の焼土・ローム粒を含む。他層との境界は明瞭。
 - 第2層 明茶褐色土 きめやや粗いが、しまり良い。ローム粒を多く含む。
 - 第3層 暗褐色土 しまりは良いが、きめ粗くボソつく。ローム粒を若干含むが概ね単一的である。
 - 第4層 茶褐色土 きめやや粗くボソつく。褐色土で構成され、混有物も少ない。
 - 第5層 暗黒褐色土 きめやや粗いがしまり良い。赤褐色土ブロックを多含し、斑文となる。
 - 第6層 褐色土 きめ細かくしまりも良い。ロームブロック溶混し、やや斑文となる。
 - 第7層 茶褐色土 きめ細かくしまりも良い。茶褐色土ブロックを多含し、斑文も鮮かとなる。
 - 第8層 茶褐色土 しまり弱くバサつく。ローム溶混が多く黄色味が強い。
 - 第9層 茶褐色土 赤色土～褐色土のブロックを多含するが、不明瞭である。
 - 第10層 赤茶褐色土 しまりは良いが、きめ粗くボソつく。褐色土ブロックを含みやや斑文となる。
 - 第11層 暗赤茶褐色土 きめ細かいが、しまりやや弱くバサつく。焼土・ローム粒を良く含む。
 - 第12層 茶褐色土 褐色土の単一的土層となる。焼土・ローム粒も増す。
 - 第13層 暗赤褐色土 しまりは良いが、きめ粗くボロボロ。焼土・ローム粒を含む。
 - 第14層 暗茶褐色土 しまりは良いが、きめやや粗くボソつく。ローム・炭化物粒を良く含む。
 - 第15層 明茶褐色土 きめやや粗くしまりも良い。ロームブロックを若干含む。
 - 第16層 茶褐色土 きめ粗いがしまり良い。ロームブロックが明瞭で黄色味が強い。炭化物を含む。
 - 第17層 褐色土 きめ細かいが、しまり弱くややバサつく。他層とは境界明瞭。
 - 第18層 黄褐色土 きめ細かいがしまり弱くバサつく。ロームの影響が強く黄色味を帯びる。
 - 第19層 黄褐色土 ソフトローム的で床の溶軟化層と思われる。
 - 第20層 暗黄褐色土 ほとんどロームによる土層。しまり・粘性ともに強い。
 - 第21層 暗黄褐色土 しまり悪くバサバサ。ローム粒を多含し、汚れた感じとなる。
 - 第22層 暗茶褐色土 きめ細かいがしまりは弱い。ロームブロック溶混し、ローム・焼土粒を含む。
 - 第23層 明茶褐色土 きめ細かく、しまりも良い。ロームを薄く溶混し、単一的となる。
 - 第24層 暗褐色土 きめ細かく、しまり・粘性が良い。薄くロームを溶混し、焼土粒を含む。
 - 第25層 茶褐色土 きめ細かいが、しまり・弱くややバサつく。焼土ローム粒を良く含む。
 - 第26層 茶褐色土 しまり・粘性は良い。ローム溶混は全体的となる。
 - 第27層 褐色土 しまり弱いが、きめ細かく、粘性は良い。ロームを薄く溶混し単一的となる。



第222図 第1号住居跡 (S I - 1)

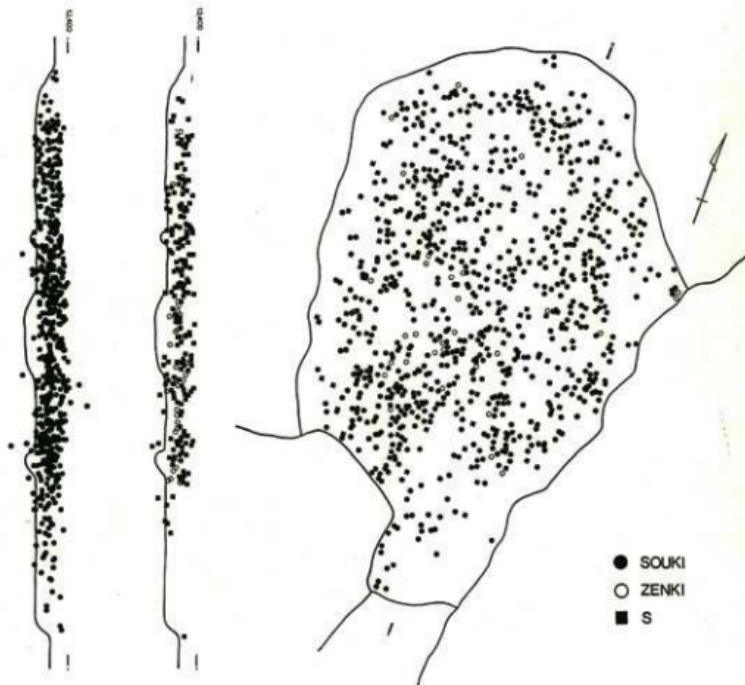
床面はローム層に掘り込まれており、造構確認面からの深さは約24cmを測る。全体は概ね平坦で良好しまっており、特に炉跡の周辺では硬く踏み固められている。

壁と床面のなす屈曲は弱く、四壁ともかなり緩やかな立ち上がりとなっている。

ピットは炉跡を取り囲むようにして12個が検出された。このうちP₅・P₆・P₈・P₉は規則的に近似しており、その配置にも規則性が認められる。これに比してP₄はかなり大形であり、やや異質な存在となっている。あるいは柱穴以外の施設であろうか。

炉跡は住居跡中央部に営まれ、径104×50cm、深さ約14cmを測る。焼土層はほぼ炉跡と同規模を有し、黒色土粒・焼土粒・焼土ブロックで構成される。炉床の赤くパリパリとなる範囲はごく狭く、他はロームがわずかに硬化した程度に止どまっている。

遺物は住居跡全体に分布しており、早期鶴ヶ島台式と前期黒浜式の土器が出土している。傾向として前期のものはやや床面から浮き、早期のものは柱穴中から覆土上位にまで及んでいる(第223図)。故に本跡の構築は鶴ヶ島台式土器に伴う時期と考えられる。



第223図 第1号住居跡遺物分布状態

(2) 炉穴

第1号炉穴 (S F-1) (第224図)

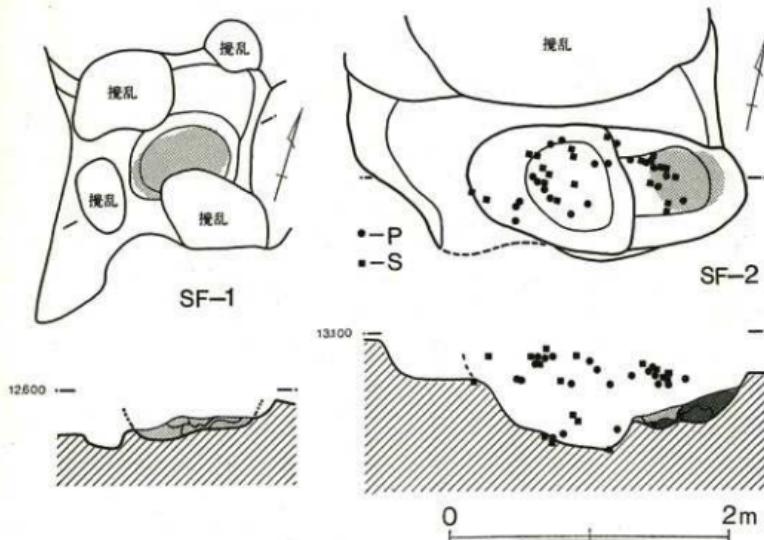
(位置) C-2-21グリッド (形状) 風倒木痕及び掘削により大きく切断され、その遺存状態は著しく悪い。現状ではわずかに炉跡のみが認められるにすぎない。(焼土の状態) およそ80×55cm程の範囲を有し、厚さは約15cmを測る。主に焼土粒と同ブロックからなり、しまり弱くややボソつく。(炉跡) 86×64cmの梢円形を呈し、遺構確認面からの深さは約58cmである。炉跡はうっすらと赤色味を帯び、その範囲は広いが軟質となっている。

(遺物) 本跡に伴出する遺物は見られなかった。

第2号炉穴 (S F-2) (第224図)

(位置) C-2-17グリッド (形状) 全体は梢円形を呈し、深い土壤状の掘り込みと大形の炉跡からなる。但し、土層観察を行わなかったために明確ではないが、炉跡は土壤に切断されるものと考えられる。(焼土の状態) 70×60cm程の範囲が認められ、厚さ約15cmを測る。主に焼土ブロックからなり、赤色味が強くしまりも良い。(炉跡) 80×80cmで梢円形を呈するものと思われる。炉床は良く焼けており、赤くバリバリとなっている。

(遺物) かなり上位からではあるが、第V群土器が少量出土している。



第224図 第1・2号炉穴 (S F-1・2)

(3) 土壌

第1号土壌 (SK-1) (第225図)

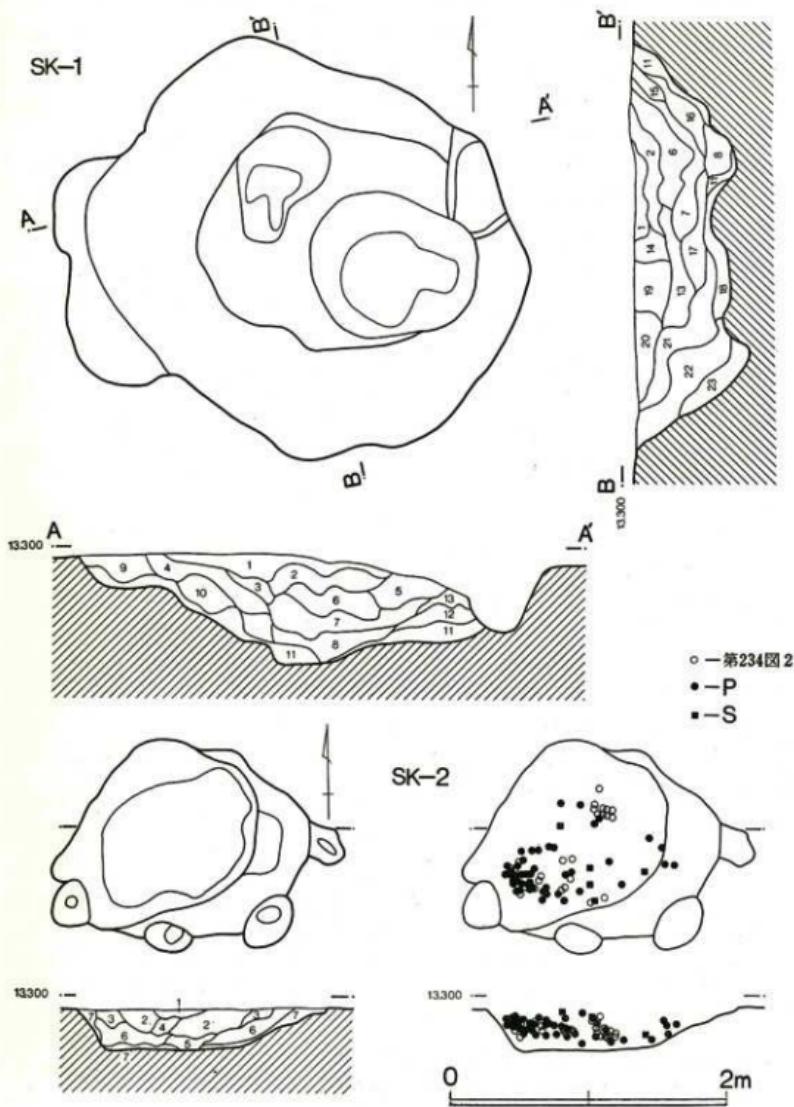
(位置) B-3-11グリッド (形状) ほぼ円形のプランを有し、壁及び底面の凹凸は激しい。おそらくは風倒木痕と思われる。(規模) 342×288×78cm (覆土) 以下の23層に分けられる。

- 第1層 茶褐色土 きめ細かいが、しまり弱くバサつく。ローム微粒をよく含む。
 - 第2層 暗茶褐色土 きめ細かいが、しまりやや弱くバサつく。ロームを全体に含む。
 - 第3層 褐色土 きめ細かくしまりも良い。ローム粒・ブロックを多く含み、やや斑文となる。
 - 第4層 明褐色土 第3層に準ずるが、やや大粒のロームを良く含む。
 - 第5層 暗茶褐色土 ローム粒を若干含み、全体にも極めて薄く溶混する。
 - 第6層 暗黒褐色土 きめやや粗いが、しまり良い。若干のローム粒を含む。
 - 第7層 暗茶褐色土 きめ細かいが、しまりやや弱く、バサつく。
 - 第8層 黑褐色土 きめやや粗いが、しまりは非常に良い。若干のローム粒を含む。
 - 第9層 黄茶褐色土 きめ細かくしまりも良い。ロームブロックをよく含み粘性も良い。
 - 第10層 黄褐色土 ローム粒を多く含むため黄色味が強い。
 - 第11層 暗黄色土 ほとんどローム。壁及び底の軟化層と思われる。
 - 第12層 暗茶褐色土 きめ細かいが、しまりやや弱い。ローム粒を多く含み、汚れた斑文となる。
 - 第13層 暗褐色土 ローム粒を多量に含みボロボロする。きめ細かいが、しまりは弱い。
 - 第14層 茶褐色土 きめ細かいが、しまりやや弱くバサつく。
 - 第15層 暗茶褐色土 きめ細かいがしまりやや弱く、ローム粒・ブロック溶混が多い。
 - 第16層 黄茶褐色土 きめ細かいが、しまり弱く、ローム粒を多量に含む。
 - 第17層 暗黄茶褐色土 ローム粒を多合し、汚れた感じとなる。しまり弱くボソつく。
 - 第18層 暗黄茶褐色土 きめ細かいが、しまり弱い。ロームは全体的溶混となる。
 - 第19層 黄色土 ほとんどローム。しまり・粘性ともに強い。
 - 第20層 暗黄褐色土 しまり・粘性は強いが、ロームはさほど溶け込んでいない。スコリアを含む。
 - 第21層 明茶褐色土 ロームの溶け込みは全くない。ローム粒が茶褐色系土につまつた土層。
 - 第22層 暗黒褐色土 ロームブロックが混入しているため色調は明るい。きめ細かく粘性は強い。
 - 第23層 暗茶褐色土 ローム粒を多量に含み、しまり・粘性ともに強い。ロームブロックを含む。
- (遺物) ごく少量ではあるが、第V群土器が出土している。

第2号土壌 (SK-2) (第225図)

(位置) B-2-15グリッド (形状) 基本的には梢円形を呈するものであるが、東側が一段浅く張り出している。底面はほぼ平坦で良くしまっており、壁の立ち上がりも急である。(規模) 212×154×32cm (主軸方向) およそN-70°-W (覆土) 以下の7層に分けられる。

- 第1層 淡茶褐色土 きめ細かく、しまり良い。ロームを薄くブロック溶混する。
- 第2層 茶褐色土 ややきめ細かくボソつく。ローム粒・ブロックを含み炭化物粒も若干見られる



第225図 第1・2号土壤 (SK-1・2)

- 第3層 暗黄色土 きめ細かいが、しまり弱い。ロームを全体的に溶混し黄色味を帯びる。
- 第4層 黄褐色土 きめやや粗く、しまりも弱い。ロームブロックを良く含み、黄色味を帯びる。
- 第5層 暗黄茶褐色土 ロームを全体に溶混し、黄色味を帯びる。炭化物粒を含む。
- 第6層 黄茶褐色土 きめ粗く、しまり弱い。ローム粒・ブロック溶混し、やや汚れた感じとなる。
- 第7層 黄色土 壁及び底の溶軟化層と思われる。

(遺物) 総測点数で78片の第V群土器が出土している。底面よりはやや浮いているがかなり集中しており、このうち1個体が接合復元された。

第3号土壤 (SK-3) (第226図)

(位置) B-2-24グリッド(形状) 全体は長梢円形を呈し、中央部がややくびれている。底面はほぼ平坦であるが、軟質で南へ傾斜を有している。壁の立ち上がりも概ね緩やかなものとなっている。(規模) 214×92×40cm (主軸方向) N-9°-W (覆土) 以下の3層に分けられる。

- 第1層 茶褐色土 きめ細かくしまり良い。炭化物を若干含む。
- 第2層 暗茶褐色土 きめが大変細かく、粘性・しまりとも良い。ロームが薄く溶けている。
- 第3層 黄茶褐色土 ほとんどロームで、しまり・粘性が最も強い土層。

(遺物) 第V群土器が少量出土している。

第4号土壤 (SK-4) (第226図)

(位置) B-2-25グリッド(形状) 楕円形。底面は概ね平坦であるが、東側はだらだらと立ち上がっている。(規模) 140×110×36cm (覆土) やや不自然な堆積を示す以下の6層である。

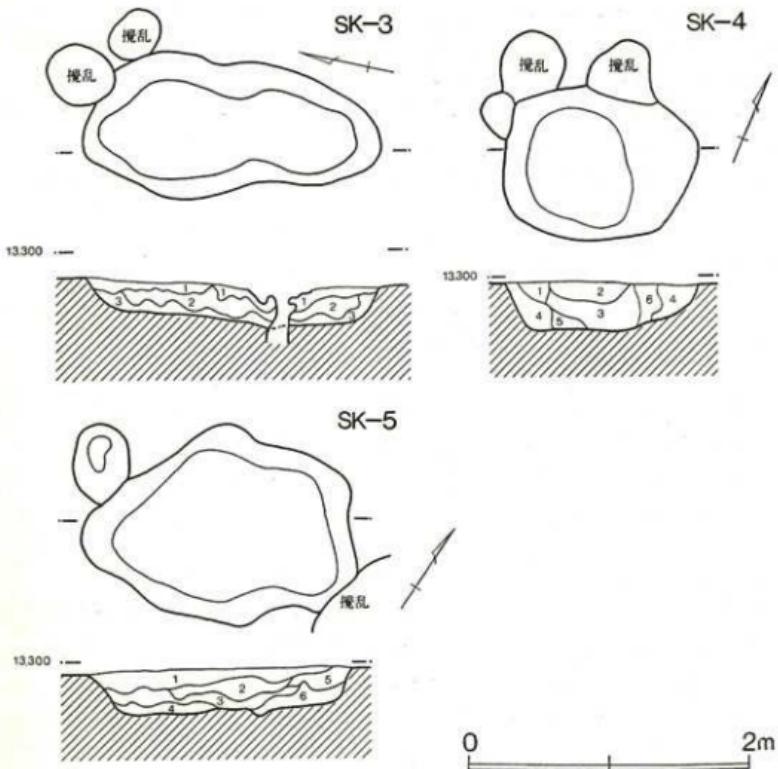
- 第1層 茶褐色土 しまり弱くバサつく。土壤の上面に割合厚く堆積している。
- 第2層 暗黄褐色土 粘性・しまりともに強い。ロームブロックを少量混入している。
- 第3層 暗赤褐色土 赤色味が強く、しまり・粘性ともに強い。
- 第4層 暗黄褐色土 ロームの混入により、粘性・しまりとも強い。下面に炭化物粒を含む。
- 第5層 黄褐色土 ロームブロックが全体に混入している。しまりは強い。
- 第6層 明黒褐色土 全体的に黒褐色のバサついた層であるが、ロームブロックが混入している。

(遺物) 第V群土器の小片が2点出土している。

第5号土壤 (SK-5) (第226図)

(位置) C-2-4グリッド(形状) プランはやや凹凸を描く楕円形を呈する。底面は硬くしまっており、西へ向けて緩く傾斜を有している。壁の立ち上がりは概ね急である。(規模) 196×144×34cm (主軸方向) N-46°-E (覆土) 以下の6層であるが、全体にロームの影響が強い。

- 第1層 暗黄茶褐色土 炭化物の他、ローム粒を多量に含有。きめ細かく、しまり良い。
- 第2層 茶黒褐色土 炭化物粒及び炭化物ブロックを認める。第1層に近似する。
- 第3層 暗黄褐色土 炭化物粒及びローム粒を多く含み、非常にきめ細かくしまり良い。
- 第4層 黄黒褐色土 ロームで構成され、炭化物粒を含有する。非常にきめ細かくしまり良い。



第226図 第3・4・5号土壌 (SK-3・4・5)

第5層 黒褐色土 ロームにより構成され、しまり・粘性ともに優れる。

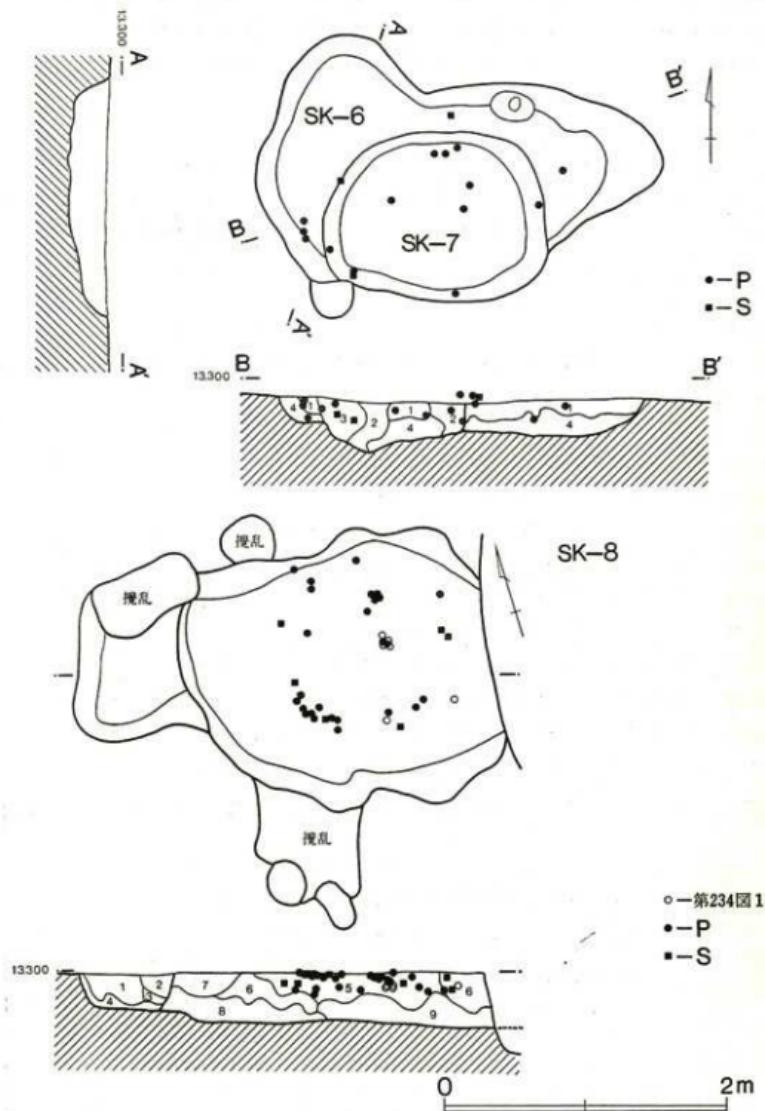
第6層 明黒褐色土 黒色土がロームに入り込んでおり斑文状に見える。きめ細かくしまり良い。
(遺物) 見られなかった。

第6号土壌 (SK-6) (第227図)

(位置) C-2-4グリッド (形状) 中央部をSK-7に切断されるが、北西部の張り出した長楕円形を呈するものと思われる。底面はほぼ平坦となり、壁の立ち上がりは緩やかである。(規模) 292×176×32cm (主軸方向) およそE-Wを指す。(覆土) SK-7を含めて4層に分かれる。

第1層 茶褐色土 ロームが薄く溶けた土層。木痕がかなり多くある。

第2層 黒色土 きめ細かくしまりもある。ローム粒を少量含む。



第227図 第6・7・8号土壤 (SK-6・7・8)

上ノ台

第3層 黄褐色土 ロームによって構成されるが、ところどころに褐色土粒を含む。

第4層 暗茶褐色土 ロームの溶け込みが非常に強く、しまり・粘性とも非常に強い。

(遺物) 図示することは不可能であったが、第V群土器がわずかに出土している。

第7号土壤 (SK-7) (第227図)

(位置) C-2-4グリッド (形状) SK-6埋没後の設営。きれいな梢円形を呈し、その掘り込みは急角度となる。底面は凹凸が強く軟質である。(規模) 160×122×42cm (主軸方向) N-17°-E (覆土) SK-6参照 (遺物) 覆土上位からではあるが、第V群土器が少量出土している。

第8号土壤 (SK-8) (第227図)

(位置) C-3-1グリッド (形状) 東側をムロ穴に切断されるが、全体は凹凸の激しい梢円形を呈すものと思われる。また、西側にも別の土壤が営まれているようである。(規模) 244×204×26cm (主軸方向) ほぼE-Wを指す。(覆土) 以下の9層に分けられる。

第1層 暗赤褐色土 粘性のある赤色味がかった土層。ロームブロックの混入が見られる。

第2層 明黒褐色土 パサパサする黒褐色土層。層中にロームブロックを含むため色調は明るい。

第3層 暗黄褐色土 ザラザラしてもらい黄色味の強い土層。やや大形のロームブロックを含む。

第4層 暗黄色土 しまりの強い層である。黒色土粒・茶褐色土ブロックが混入している。

第5層 暗茶褐色土 きめ細かくパサパサする。粘性は強くない。炭化物粒を含んでいる。

第6層 黄褐色土 かなり崩壊しやすく、きめも粗い。ロームブロックの含入はない。

第7層 明茶褐色土 しまりは弱くパサパサしている。

第8層 明黄色土 色調は明るいが層中に茶褐色土ブロックを散在的に混入する。

第9層 淡茶褐色土 ロームと茶褐色土が混合し淡い色調となっている。しまりは弱くパサつく。

(遺物) 第5層に集中しており、第V群土器1個体が接合している。 (飼持 和夫)

第14表 明花上ノ台遺跡縄文時代炉穴一覧表

番号	グリッド	形態	規模(cm)	炉跡(cm)	主軸方向	出土遺物	備考
1	C-2-21			86×64×14			
2	C-2-17	長梢形		54×44×18	N-84°-E	第232図1~10	

第15表 明花上ノ台遺跡縄文時代土壤一覧表

番号	グリッド	形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	主軸方向	出土遺物	備考
1	B-3-11	円形	342	288	78		第232図11~19	
2	B-2-15	梢円形	212	154	32	N-70°-W	第233図1-2, 第234図2-3	
3	B-2-24	長梢円形	214	92	40	N-9°-W		
4	B-2-25	梢円形	140	110	36		第232図4-5	
5	C-2-4	梢円形	196	144	34	N-46°-E		
6	C-2-4	長梢円形	292	176	32	E-W		
7	C-2-4	梢円形	160	122	42	N-17°-E	第232図6~8 第233図9~14, 第234図1	
8	C-3-1	不整梢円形	244	204	36	E-W		

(4) 遺構出土の土器

第1号住居跡（第288図1～23、第229図1～22、第230図1～12、第231図1～5）

出土土器は第V群土器である鶴ガ島台式と、第VI群土器である黒浜式が検出されている。

第V群土器（第228図1～23、第229図1～22、第230図1～9、第231図4、5）

鶴ガ島台式土器を一括する。全器形がわかるものはないが、有文土器は波状口縁が多く、無文土器は平縁が多い。文様帯が二段構成になるものは少ない様である。

第1類（第228図1～4）

細隆起線のみでモチーフが描出されるものを一括する。1は内削状の口唇外側端部に小さな刻目が施され、波状縁を呈する。文様帯は水平に配される細隆起線で分帶され、そこから垂下する細隆起線で分割されている。波頂下部の空間は文様が描出されない。分割内は斜行する細隆起線が充填され、ほぼ等間隔に円形刺突文が施される。2、4は等間隔の細隆起線が垂下するもので、3は垂直・水平・斜位の細隆起線が組み合わさっている。いずれも繊維を多目に含み、条痕が施文される。

第2類（第228図5～12）

細隆起線で文様帯が分割・区画され、集合細沈線及び結節沈線が充填されるものを一括する。口縁は殆んどが小波状を呈し、口端部に刻目が施される。5は口縁直下からモチーフが描出されるもので、3本の細隆起線が垂下して文様帯を分割するものである。区画は細隆起線で行なわれ、棒状区画を基調として、幾何学的な区画が行なわれ、集合細沈線が充填される。6・7は口縁下に無文帯が存在するもので、6は集合結節沈線が充填される。8は円環状の把手であり、口縁直下からモチーフが描出される。いずれも繊維を含み、5は擦痕、6、7は条痕が施文される。

9～12は細隆起線で分割され、沈線で区画するものであり、結節沈線が充填される。区画は棒状区画を基調としたもので、幾可学的区画となる。9～11は口縁下に細い無文帯が存在する。口唇は内削状を呈し、口端部に刻目が施される。いずれも繊維を含み、9は擦痕、10～12は条痕が施文される。

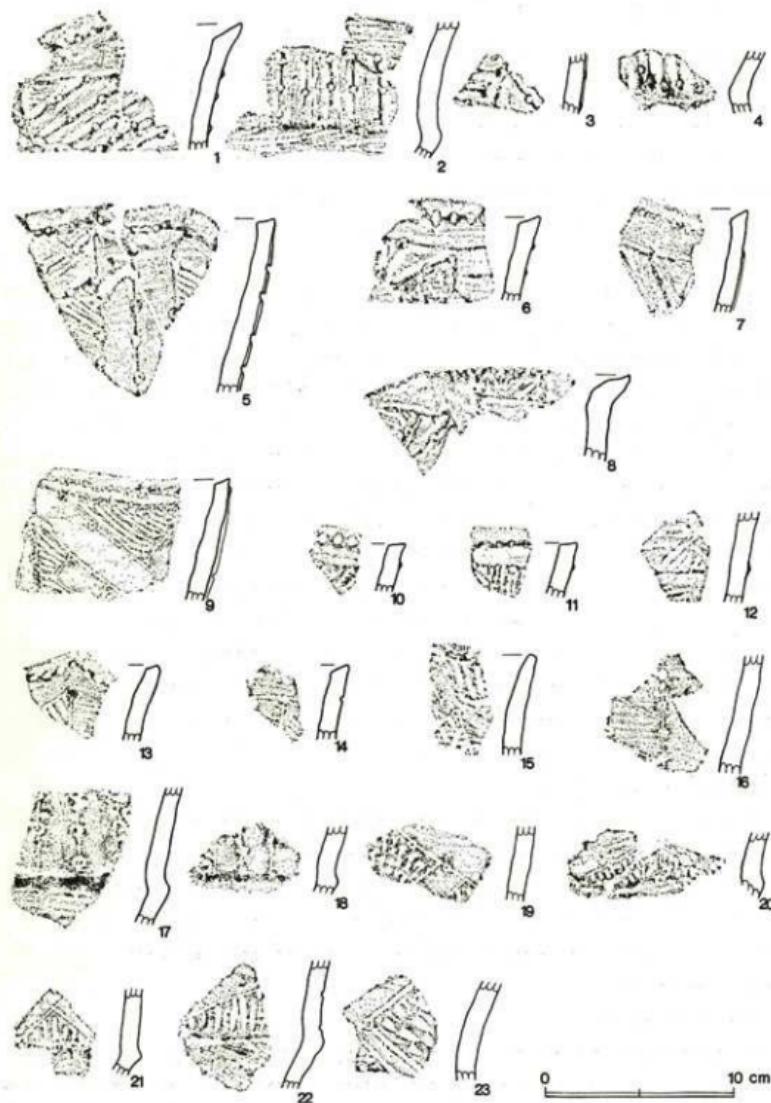
第3類（第228図13～23、第229図6）

細沈線で分帶・区画され、沈線及び結節沈線が充填されるものである。口唇部は15を除いて内削状を呈し、端部に刻目が施される。モチーフは棒状区画を基調とした幾何学的なものである。14は口縁下に無文帯が存在するが、15は分割帶と口縁部無文帯とが連結しており明確に区画されていない。17、18は3本沈線が垂下され、文様帯が分割される。15、19、20は結節沈線が充填されている。21～23は区画線より太い沈線が充填されるもので、21は結節沈線、22は太沈線、23は太い押し引き状刺突が充填される。

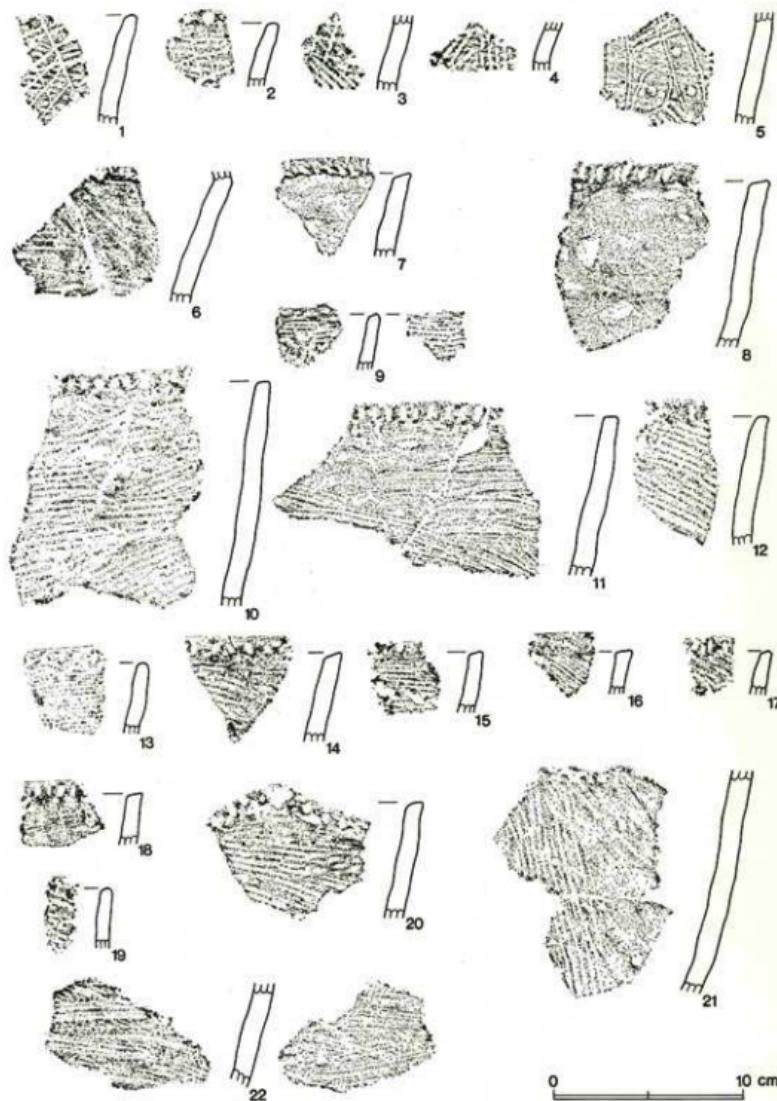
第4類（第229図1～3）

細沈線で格子目文が描出されるものである。1、2は口唇部が丸棒状を呈し、刻目が施される。1～3は地文に条痕が施文されたまま、細沈線で斜格子目文が描出される。全て繊維を含み、条痕が施文されている。

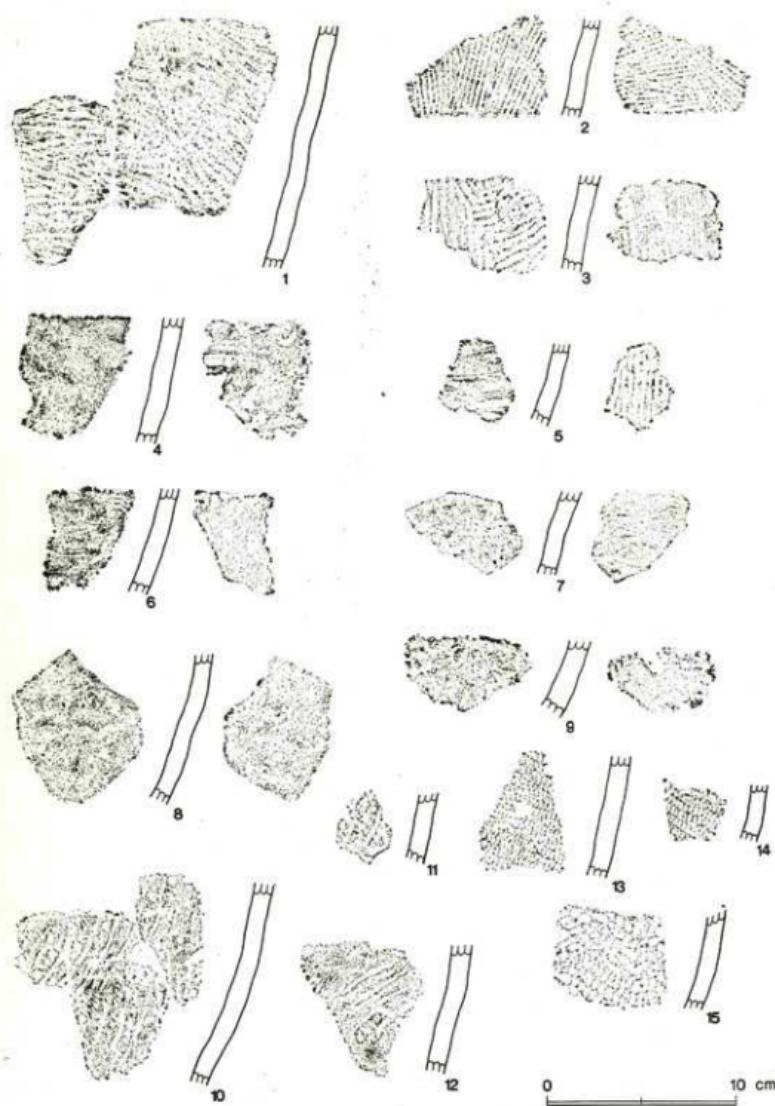
第5類（第229図4）



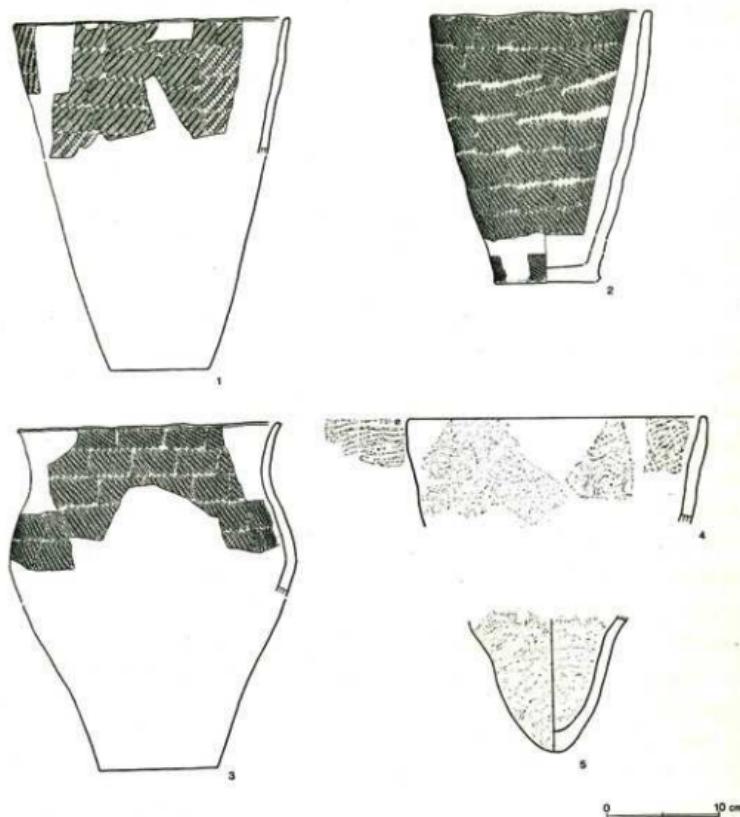
第228図 第1号住居跡出土土器(1)



第229圖 第1号住居跡出土土器(2)



第230図 第1号住居跡出土土器(3)



第231図 第1号住居跡出土土器実測図

結節沈線のみ施文されるものである。4は異方向の結節沈線が組み合わされている。区画内充填文の可能性もあるが、異方向に組み合わせる例は少ない様である。

第6類（第229図5）

曲線区画が施されるものである。5は細沈線によって複雑な区画と円形区画等がモチーフ化され、区画内に円形刺突が施される。区画線には細沈線と結節沈線とが使用されている。繊維を少量含み、条痕が施文される。

第7類（第229図6～22、第230図1～9）

文様の描出されない無文土器を一括する。条痕文の施文手法等の相違によって類別される。

第1種（第229図8～22、第230図1～3、第231図4、5）

上ノ台

表裏面に条痕が施文されるものである。口縁部破片では殆んどの口唇部に刻目が施される。また、胴部破片では第1種から第6種までの胴部が含まれており、ここでは一括することとした。

7～19は平口縁である。平口縁が圧倒的に多く、20のみ波状口縁を呈する。口唇部形態は13, 19が丸頭状の他、全てやや内削状となっており、上端は平坦である。条痕は口縁部付近で表裏とも横位に施文され、胎土は繊維をやや多目に含む。21, 22、第230図1～3は表裏とも明瞭な条痕が施文されるが、3の裏面にはヘラ状工具による条痕が施されている。

第231図4は推定口径約27cm、現存高9.5cmを測る。口縁部に横位の波状条痕が施文され、一部様化した様な部分が認められる。裏面にも条痕が施文される。同5は底部であり、現存高12.5cmを測る。表裏面とも条痕が施文される。4, 5とも少量繊維を含む。

第2種（第230図4～7）

表面が無文、裏面に条痕が施文されるものであり、いずれも繊維を含み、表面には微かな擦痕が認められる。

第3種（第230図8, 9）

表裏面とも条痕が施文されない無文土器である。8, 9とも擦痕が僅かに認められる。繊維を少量含む。

第V群土器（第230図11～15、第231図1～3）

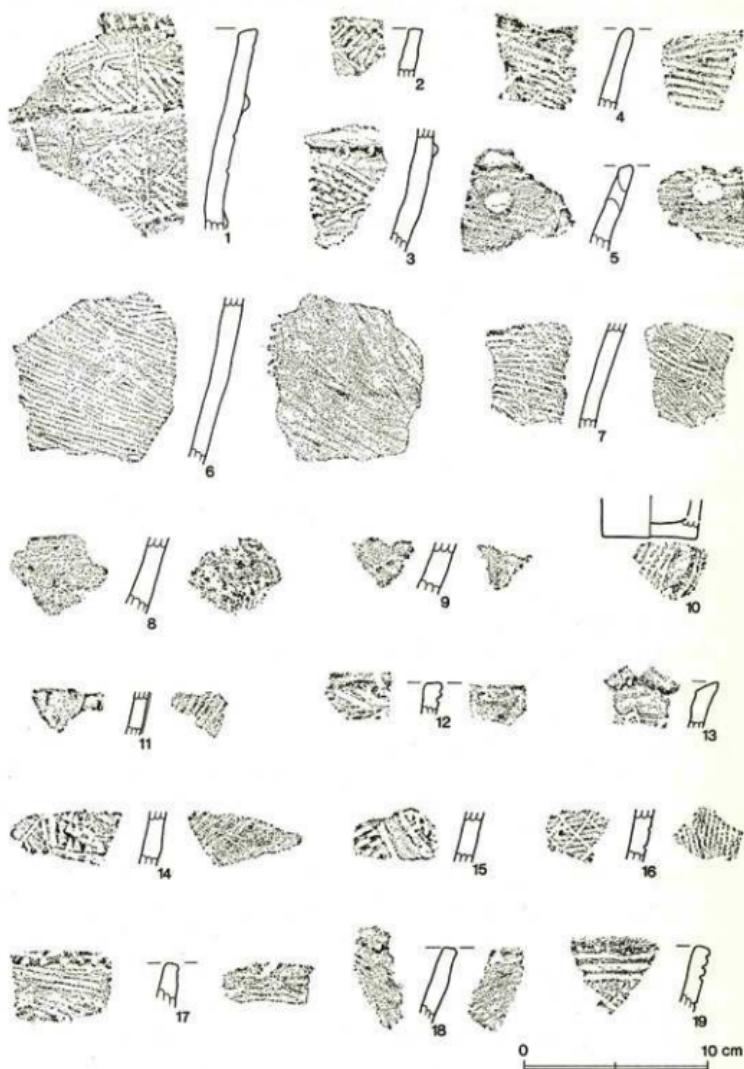
前期前半の黒浜式土器を一括する。復原可能なものが3個体分出土した。1は推定口径約25cm、現存高12cmを測る深鉢形土器である。地文は0段多条縄文LRと附加条縄文LRが、部分的に置換されて施文されている。2は推定口径約20cm、推定器高約24cmを測る深鉢形土器である。器体の約三分の二位と底部が若干現存する。地文は縄文RLが施文される。3は胴部で膨らむ器形を呈し、推定口径約24cm、最大幅約26cm、現存高16cmを測る。地文は縄文RLが施文される。いずれも多目に繊維を含む。

第230図10～12は地文に無節Lが施文されており、同1個体と思われる。繊維を多く含み、器面は荒れている。13は0段多条縄文RLと複節RLRが施文され、15は複節RLRが施文されている。15は縄文LRが縱回転、RLが横回転に施文される。いずれも繊維を多く含み、脆い土器である。

第2号炉穴（第232図1～10）

出土土器は全て第V群土器である。1は強い括れを呈さずに、文様帯が二段になるものである。文様帯の分帯は隆帶で行なわれ、細沈線で分割・区画を行なうものであり、集合結節沈線が充填される。円形刺突文は区画の交点に限定されず、無造作に施文される。口唇部はやや内削状を呈し、刻目が施される。繊維は多目に含まれる。2は口縁部破片であり、細沈線区画内に太沈線が充填される。3は口縁部付近の破片であり隆帶で分帯された文様帯内に沈線区画が施され、集合結節沈線が充填される。4～9は表裏に条痕で分帯が施文されるものであり、4, 5の口唇部には刻目は施されない。5は補修孔が穿たれる。10は平底を呈する底部であり、底面にも条痕が施文される。以上全ての破片に繊維が多目に含まれている。

第1号土壙（第232図11～19）



第232図 遺構出土土器(1)

上ノ台

出土土器は第Ⅴ群土器と第Ⅶ群土器である。11は細隆起線が垂下するもので、円形刺突文の痕跡が認められる。繊維を多目に含み、裏面に条痕が施文される。12は刻目の施される平縁土器であり、結節沈線が施文される。13は口唇部が内削状を呈す波状口縁で、端部に刻目が施される。口縁下に無文帯を有し、水平沈線上に円形刺突文が施される。12, 13とも繊維を含み、擦痕が観察される。14, 15は沈線区画内に集合結節沈線が充填される。裏面は条痕が施文される。16は細沈線で格子目文が描出されるものであり、表裏面に条痕が施文される。18は波状口縁を呈し、沈線区画の土器であるが、充填要素は不明である。17は平縁土器で、端部に刻目が施される。表裏面とも条痕が施文される。以上は第Ⅴ群土器の鶴ガ島式に比定される。

19は1点のみ出土した第Ⅶ群土器であり、黒浜式に比定される。半截竹管状施文具によって併行沈線が口縁に沿って3本施文される。繊維を多く含む。

第2号土壙（第233図1, 2、第234図2, 3）

出土土器は全て第Ⅴ群土器であり、有文土器片2点と、復原可能な無文土器2個体分が出土している。第233図1は結節沈線で区画され、同種の沈線を充填するものであり、2は細沈線区画内に集合細結節沈線が施文されるものである。1, 2とも裏面に条痕が施文され、繊維を含むものである。

第234図2は表裏面に条痕のみ施文される無文土器で、推定口径約26.5cm、現存高約33cmを測る。口縁は平縁であり、角棒状の口唇部を呈し、刻目が施される。条痕は表裏面とも口縁部付近で横位からしだいに縱位に施文されている。繊維を少量含む。同3は口縁部がやや内彎するもので、推定口径約23cm、現存高9.5cmを測る。先細り状の口唇部には細かな刻目が施される。表裏面とも剥落が著しいが、条痕は横位に施文されている。繊維は多目に含まれる。

第3号土壙（第233図3）

出土土器は全て第Ⅴ群土器であり、細片が多く図示出来るものは3のみである。3は丸棒状の口唇部を呈し、刻目が施される。表裏とも横位の条痕が施文され、胎土に繊維を多目に含む。

第4号土壙（第233図4, 5）

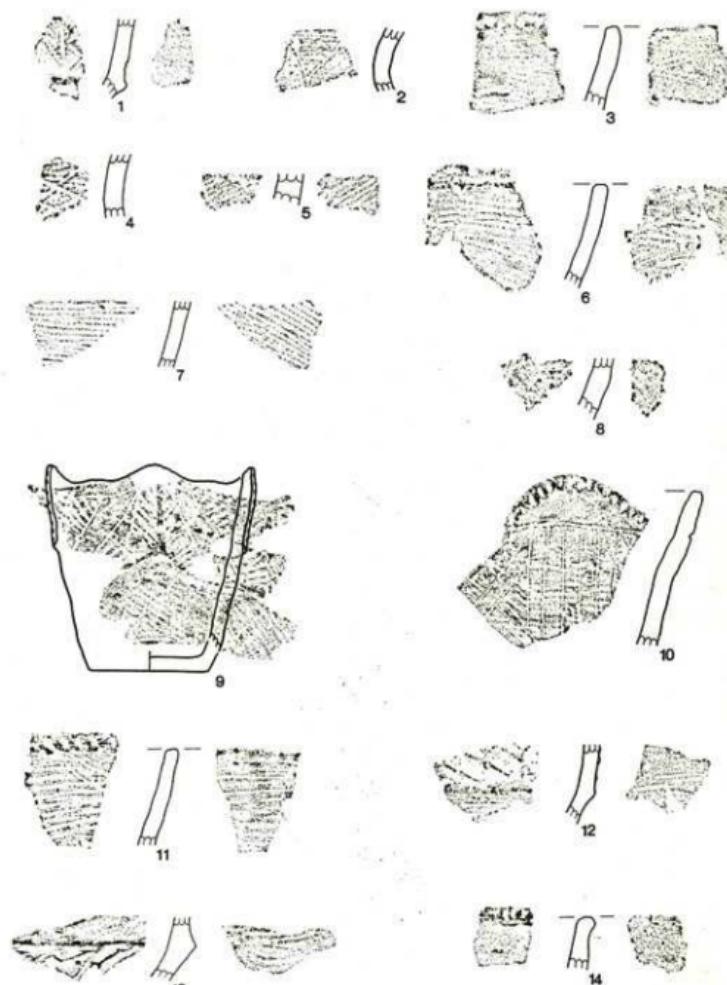
出土土器は全て第Ⅴ群土器である。4は沈線により格子目文の描出されるもので、表裏面とも条痕が施文される。繊維は少量含まれる。5は表裏面とも条痕が施文されるもので、器壁が1cm前後と厚いものであり、繊維を少量含む。

第7号土壙（第233図6～8）

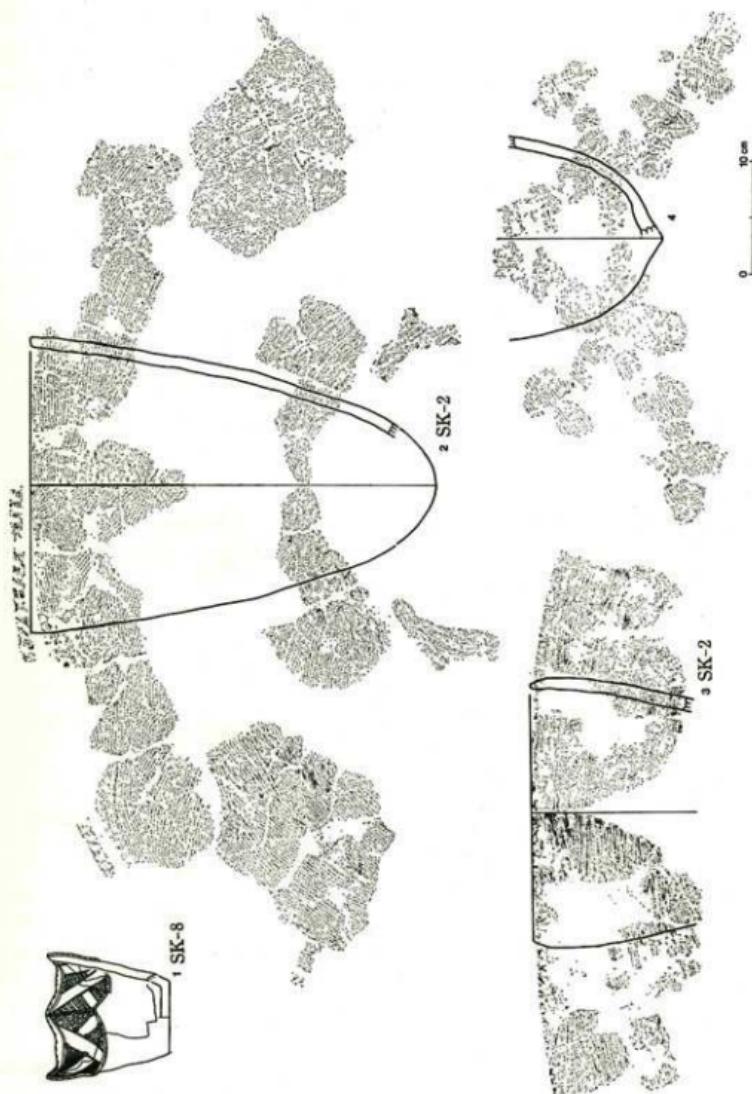
出土土器は全て第Ⅴ群土器であり、有文土器の出土はなかった。6は角棒状を呈する口唇部に貝殻腹縁による刻目が施される。刻目は斜位に施文されて浅いため、拓影図では不明瞭となっている。条痕は表裏面とも横位に施文される。胎土はやや多目に繊維を含むが、緻密であり、色調は灰褐色を呈する。7は表裏面に横位の条痕がくっきりと施文されており、繊維を多目に含む。8は繊維を多量に含む破片で、裏面に条痕が施文される。

第8号土壙（第233図9～14、第234図1）

出土土器は全て第Ⅴ群土器である。第234図1は波状縁を呈する小鉢であり、推定口径約11cm、現存高10cmを測る。底部を欠損するが、剥離痕から平底であることは明確である。全体の約二分の



第233図 遺構出土土器(2)



第234図 遺構出土土器実測図

一が現存する。口唇部は内削状を呈し、端部に細かな刻目が施文される。波頂部から細隆起線が垂下され、連弧状に配される脣部の細隆起線へと連結されて、文様帶は分帶・分割されている。文様帶の上限は、波状口縁に沿って波頂間に施文される細沈線で区画されている。文様は併行細沈線で棒状区画を基調としたモチーフが描出され、併行沈線間は無文となる。区画内は集合結節沈線が充填され、区画の交点には円形刺突文が施される。垂下する細隆起線上には刻みが施されている。条痕は表裏面ともくっきり施文され、繊維を少量含む。

第233図12は細隆起線のみでモチーフが描出される土器で、垂下される細隆起線と斜位に併行する細隆起線が施文されている。細隆起線上にはほぼ等間隔に円形刺突文が施される。括れ部の下方に円形の刺突文がみられることから文様帶が二段構成になるものと思われる。条痕は表裏面とも施文され、繊維を少量含む。同10は山形の波状縁を呈するもので、波頂は緩く二つに割れている。丸棒状の口唇部には刻目が施されている。文様帶の分帶・分割・区画は全て細沈線で施文される。口縁下に細沈線が水平に巡り、無文帯が区画される。6本の併行細沈線が垂下されて、文様帶が分割され、更に併行細沈線で棒状区画が行なわれる。区画内は太目の集合結節沈線が充填されている。表面は条痕が施文され、裏面はヘラ削工具によるナデ状の擦痕が認められる。繊維は少量含まれる。11は平坦な口唇部に角棒状施文具による刻目が施され、表裏面に横位の条痕が施文される。口縁直下に4条の結節沈線が弧状に施文されている。繊維を少量含むが、胎土は緻密である。13は下段の文様帶と思われ、円形刺突の施される隆起線が施文される。裏面には条痕が認められる。14は若干肥厚する口唇部に細かな刻目が施される。繊維を多目に含み、裏面に条痕が施文される。表面は擦痕が認められる。

(5) グリッド出土の土器

明花上ノ台遺跡から出土した土器は総数2800余点を数えるが、その殆んどが第V群土器である。他に第I群土器、第VII群土器、第IX群土器が出土しているが、合計しても一割に満たない。第VIII群土器、第X群土器は出土したもの全てを図示してある。第V群土器であるが、出土した有文土器を見る限り、鶴ガ島台式であり、他型式の土器は殆んど出土していない。第V群土器の時期に於いては、鶴ガ島台式期の単独遺跡として理解されよう。以下、第V群土器を中心にして、分類を行ないたい。

第I群土器（第235図1、2）

2点のみ出土した。1は縄文RLが施文され、2は細い撚糸Lが全面に密に施文されている。胎土は緻密であり、石英、長石類及び白色粒子を含む。色調は赤褐色を呈し、夏島式に比定されるものと思われる。

第V群土器（第235図3～30、第236図～第239図）

鶴ガ島台式土器を一括する。文様の有無、施文手法等の相違により類別される。

第1類（第235図3～5）

細隆起線のみでモチーフが描出されるものである。3～5は屈曲部の破片であり、やや太目の細隆起線が併行に施文されるものである。3は斜位に、4は上段の文様帶では綫位に、下段では斜位

に、5は縦位に、それぞれ併行する細隆起線が施文される。細隆起線上には円形の刺突文が施される。いずれも繊維を多目に含み、裏面に条痕が施文される。

第2類（第235図6、7）

細隆起線で文様帶が分帯・分割されるもので、半截竹管状施文による併行沈線で区画されるものである。6、7は同一個体であり、口縁は小波状を呈する。口唇部は内削状を呈し、内外面の端部に細かな刻目が施される。口縁下に細隆起線が水平に配されて文様帶の上限が分帯され、口縁下に無文帶が形成される。文様帶は小波頂下に垂下する細隆起線によって分割され、併行沈線で区画される。6は分割細隆起線を挟んで矢羽状に、7は幾何学的に施文されるが、いずれも区画内に充填されるものはない。併行沈線上及び区画交点に円形刺突文が施される。第1類の細隆起線を併行沈線に置換すると同様のモチーフとなろう。表裏面とも条痕が施文され、繊維を少量含む。

第3類（第235図8～12）

細隆起線によって文様帶が分帯・分割・区画されるもので、沈線及び結節沈線が充填されるものである。8は波状口縁を呈し、口縁下に無文帶が区画される。波頂下に3本の沈線が垂下され、文様帶が分割され、区画も同種の沈線が使用される。沈線上に円形刺突文が施される。表裏面とも条痕が施文され、繊維を少量含む。9、10は口縁下に無文帶が区画され、10は併行する細隆起線が垂下し文様帶が分割される。11は併行する細隆起線で幾何学的な区画が、12は垂直・水平方向の区画が行なわれる。11は結節沈線、12は沈線が充填される。いずれも条痕が施文され、繊維を含む。

第4類（第235図13～30、第236図1～12）

細沈線で区画され、区画線より太目の充填線が施文されるものである。

第1種（13、14）

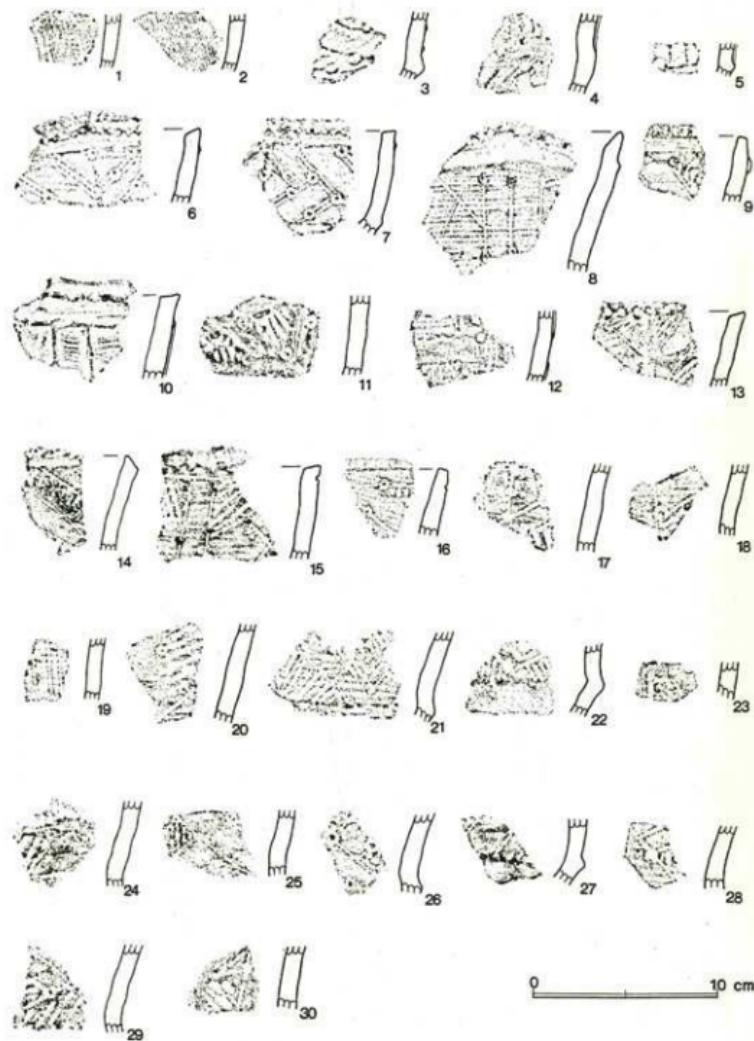
口縁下に無文帶が形成されないものである。13は口縁部が内削状を呈し、14は外削状を呈する。口端部には刻目が施される。13は併行細沈線で区画され、区画内に集合結節沈線が充填されるもので、併行沈線間は無文である。14は併行細沈線で区画するが、併行沈線区画内に集合結節沈線が充填される。両者とも繊維を多く含み、裏面に条痕が施文される。

第2種（15、16）

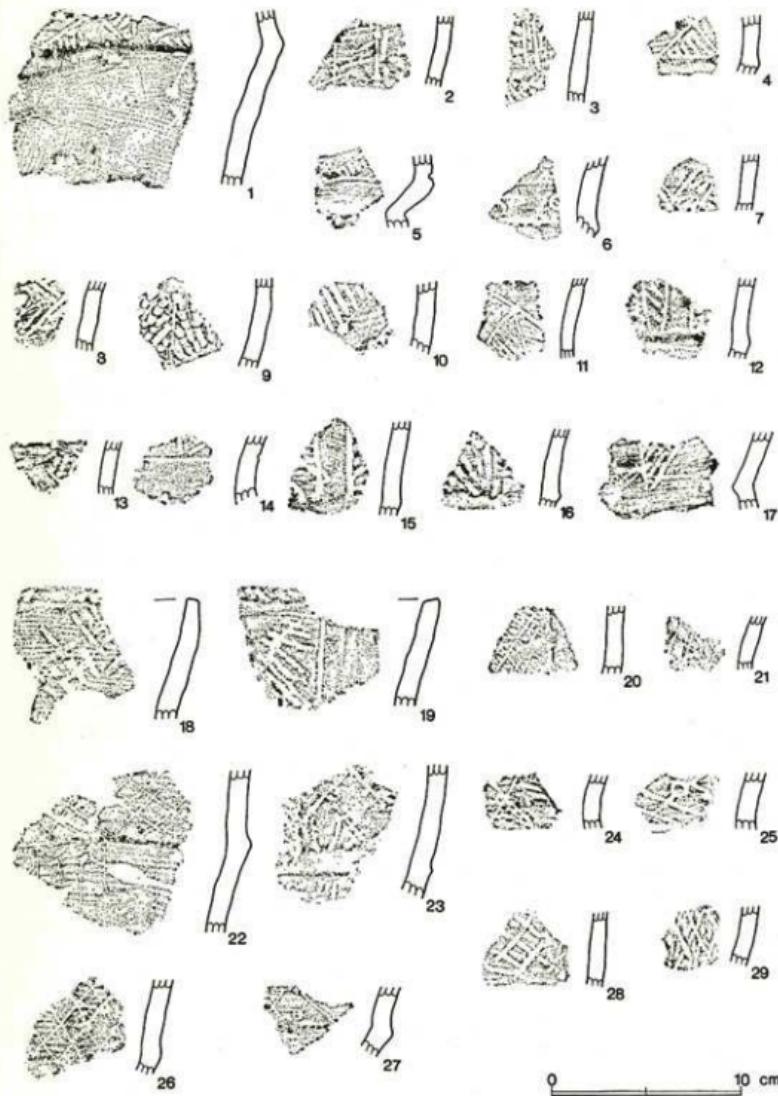
口縁下に無文帶が区画されるものである。15は小波状口縁下に水平沈線が巡り、幅の狭い無文帶が形成される。併行する細沈線が垂下して文様帶を分割し、併行細沈線で区画されるものである。区画内は区画沈線より太い集合結節沈線が充填される。口唇部には刻目が施され、区画交点及びそれより少しずれて円形刺突文が施文される。条痕が施文され、繊維を少量含む。16は丸頭状の口唇部に刻目が施され、口縁下に無文帶が形成されるものである。区画は併行細沈線で行なわれ、結節沈線が充填される。表裏面とも条痕が施文され、繊維を多目に含む。

第3種（第235図17～30、第236図1～12）

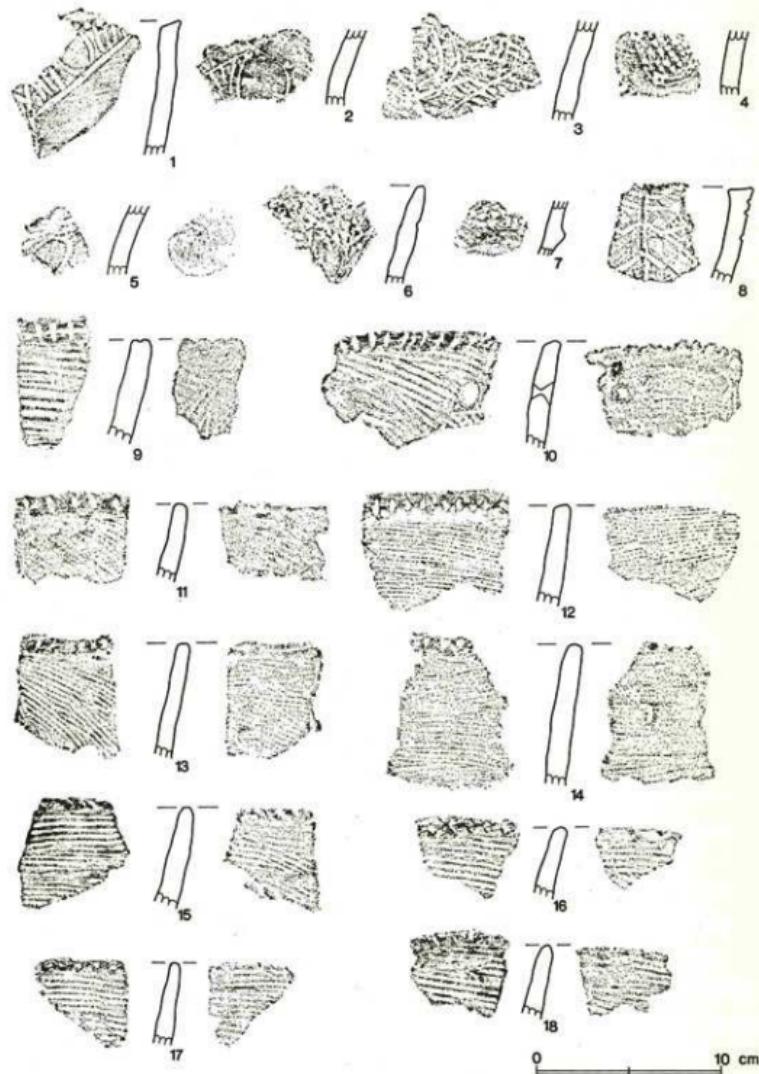
口縁部を欠損し、口縁下の無文帶の有無は不明であるが、細沈線で区画され、区画線より太い充填線が施文されるものを一括する。モチーフは概ね併行沈線で区画され、区画内に沈線及び結節沈線が充填されるのを原則としている。17～20、第236図2、3、12は併行沈線が2～3本垂下されて文様帶を分割するものであるが、第235図17や、第236図3の様に、分割線が文様帶下端まで垂



第235図 グリッド出土土器(1) 第I群・第V群



第236図 グリッド出土土器(2) 第V群



第237図 グリッド出土土器(3) 第V群

上ノ台

下されないで、区画されるものも存在する。いずれも繊維を含み、条痕が施文され、円形刺突文が施されている。

21~30は併行沈線によって区画され、太目の集合結節沈線が充填されるものである。区画は文様帶分割線を基準にして、棒状区画を基調としたモチーフ構成をとるものと思われるが、21, 22の様に棒状がくずれた区画も存在する様である。しかし、区画は全て直線で描出されるものである。24, 29, 30は太い結節沈線が充填される。円形刺突文は原則的には区画交点に施されているが、26の様に交点からはずれるものが多く出土している。第236図1は胴の屈曲部分であり、区画は棒状がくずれているものと思われる。5は二段の屈曲部であり、狭い無文帯が形成されている。9は単沈線で区画され、太い集合結節沈線が充填される。10, 11は細沈線区画内に太目の沈線が施文される。この類の中には、沈線が充填されるのは数少ない。

第4類（第236図13~19）

区画線と充填線が同種のものを一括した。比較的太目の沈線が使用されている。14~17は文様帶分割線が垂下し、棒状を基調とした区画が行なわれる。13は併行沈線で区画されるものであり、結節沈線が充填される。18, 19は同一個体であり、やや内削状の口唇部には刻目が施される。口縁下には微妙に沈線が施文されており、口縁下の無文帯が意識されている様である。文様帶は沈線が垂下されて分割されるが、区画は不明瞭であり、集合結節沈線が施文されている。18では区画線が微妙に施文されており、結節沈線は区画外にはみ出して施文されている。以上、本類の土器は全て、量の多寡はあるが繊維を含んでおり、条痕が施文されている。

第5類（第236図20~27）

沈線により格子目文が描出されるものを一括する。

第1種（20, 23）

細隆起線で文様帶が分割され、沈線による格子目文が描出されるものである。20は垂下する細隆起線上に円形刺突文が施され、細沈線による格子目文が描出される。23は併行細沈線による大きめな格子目状区画が施され、部分的に結節沈線が充填される。いずれも繊維を多く含み、条痕が施文される。

第2種（21, 22, 24~29）

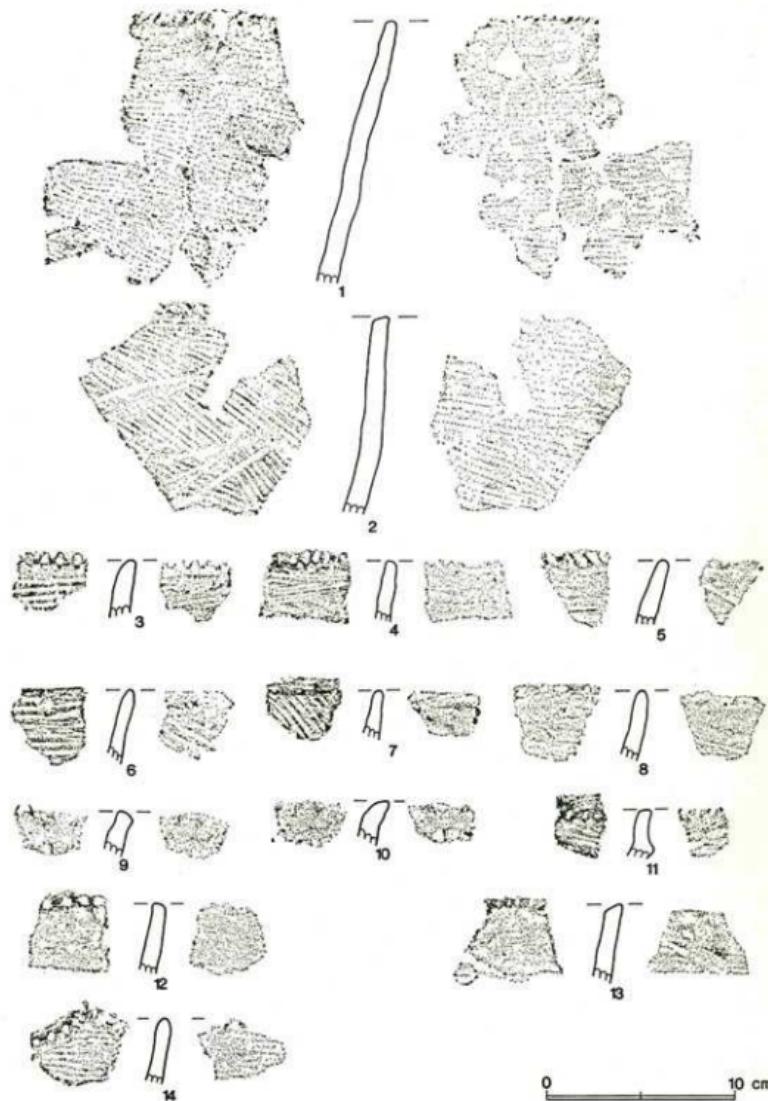
文様帶分割線の有無又はその要素は不明であるが、沈線で格子目文が描出される。この種の中には文様帶が分割されないものも存在する様である。22は胴屈曲部の破片であり、二段構成の文様帶を持つ。上段は細沈線による格子目文が描出され、下段は同種の沈線が不規則に垂下されている。上段の格子目文には部分的に円形刺突文が施される。繊維を少量含み、くっきりとした条痕が施文される。24, 26, 27は大き目の格子目文が、21, 25, 28, 29は細かな格子目文が描出されている。いずれも繊維を含み、条痕が施文される。

第6種（第237図1~5）

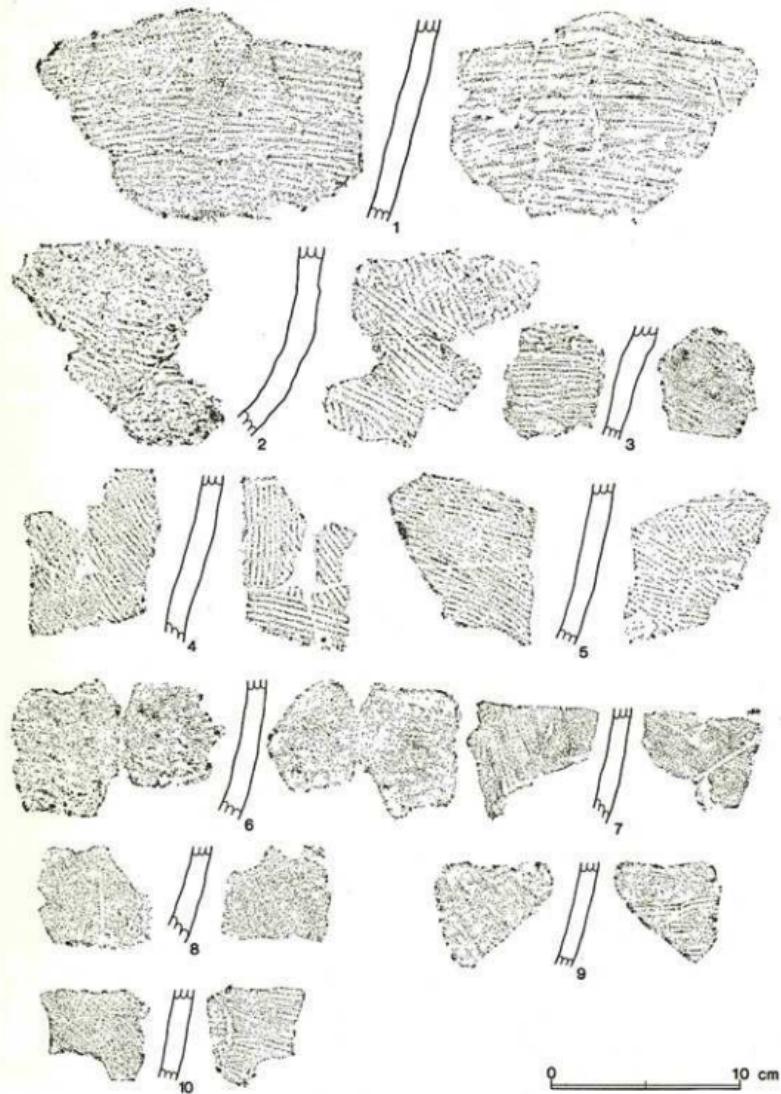
沈線により曲線区画が行なわれるものである。

第1種（1, 2）

文様帶自体の分割・区割は直線区画となるが、区画の一部分が曲線となるものである。1は内削



第238図 グリッド出土土器(4) 第V群



第239図 グリッド出土土器(5) 第V群

状の口唇部に刻目が施され、口縁直下から文様が描出されている。併行沈線で擗状に区画された後、細部に曲線区画が行なわれる。区画内は沈線が充填される。2も1も同様であるが、細沈線が使用され、結節沈線が充填される。繊維を含み条痕が施文される。

第2種（3～5）

沈線による曲線区画が行なわれるものである。3は雑であるが、重層の円形区画が行なわれる。4、5は曲線区画であり、4は結節沈線が充填される。3、4は条痕が施文され、繊維を含むが、5は擦状の条痕である。

第7類（第237図6～8）

深鉢以外の土器を一括する。6は小形の鉢で、波状線を呈し、結節沈線のみで雑なモチーフが描出されるものであり、口縁下に等間隔に円形刺突文が施される。手捏の土器であり、条痕は施文されず、胎土に繊維を少量含む。7も小形の鉢形土器であり、円形の刺突列だけ施文される。繊維を少量含む。

8は環状把手である。細隆起線が垂下され、矢羽状の沈線区画が行なわれる。区画内には充填要素はみられず、併行区画沈線上に等間隔の円形刺突文が施される。繊維を多目に含み、表面に条痕が施文されるが、磨消されている。

第8類（第237図9～18、第238図、第239図）

文様の施文されない無文土器を一括する。条痕施文の有無、口縁形態等で類別される。

第1種（第237図9～18、第238図1～8、11～14、第239図1～5）

表裏面にくっきりとした条痕が施文されるもので、口縁付近では主に横位施文されるものである。口縁は第238図14以外全て平縁であり、刻目が施文される。口唇部形態は丸頭状と内削状がある。丸頭状を呈するものが圧倒的に多く、内削状のものは第237図12、第238図2、11、13である。口唇部には刻目が施されるが、第238図6～8は刻目が施されない。刻目は口唇全面に施文されるものと、口端部に施文されるものとがあり、外削状を呈するものは口端部施文が多い。11は口縁部が屈曲し、口唇が直立するものであり、屈曲下に文様が施文される可能性もある。14は唯一の波状口縁で無文の土器である。いずれも繊維を含み、第238図12、13は薄いが、条痕がくっきりと施文されるものである。

第2種（第239図6～10）

細かな条痕、あるいは擦状の条痕が施文されるものである。6～10はいずれも浅く細かな条痕及び擦痕が施文されるもので、繊維を含む。

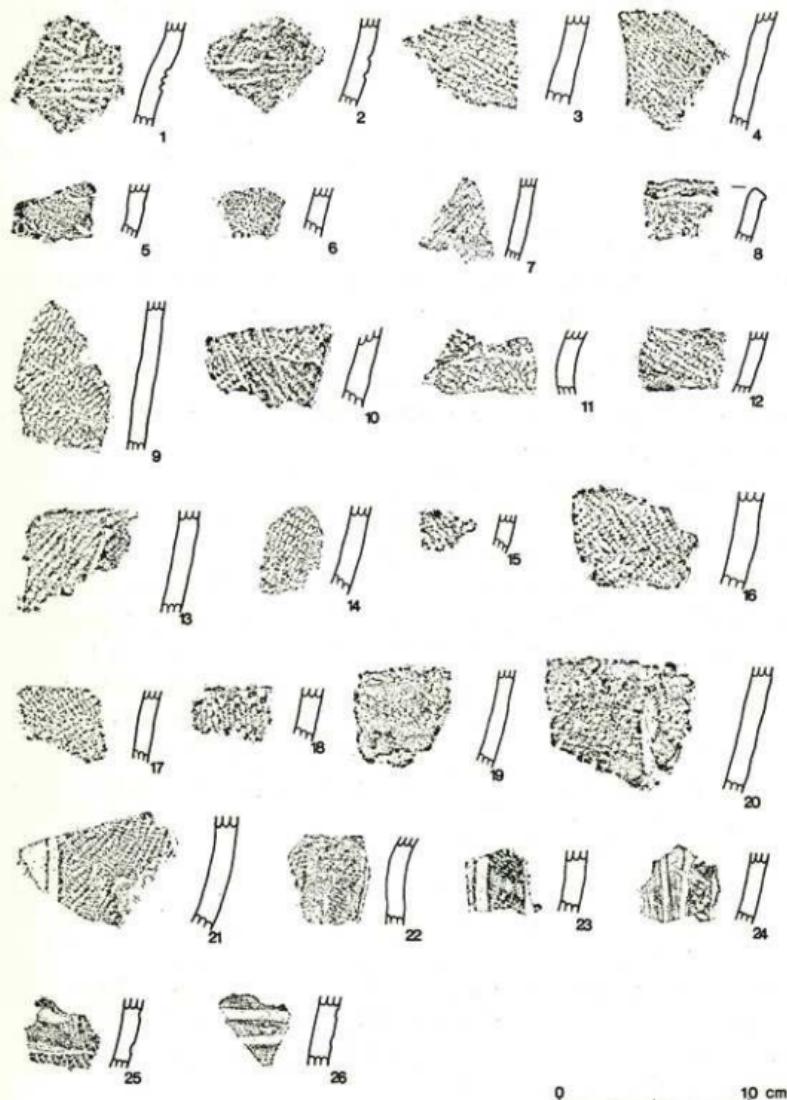
第3種（第238図9、10）

条痕が施文されない無文の土器である。9は丸頭状を呈し、刻目は施されない。表裏面とも指頭による圧痕が認められ、器面に凹凸が存在する。10は内削状の口唇部を呈し、刻目は施されない。表裏面とも器面調整の微かな擦痕が認められる。両者とも繊維が少量含まれる。

第VII群土器（第240図1～20）

前期前半の黒浜式土器を一括する。

第1類（第240図1、2）



第240図 グリッド出土土器(6) 第VII群・第IX群

半截竹管状施文具によって併行沈線が施文されるものである。1は4本の沈線が水平に施文されている。地文は無節Lが縦に施文され、胎土に繊維が多く含む。2は半截竹管状施文具で併行沈線が引かれるもので、水平と斜位に施文されている。1, 2とも水平方向の沈線で文様帶の下限が区画されるものと思われ、2の斜位の沈線は鋸歯状かあるいは菱形状のモチーフを構成するものと思われる。2は繊維を少量含み、砂粒が目立っている。

第2類（第240図3～20）

文様が施文されず、縄文のみ施文される土器群を一括する。いずれも繊維を多く含み、脆い土器である。3は正反の合1段の縄か、2本附加の附加条縄文か判別しづらいが、附加条であるとすれば縄文RLに太くて擦りの弱いRを2本附加したものと思われる。4はLRにLを1本附加した附加条縄文である。5, 6は縄文RL、7は擦りの弱い縄文LRが薄く施文されている。8は口縁部であり、角頭状を呈しやや外傾する。地文は縄文LRが薄く施文されている。10, 16はRLとLRによる羽状縄文を呈する。9, 12, 14, 15は縄文RL、11, 13, 17は縄文LRが施文される。18は複節RL、19, 20はRLが施文される。

第Ⅳ群土器（第240図21～26）

中期後半加曾利E式土器を一括する。磨消感垂文を持つ土器群で加曾利EⅡ式に比定される。21, 23, 24は縄文RL、22は複節RLが施文される。25, 26は口縁部文様帶下端部である。25は縄文RLが施文される。

(6) 石器（第241図1, 2, 第242図1～4）

合計6点出土した。第241図1は柳葉形を呈する尖頭器であり、両面に丁寧な押圧剥離が施される。基部が現存するが、身は比較的薄く、断面形態は菱形状を呈する。石材は硬質頁岩であり、表面は若干風化している。草創期所産と思われる。

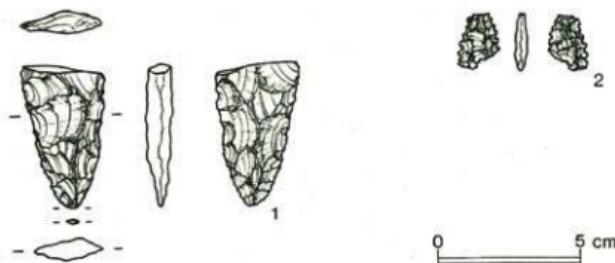
2はチャート製の石鎌であり、頭部と脚部を欠損する。側縁は鋸歯状を呈する。

第242図1, 3は石斧である。1は短冊形を呈し、頭部を欠損する。側縁は直線的に仕上げられ、部分的に磨製が施される。刃部は礫表と剥離面とのエッジが利用されており、磨耗している。3は片面に礫表を多く残すものあり、小形でぞんぐりとした石斧である。

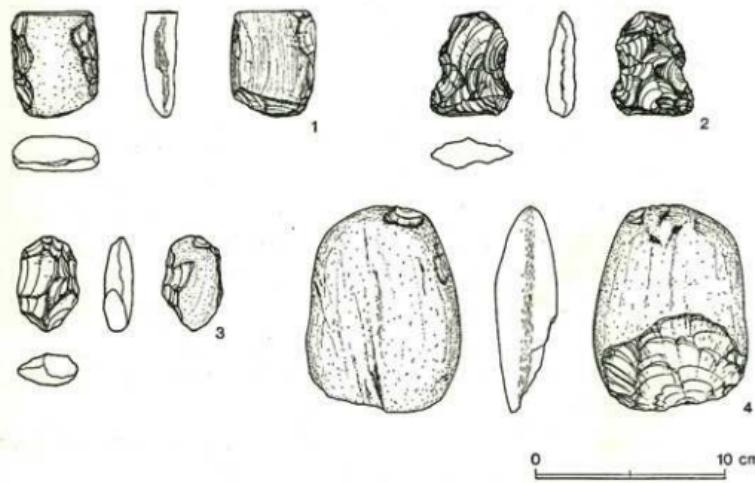
2は黒曜石製の振器である。側縁に3箇所の抉り込みが認められ、ノッチ・スクレイバーとして使用されたものと思われる。

4は礫器である。手のひらに乗る大きさの扁平な礫が使用され、片刃のチョッパー状に仕上げられている。刃部は2度の加熱によって形成される。石材は硬質砂岩である。

（金子 直行）



第241図 石器(1)



第242図 石器(2)

VIII 井沼方馬堤遺跡の調査

1. 遺跡の概観と調査経過

井沼方馬堤遺跡は、樹枝状に発達した大宮台地南端部の一舌状台地上に位置する。この台地は南北に接続した二つの独立丘状を呈しており、本遺跡はその北側台地の西側縁辺部にある。明花向遺跡からは北方約0.7kmの地点にある。標高約14m、沖積低地との比高は6~7mを測る。表土(30~40cm)下はきれいに削平されており、ハードローム層から西縁では第Ⅰ黒色帯にまで達している。このため削平以前の遺構遺存状態はきわめて悪く、プランの確認すら困難なものが多かった。

尚、この台地は昭和41年の調査以来、井沼方遺跡として著名であり、近年も浦和市によって数次にわたる調査が実施されている。その結果、縄文時代前期及び弥生時代後期の集落がそれぞれ確認されている。本報告の井沼方馬堤遺跡も、本来井沼方遺跡に含まれるものであるが、便宜上これを分けて遺跡名をつけた。

基本的な層序は明花向遺跡C区に順ずる。しかし異なる部分もある。以下に本遺跡の層位について略述しておく。

第Ⅰ層 茶褐色土層 しまり悪く細かいローム粒を多量に含む。再堆積土層である。

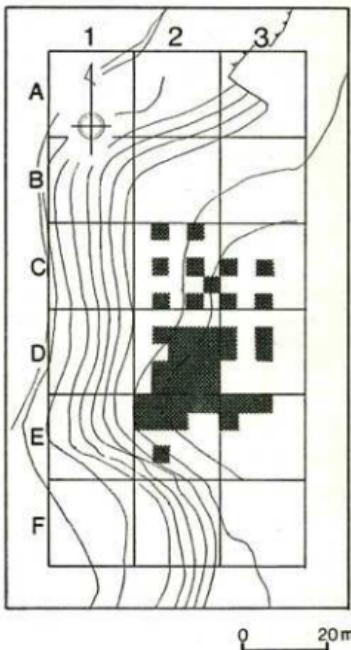
第Ⅱ層 茶褐色土層 第Ⅰ層に準ずるが、きめの粗いローム粒及びブロックで構成される。本層も再堆積土層であり、下層との境界が削平面となる。

第Ⅲ層 淡黄褐色土層 所謂ソフトロームにあたる。その大部分は削平により失われるが、次の第Ⅳ層との境界では激しく凹凸を描く。

第Ⅳ層 褐色土層 ハードロームに相当するものと思われる。この層の下面から先土器時代遺物が出土しはじめる。

第Ⅴ層 暗褐色土層 第Ⅰ黒色帯に該当するものと思われる。この層を中心として先土器時代資料が出土する。

第Ⅵ層 褐色土層 レンズ状に遺存していく確認できない部分もある。



第243図 井沼方馬堤遺跡先土器時代調査区

第Ⅶ層 暗褐色土層 第Ⅰ黑色帶の上部にあたると思われるが、下部と明確に分離できない。その点では明花向遺跡A区やC区と異なる点である。

第Ⅷ層 暗褐色土層 第Ⅰ黑色帶下部に相当すると思われるが明確ではない。

第Ⅸ層 褐色土層 本層の途中までしか掘り進めなかった。炭化物は第Ⅳ層から場所によっては本層にまで含んで分布している。

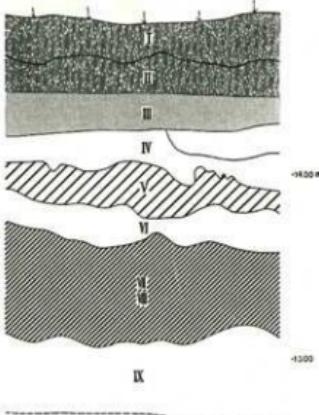
検出された削平以前の遺構は、縄文時代早期の炉穴10基、土壙3基である。この他、先土器時代の遺物集中2箇所が検出された。近世削平時から以後の遺構は溝4条、土壙85基、柵列3本他である。近世の溝は台地線に添って南北に走るもの、

及びこれに直交するものであるが、南北に走るものは茶褐色土でしまりのない覆土を有し、断面は逆台形を示す。この溝を境として、西側台地線辺部には直径・深さともに1m以上の土壙が濃密に分布する。覆土にはゴツゴツしたローム塊が詰り、その堆積状態は不規則である。故意の埋め戻しによるものと判断される。浦和市の調査区では、このような状態（削平を含め）は見られず、本遺跡を中心とした台地線辺部に限られているようである。その性格は不明ながらも、削平の激しさや数多くの土壙設営は、近世における土地利用についての示唆を与えていたと言えよう。

昭和56年6月1日に調査を開始するが、山林であったために無数の木根に悩まされ続けた。削平面（=遺構確認面）及び遺物出土の状態から、削平前の良好な遺構の存在は望めないのではないかとの落胆もあったが、7月に入り、まさに「残存」という状態で炉穴が検出され始めた。これらの精査と併行して縁辺部の土壙群の調査を行うが、いずれも遺物は出土しなかった。8月に遺跡測量を終了し、同月27日に航空写真撮影を実施する。撮影の完了と同時に先土器時代の調査に着手し、同日には2箇所の遺物集中を確認する。周辺へのグリッド拡張、及び下位の文化層確認を11月18日まで行ない、井沼方馬堤遺跡すべての調査を終了した。

（創持和夫・田中英司）

（註1）埼玉考古学会 1969 「埼玉の方形周溝墓」 埼玉考古第7号



第244図 井沼方馬堤遺跡層序

2. 先土器時代の遺構と遺物

(1) 第IV・V層の遺構と遺物

遺物分布（第245図）

井沼方馬堤遺跡における先土器時代の石器・礫・炭化物は第IV～V層を中心として出土した。出土層は複数にわたるが、時期的には表探資料を除いてほぼ一時期のものと思われる。

石器分布 石器の出土数は少ないが二つの集中に分離するようである。

集中1（第245・246図）D-2-14・15、D-2-19・20グリッドに位置している。1.5m程の長辺を持つ。10点足らずの石器から構成されている。剝片が中心となって遺存している。

集中2（第245・247・248図）D-2-23・24、E-2-3・4・5グリッドにある。長辺2m余の集中部を持つ。20点足らずの石器から成る。角錐状石器・ナイフ形石器などの製品を含んでいる。接合例もある。

礫分布（第245～248図） 磚は明花向遺跡C区などと同じく石器に順じた分布となっている。中には拳大ほどの大きさのものも混じるが、集中の密度は弱い。

炭化物分布（第245図） 炭化物は明花向遺跡と同じく検出を試みたすべてのグリッドで確認された。部分的にはD-2-24・25グリッドの一部のように、特に密度のやや濃い部分もある。しかし垂直分布では第IV～V層まで広範囲に散っており、集中部・時期ともに限定しがたい面が強い。

石 器

馬堤遺跡からは33点の石器と130点の礫が出土した。石器のうち尖頭器や石核を含む4点は表探資料である。

角錐状石器	1	剝 片	19
ナイフ形石器	2	折断剝片	5
搔・削器	1	碎 片	1
石 核	3	尖頭器	1

計33

尖頭器（第249図29） 29の尖頭器は表探資料であり、他の石器とは別時期にあたろう。細身の柳葉形で正面中央部には素材となった剝片の剥離面と思われるものが残っている。平行する稜線の存在からあるいは縦長の剝片を用いた可能性がある。

角錐状石器（第249図19） チャート製の角錐状石器である。12と同一母岩と思われる。正面左側縁に素材面を残すが、加工面との連続性から考えてナイフ形石器よりも角錐状石器である可能性が高い。打面を残置し、正面右側縁がやや鋸歯状を描く。

ナイフ形石器（12） チャート製で概形が台形状を描く。正面左側縁の上部にわずかな調整加工があるが、主に右側縁に加工が施されて打面が除去されている。

搔・削器（17） 一例のみの出土であるが破損品であることや全体の形状からすると、未製品の可能性もある。

馬 堤

石 核 破碎砾に数回の打撃を加えたものや、図示し得ないような小形のチャート製石核が数点ある。しかし表採品が多く時期を決定しがたい。

剝 片 (第249・250図) 剥片は21点出土したが各種の石質が用いられ、母岩の上でもまとまりがない。23は硬質頁岩を用いている。打面は小さく細やかな調整が施されている。23のような縦長の例は少ない。第249図15~第250図2・22は横長か幅広の例である。自然面を一部に残す大形の剥片が剥がされている。

接合資料 (第251図)

接合例1 (13・16) 唯一の接合資料である。大きな剝離面を打面として、自然面を残す剥片が剥がされている。

(田中 英司)

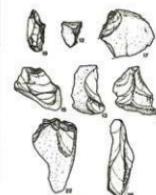
第16表 井沼方馬堤遺跡先土器時代石器一覧表(1)

番号	グリッド	北-南 (cm)	東-西 (cm)	標 高(m)		層位	石 器 名	石 質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	破損	備 考
				上	下									
1	D-2-15	357.0	363.0	14.068	14.064	V	碎 片	チャート	0.7	0.7	0.3	0.12		
2	"	381.0	366.5	13.899	13.888	"	剝 片	砂 岩	6.0	9.0	1.7	71.29		
3	"	314.5	390.0	14.089	14.084	"	"	チャート	3.0	3.2	0.8	5.29		
4	D-2-19	107.0	9.0	14.066	14.056	"	"	"	2.5	1.8	0.9	3.20		
5	D-2-20	117.0	382.0	14.143	14.131	N	石 核	"	1.7	2.4	1.5	6.02		
6	"	87.5	323.5	13.938	V	剝 片	"	"	1.3	1.2	0.4	0.39		
7	"	50.0	341.0	14.081	14.077	N	"	"	2.0	1.7	0.6	1.30		
8	"	21.5	347.5	13.958	13.953	V	"	石灰岩	3.3	3.1	1.2	10.67		
9	"	104.5	323.0	13.872	13.867	"	折断剝片	チャート	1.3	1.8	0.5	0.89		
10	"	48.0	378.0	13.836	13.828	"	"	"	2.3	0.9	0.6	2.25		
11	D-2-23	392.5	36.5	13.960	13.956	"	"	砂 岩	1.0	1.8	0.3	0.13		
12	D-2-24	343.0	390.0	13.932	13.926	"	ナイフ形石器	チャート	2.3	1.9	0.7	2.52		
13	E-2-3	62.5	33.0	14.049	14.049	"	剝 片	砂 岩	4.4	3.3	1.1	11.16		
14	"	91.5	22.0	13.998	13.998	"	"	チャート	1.8	1.8	0.9	0.93		
15	"	160.0	22.5	14.037	14.027	"	"	砂 岩	3.7	4.5	1.0	15.74		
16	"	173.0	20.0	13.979	13.968	"	"	"	4.4	2.0	0.9	8.79		
17	"	191.0	114.0	13.932	13.921	"	搔・削器	石灰岩	4.3	5.0	1.4	24.75		
18	"	95.5	16.0	13.952	13.946	"	剝 片	チャート	2.1	1.3	0.3	0.61		
19	E-2-4	90.0	395.0	14.048	14.048	"	角錐状石器	"	3.8	1.6	1.0	5.94		
20	"	123.0	370.0	13.940	13.938	"	剝 片	礫 岩	2.2	2.4	0.4	1.32		
21	"	100.5	327.0	13.952	13.947	"	"	"	2.4	2.5	0.5	2.86		
22	"	87.0	294.0	13.972	13.948	"	"	砂 岩	6.5	3.9	1.2	27.88		
23	E-2-5	194.0	297.5	13.813	13.793	N	"	硬質頁岩	7.0	2.4	0.7	7.63		
24	E-2-4	113.5	289.0	14.086	14.072	V	折断剝片	砂 岩	2.9	3.7	1.0	10.25		
25	"	167.0	352.0	13.977	13.928	"	剝 片	礫 岩	4.8	5.6	1.3	26.85		
26	"	181.0	353.0	13.993	13.985	"	"	砂 岩	4.9	3.9	0.8	11.98		
27	"	127.5	376.5	13.709	13.737	W	"	安山岩	2.8	2.2	0.8	5.04		
28	E-2-4						尖頭器	粘板岩	1.2	2.1	0.4	0.85		
29	E-2-5							黒曜石	4.5	1.5	0.8	4.17		
30	"						ナイフ形石器	"	2.9	1.8	0.9	2.95		
31	E-3						石 核	チャート	4.3	3.8	2.2	32.91		
32	D-2-23	190.0	162.0	13.958	13.937	V	"	"	3.1	4.7	6.5	70.70		
33	D-2-20	161.5	334.5	13.938	13.932	"	折断剝片	"	0.9	1.0	0.2	0.28		

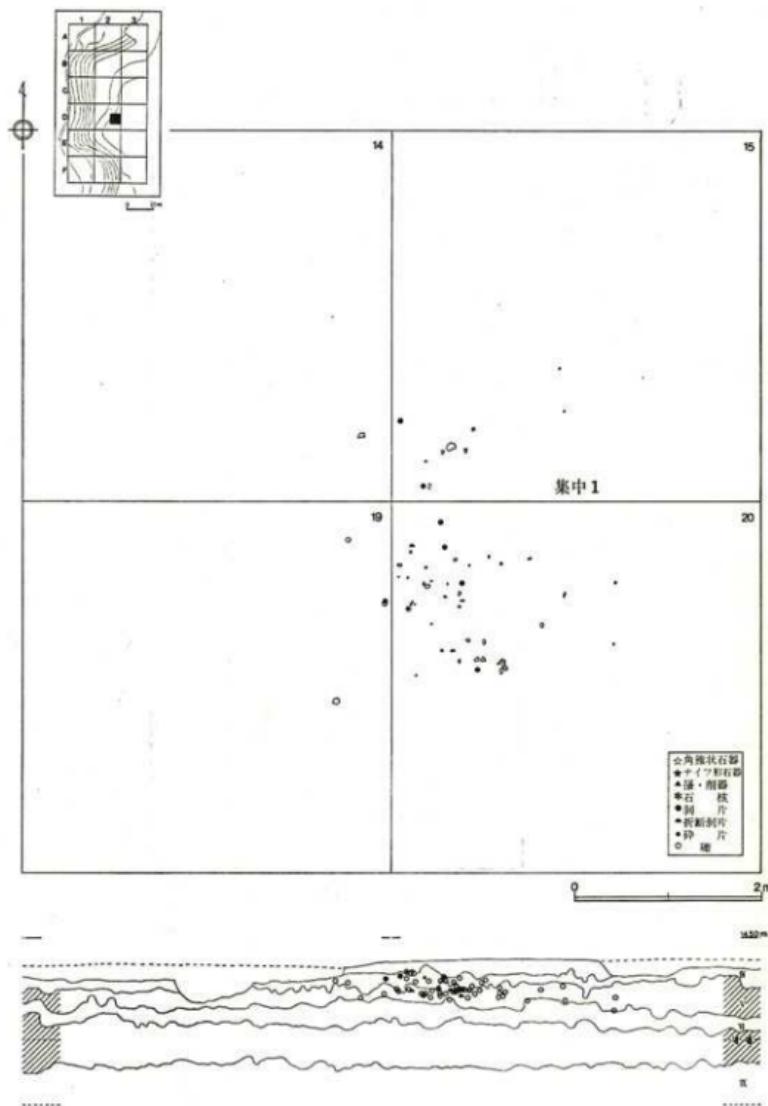
表採



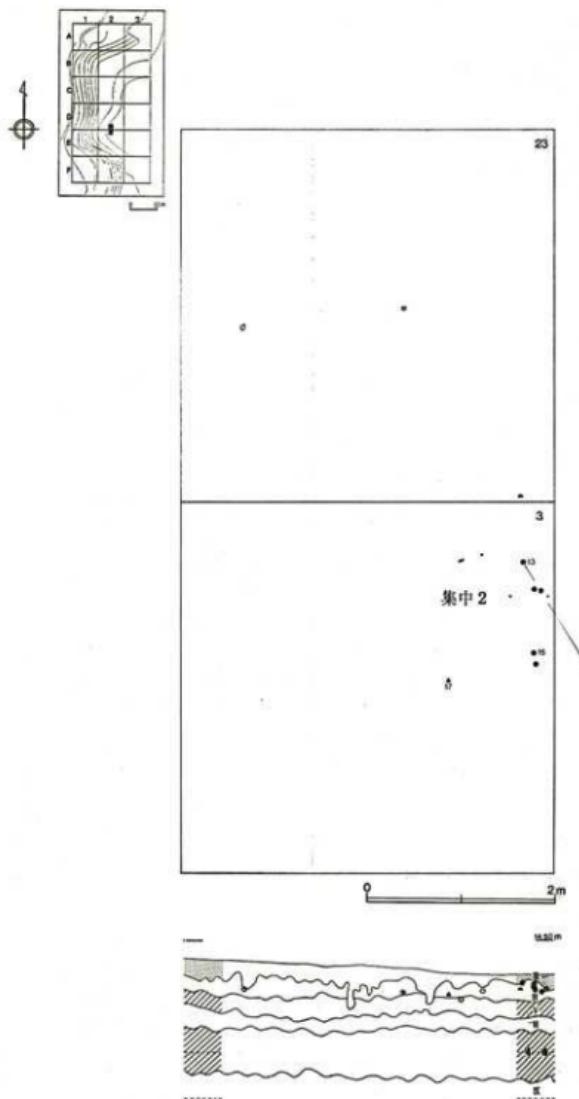
集中1



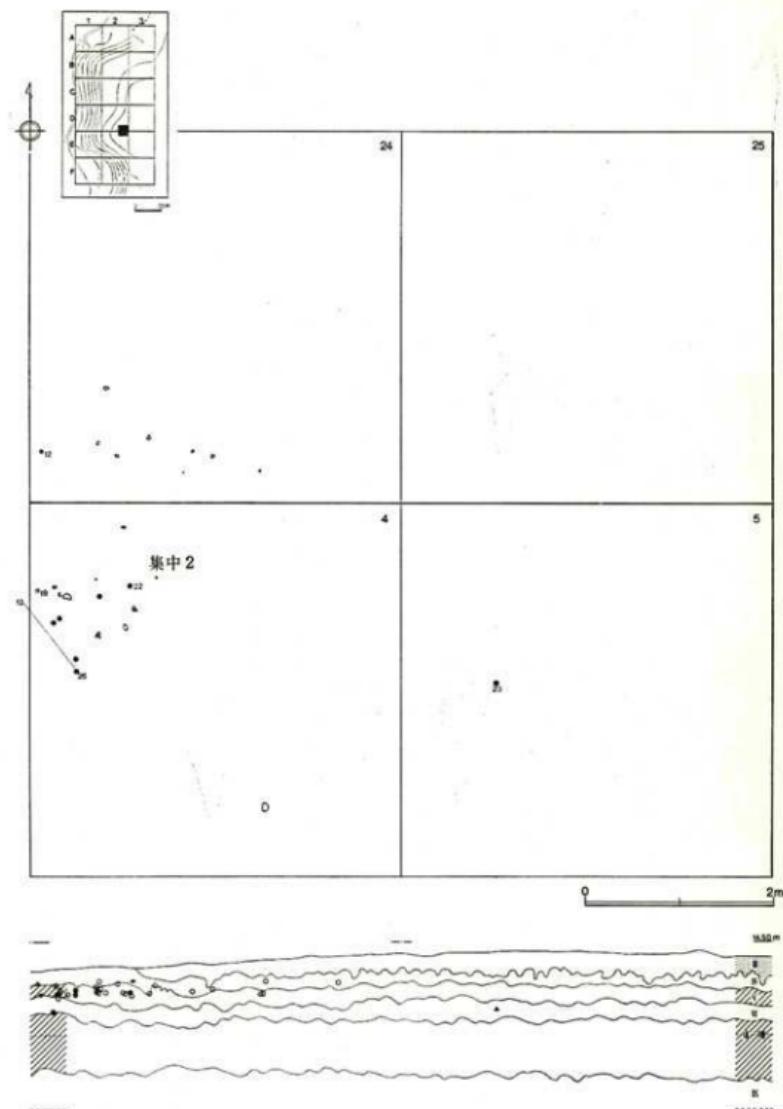
集中2



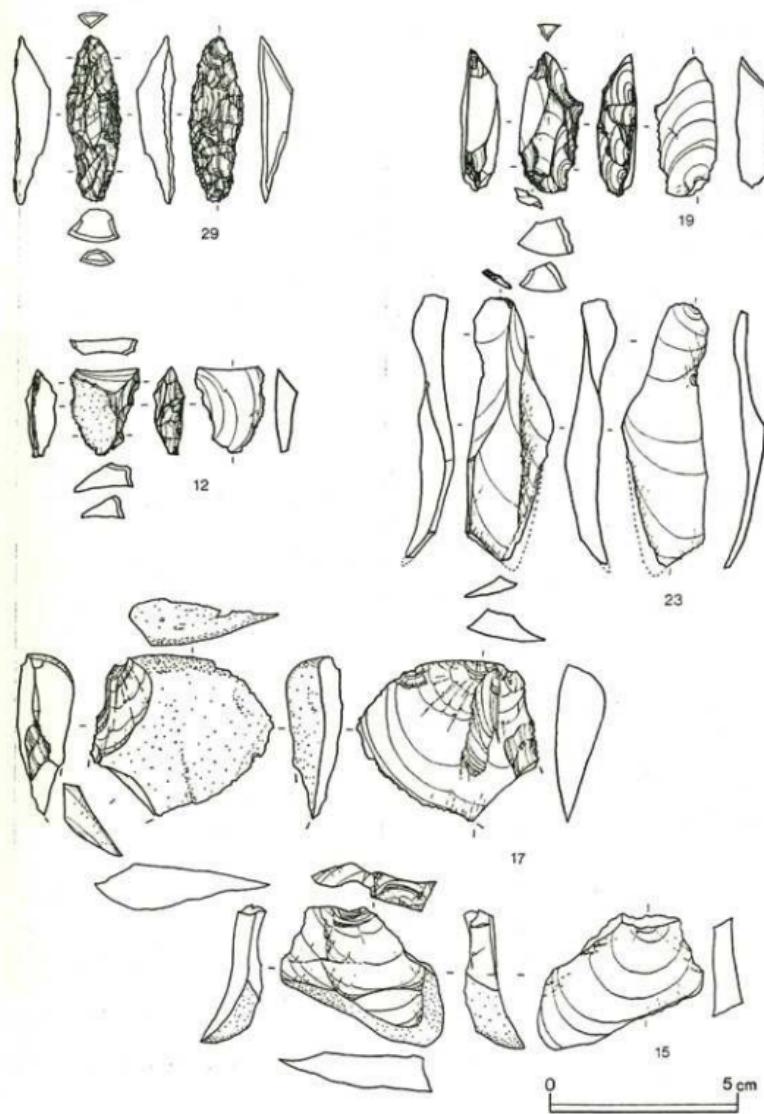
第246図 先土器時代遺物分布(1)



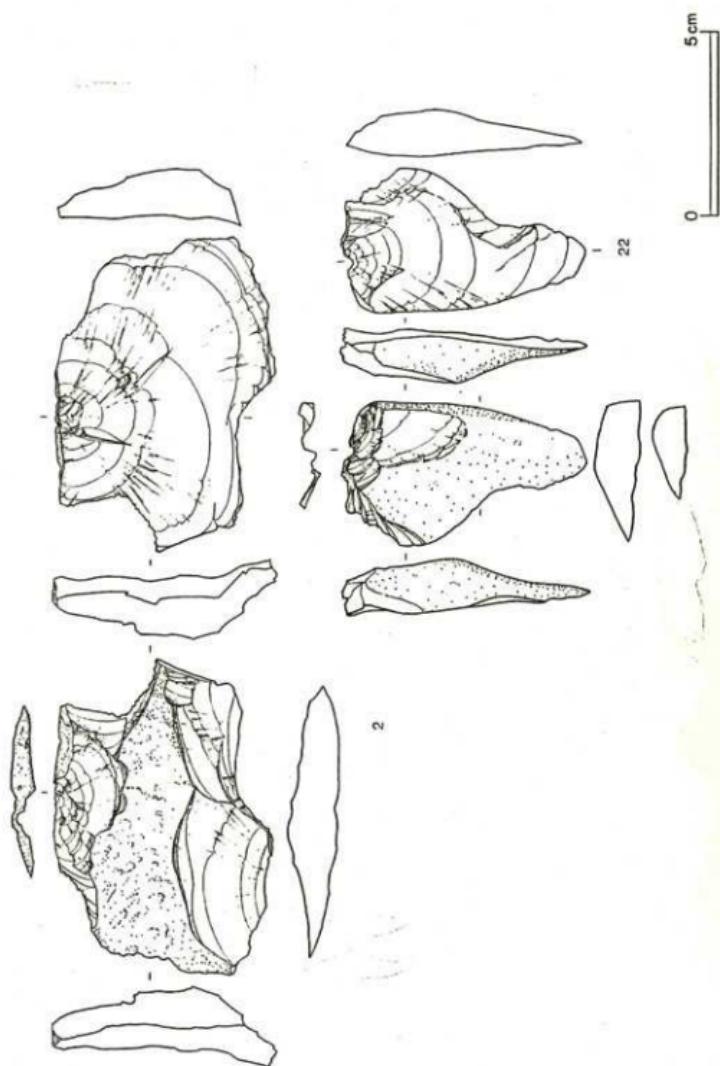
第247図 先土器時代遺物分布(2)



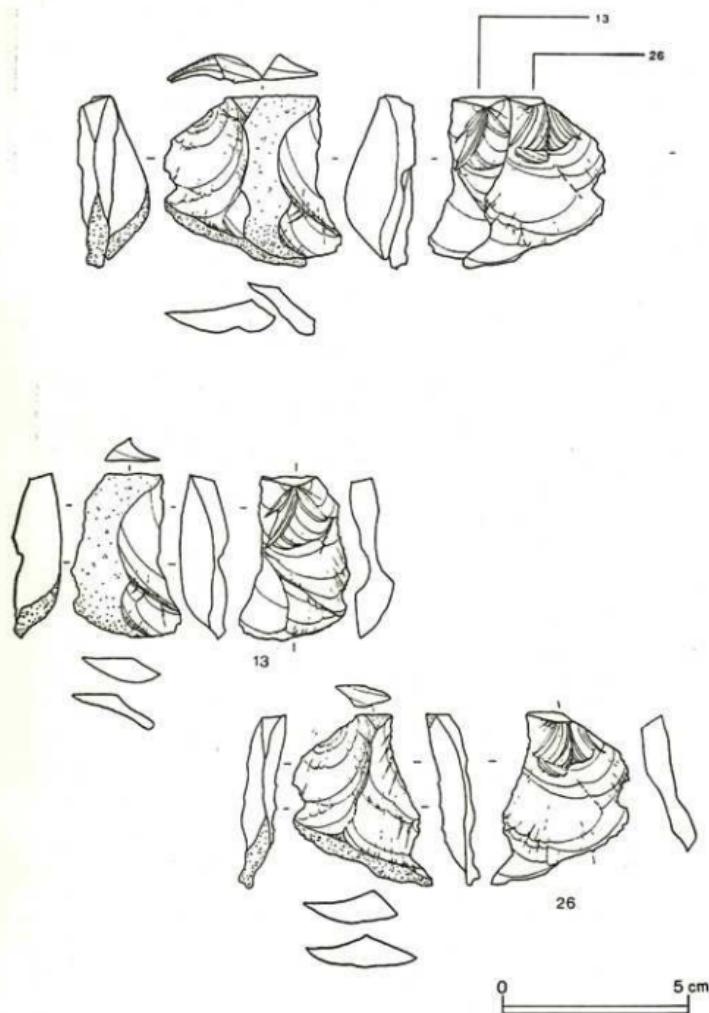
第248図 先土器時代遺物分布(3)



第249図 第IV～V層の石器(1)



第250図 第IV～V層の石器(2)



第251図 第IV～V層の石器接合例

第17表 井沼方馬堤遺跡先土器時代礫一覧表(1)

番号	グリット	北-南 (cm)	東-西 (cm)	標高(m)		層位	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	完形	スヌ	赤化	備考
				上	下										
1	D-2-20	159.5	327.5	14.077	14.073	N	チャート	2.2	1.5	1.3	3.38				
2	"	161.0	346.0	13.921	13.896	V	砂岩	4.3	3.2	2.9	26.46	○		○	
3	"	187.5	373.5		14.018	"	チャート	1.0	0.8	0.5	0.32			○	
4	"	111.0	379.0	14.128	14.111	N	"	4.0	1.9	1.2	10.03	○		○	
5	"	111.5	375.5	14.136	14.122	V	砂岩	1.4	1.0	0.3	0.48	○		○	
6	"	103.5	342.0	14.071	14.030	"	"	3.0	2.4	0.8	4.85			○	
7	"	114.0	327.0	13.972	13.966	"	"	2.4	2.0	1.0	4.63			○	
8	"	100.0	327.0	13.943	13.926	"	チャート	4.9	3.1	2.0	26.24	○		○	
9	"	86.5	357.0	14.030	14.026	"	"	2.1	1.2	0.7	2.03			○	
10	"	89.5	365.0	13.929	13.889	"	砂岩	4.3	3.0	3.2	46.98			○	
11	"	69.0	391.5	13.928	13.923	"	"	6.3	3.5	0.8	12.86			○	
12	"	83.0	383.0		14.063	"	チャート	2.6	1.3	0.5	1.12			○	
13	"	55.0	380.0	13.988	13.950	"	"	3.9	2.7	1.9	16.62	○		○	
14	"	72.0	363.0	13.941	13.932	"	砂岩	2.1	1.9	1.2	3.85			○	
15	"	82.5	392.0		13.951	"	チャート	1.3	0.5	0.4	0.36			○	
16	"	63.0	332.0	13.936	13.922	"	砂岩	3.8	2.9	1.0	9.90	○		○	
17	"	18.0	332.0	14.016	14.009	"	"	2.9	1.7	1.0	3.27			○	
18	"	4.5	341.0	14.044	14.041	"	チャート	3.0	1.2	0.6	2.35	○		○	
19	"	69.5	316.5	13.933	13.931	"	砂岩	1.2	1.1	0.4	0.70			○	
20	"	60.0	295.5	14.043	14.039	"	"	1.9	1.0	0.5	0.96			○	
21	"	67.5	282.0	14.005	13.976	"	"	2.5	2.5	1.2	6.53	○		○	
22	"	173.0	327.0	13.937	13.915	"	"	3.6	2.8	1.6	15.06			○	
23	"	92.0	362.0	13.922	13.898	"	砂岩	4.8	4.2	3.0	60.00	○		○	
24	"	89.5	340.0	13.905	13.897	"	"	1.8	1.3	0.4	0.83			○	
25	"	150.0	318.0	13.880	13.864	"	チャート	4.4	2.9	1.8	24.72	○		○	
26	"	87.0	157.0	13.862	13.850	"	砂岩	2.8	2.0	1.5	6.99			○	
27	"	100.5	212.0	13.819	13.815	"	"	4.0	1.5	0.6	2.98			○	
28	"	62.0	252.0	13.827	13.819	"	"	2.5	1.8	1.3	2.75	○		○	
29	"	132.5	356.5	13.870	13.863	"	チャート	1.1	1.0	0.7	1.01			○	
30	"	102.5	158.5	13.735	13.713	V	砂岩	1.6	1.2	0.6	0.99			○	
31	D-2-23	214.0	334.0	13.988	13.956	V	"	5.0	2.1	3.1	50.18	○		○	
32	D-2-24	277.0	319.0	14.010	13.963	"	チャート	6.3	3.5	2.5	69.54	○		○	
33	"	337.0	328.0	14.062	14.078	"	"	2.6	2.6	1.2	13.84			○	
34	"	331.0	274.0	13.956	13.951	"	"	2.3	2.3	1.0	4.90	○		○	
35	"	265.5	70.0	14.066	14.060	"	"	1.6	1.5	1.0	2.35	○		○	
36	"	237.0	147.0	14.084	14.078	"	"	2.0	1.8	1.5	5.42			○	
37	"	350.5	308.0	14.061	14.048	"	"	3.3	2.6	1.2	11.99			○	
38	"	345.0	226.5	13.988	13.974	"	"	1.9	1.6	1.0	21.77	○		○	
39	"	351.0	205.0	14.007	13.985	"	"	4.6	2.6	1.8	22.24	○		○	
40	"	366.0	154.0	13.940	13.931	"	"	1.5	1.3	0.8	1.44	○		○	
41	D-3-6	106.0	215.0		13.018	V	"	0.8	0.8	0.6	0.65	○			
42	"	90.0	218.0		12.953	V	砂岩	1.0	0.5	0.4	0.41	○			
43	"	70.0	159.5		12.928	"	チャート	1.1	0.9	0.5	0.70	○			
44	"	164.0	64.0	13.026	13.011	"	石英	3.5	1.4	1.3	7.41	○			
45	E-2-2	292.0	1.5	13.008	13.006	"	砂岩	1.7	0.7	0.6	1.04	○			
46	E-2-3	57.0	78.5		13.958	V	"	1.5	1.5	0.4	0.31				
47	"	101.0	7.0	13.992	13.978	"	"	2.3	1.4	0.6	1.77				
48	"	64.0	100.0	13.866	13.858	"	"	3.5	1.8	0.6	3.16				

第17表 井沼方馬堤遺跡先土器時代縄一覧表(2)

番号	グリッド	北-南 (cm)	東-西 (cm)	標高(m)		層位	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	完形	スス	赤化	備考
				上	下										
49	E-2-3	101.0	47.5	13.058	13.001	V	チャート	0.8	0.8	0.5	0.45	○			
50	"			13.001	12.998	"	石英	1.3	0.6	0.4	0.62	○			
51	"			12.999	12.991	"	砂岩	1.2	1.1	0.7	1.25	○			
52	E-2-4	91.0	373.5	14.023	14.031	V	チャート	5.6	2.1	2.0	25.42	○			
53	"	98.5	369.0	14.012	13.986	"	"	3.8	2.6	1.8	15.51	○			
54	"	100.5	361.0	13.962	13.942	"	"	7.8	4.6	1.9	83.19	○			
55	"	119.5	371.5	13.950	13.907	"	砂岩	5.4	2.1	1.1	9.55	○			
56	"	83.0	330.0		14.023	"	チャート	2.5	1.3	0.6	1.68	○			
57	"	26.5	300.0	13.977	13.963	"	"	5.0	3.0	2.0	26.54	○			
58	"	81.0	265.5	14.042	14.035	"	砂岩	2.2	1.7	0.8	2.65	○			
59	"	133.0	298.0	13.984	13.946	"	チャート	6.3	2.3	2.3	35.10	○			
60	"	143.5	326.0	14.000	13.986	"	"	4.0	1.9	1.9	18.80	○			
61	"	331.0	150.0	13.977	13.947	"	礫岩	8.8	6.4	4.0	44.27	○			
62	"	113.5	291.0	13.949	13.926	"	砂岩	1.5	1.3	1.1	1.09	○			
63	"	142.5	328.0	13.971	13.963	"	"	6.2	2.8	2.2	28.76	○			
64	"	147.0	47.0		12.882	V	"	1.4	0.8	0.7	0.99	○			
65	"	171.5	69.0		12.945	"	石英	1.1	0.6	0.5	0.58	○			
66	"	91.0	93.0		12.717	"	砂岩	0.7	0.7	0.4	0.47	○			
67	"	31.5	105.5		12.742	"	"	0.9	0.7	0.5	0.43	○			
68	"	138.5	6.0		12.644	"	石英	0.7	0.4	0.4	0.27	○			
69	"	138.5	35.0		12.661	"	砂岩	0.4	0.3	0.2	0.02	○			
70	"	150.0	45.0		12.692	"	"	0.4	0.3	0.2	0.02	○			
71	"	59.0	69.0		12.672	"	"	0.6	0.4	0.3	0.03	○			
72	"	94.0	96.0		12.667	"	チャート	0.8	0.7	0.5	0.05	○			
73	E-2-5	178.0	383.0		12.746	"	砂岩	2.8	1.4	1.0	4.49	○			
74	"	90.0	384.5		12.700	"	"	0.4	0.4	0.3	0.39	○			
75	"	91.0	370.0		12.706	"	"	1.0	0.8	0.5	0.60	○			
76	"	147.0	326.0		12.842	"	チャート	1.0	0.9	0.8	0.97	○			
77	"	79.0	283.0		13.023	"	砂岩	0.8	0.7	0.5	0.59	○			
78	"	126.0	179.0		12.625	"	チャート	1.3	0.6	0.5	0.67	○			
79	"	143.0	270.0		12.632	"	砂岩	0.5	0.4	0.2	0.05	○			
80	"	190.0	320.0		12.821	"	チャート	0.6	0.4	0.3	0.08	○			
81	"	85.5	373.5		12.751	"	"	0.3	0.2	0.1	0.01	○			
82	"	55.0	213.0		12.628	"	砂岩	0.7	0.5	0.5	0.40	○			
83	"	76.5	290.5		12.643	"	チャート	0.8	0.7	0.6	0.60	○			
84	E-2-4					"	"	2.6	2.5	1.0	8.48	○			表採
85	E-3-1	57.0	15.5		12.757	V	"	0.4	0.3	0.1	0.03	○			
86	"	74.0	22.0		12.794	"	"	0.5	0.4	0.4	0.08	○			
87	"	38.0	33.0		12.860	"	砂岩	1.5	0.8	0.7	0.98	○			
88	"	57.0	36.0		12.831	"	"	0.3	0.2	0.1	0.02	○			
89	"	85.0	47.0		12.873	"	チャート	0.9	0.5	0.3	0.06	○			
90	"	171.5	44.0		12.923	"	砂岩	1.0	0.5	0.5	0.13	○			
91	"	80.0	59.0		12.836	"	"	0.9	0.7	0.4	0.21	○			
92	"	117.5	65.5		12.840	"	"	0.6	0.4	0.3	0.05	○			
93	"	83.0	78.0		12.804	"	"	0.6	0.5	0.3	0.05	○			
94	"	101.0	90.0		12.806	"	"	0.9	0.6	0.4	0.18	○			
95	"	44.0	100.0		12.804	"	"	0.8	0.4	0.3	0.09	○			
96	"	59.0	107.0		12.808	"	チャート	1.0	0.8	0.5	0.60	○			

第17表 井沼方馬堤遺跡先土器時代標一覧表(3)

番号	グリッド	北-南 (cm)	東-西 (cm)	標 高(m)		層 位	石 質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	完形	スス	赤化	備 考
				上	下										
97	E-3-1	66.0	110.0	12.812	V	"	"	0.6	0.6	0.3	0.07	○			
98	"	39.0	131.5	12.720	"	"	"	0.7	0.6	0.5	0.12	○			
99	"	41.5	176.5	12.715	"	"	"	0.9	0.5	0.4	0.07	○			
100	"	12.5	227.0	13.104	"	砂岩	0.5	0.5	0.3	0.03	○				
101	"	182.0	312.0	12.755	"	"	"	5.8	0.4	0.1	0.04	○			
102	"	63.0	47.5	12.767	"	チャート	0.4	0.3	0.2	0.02	○				
103	"	90.5	49.0	12.740	"	"	"	0.5	0.4	0.2	0.04	○			
104	"	122.0	43.0	12.742	"	"	"	0.8	0.2	0.2	0.02				
105	"	116.0	94.0	12.741	"	"	"	0.3	0.2	0.1	0.01	○			
106	"	111.5	242.0	12.708	"	砂岩	0.2	0.1	0.1	0.01	○				
107	E-3-2	120.0	304.0	12.803	"	"	"	1.2	1.0	0.8	0.85	○			
108	"	157.0	247.0	12.825	"	"	"	0.9	0.8	0.6	0.78	○			
109	"	65.5	149.0	12.787	"	"	"	1.0	0.8	0.4	0.60	○			
110	"	142.0	128.0	12.811	"	チャート	0.8	0.2	0.1	0.08	○				
111	E-3-6	140.0	281.0	13.024	"	砂岩	1.4	0.8	0.6	0.98					
112	"	45.0	107.5	13.016	"	"	"	1.6	1.1	0.5	1.28	○			
113	D-2-14	379.0	330.0	13.907	13.860	V	"	5.1	4.3	3.9	84.38	○	○		
114	D-2-15	323.0	311.5	13.978	13.969	"	チャート	2.7	2.0	1.3	4.92	○			
115	"	303.0	213.5	13.968	"	"	"	0.9	0.6	0.5	0.38	○			
116	D-2-19	216.0	59.0	13.917	13.901	"	砂岩	6.5	5.8	1.0	62.25	○	○	○	
117	"	110.0	10.0	14.043	14.041	"	チャート	1.2	0.8	0.6	0.37	○			
118	"	42.0	46.5	14.025	14.023	"	砂岩	3.4	2.7	0.9	7.58	○	○		
119	D-2-15	347.0	344.0	13.885	13.869	"	チャート	4.0	3.1	1.6	24.22	○	○		
120	"	341.0	336.0	13.875	13.830	"	"	8.9	6.0	4.6	74.62	○	○		
121	"	345.0	320.0	13.948	13.933	"	砂岩	1.9	1.8	1.3	2.28	○			
122	D-2-20	133.5	238.5	13.951	13.935	"	チャート	3.2	2.0	1.2	7.00	○			
123	"	180.0	277.5	13.920	13.911	"	砂岩	3.9	3.5	1.1	12.32	○	○		
124	"	183.0	283.0	13.909	13.901	"	"	4.1	2.7	1.2	12.04	○			
125	"	176.5	279.0	13.923	13.870	"	"	8.8	4.0	4.1	13.00	○	○		
126	"	173.5	283.0	13.931	13.866	"	"	7.7	5.1	3.2	14.87	○			
127	"	171.0	302.0	13.967	13.943	"	"	3.8	3.6	2.6	25.70	○	○		
128	"	170.5	307.5	13.923	13.896	"	"	6.2	2.9	2.3	51.59	○	○		
129	"	152.0	301.0	14.025	14.013	"	チャート	2.9	2.0	1.6	10.37	○			
130	"	171.5	326.5	13.968	13.956	"	"	1.8	1.1	1.1	1.55	○			

3. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 炉穴

第1号炉穴 (S F-1) (第252図)

(位置) C-2-4グリッド (形状) 削平及び近世土壌による切断のため、炉跡のみの残存となる。このために全体の形態・規模はともに不明である。(炉跡) わずかに破壊を免れた炉床は焼土ブロックからなり、赤焼が著しくバリバリの状態である。(遺物) 見られなかった。

第2号炉穴 (S F-2) (第252図)

(位置) C-2-4グリッド (形状) 楕円形を呈する炉跡のみの残存であり、全体の形態・規模は不明である。(炉跡) 80×52cmの南北に長い楕円形。わずか5cm程の掘り込みを認めるが、硬くしまった焼土ブロック層となっている。既にこの上面は炉床にあたるものと思われる。(遺物) 見られなかった。

第3号炉穴 (S F-3) (第252図)

(位置) C-2-9グリッド (形状) これも2基の炉跡が残存するにすぎない。両者の間に楕円形の掘り込みが見られ、両炉跡一あるいはいずれか一に伴うものと思われる。(規模) 中間の土壌は160(推定)×84×8cmを測る。(覆土) 同じく土壌内は以下の2層に分けられる。

第1層 暗茶褐色土 烧土粒・炭化物を含む。しまりの強い土層。

第2層 暗黄茶褐色土 加熱されたローム粒とロームブロックが密に詰まり、きめ粗くボソつく。

(焼土の状態) F₁-44×40×9cm。赤褐色で焼土とロームのブロックからなる。硬くしまってはいるが、かなりボロボロと崩れる。F₂-45×42×12cm。赤褐色を呈する焼土ブロックからなる。若干の炭化物を含み、全体的にF₁よりも焼土量が多い。(炉跡) F₁-41×35×8cmの楕円形で、炉床はよく赤焼している。F₂-52×48×12cmのほぼ円形を呈し、炉床の赤焼は顕著でバリバリとなる。

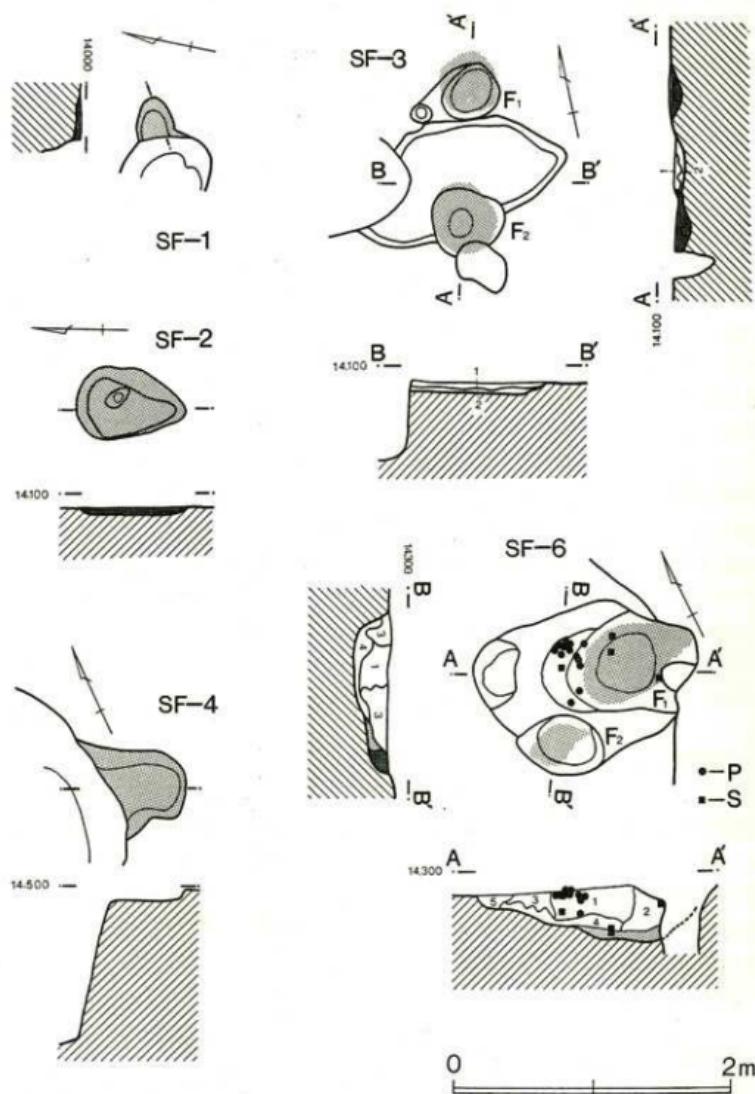
(遺物) 見られなかった。

第4号炉穴 (S F-4) (第252図)

(位置) C-2-9グリッド (形状) これも削平と近世土壌により破壊されつくしている。炉跡のわずかな残存にすぎず、全体の形態・規模等はまったく不明である。(炉跡) 現状で92×75×8cmを測る。炉床は良く赤焼している。(遺物) 見られなかった。

第5号炉穴 (S F-5) (第253図)

(位置) C-3-14グリッド (形状) 足場と炉跡からなる楕円形プランの炉穴と思われる。北を搅乱壌によって切断されており、全体の規模は不明である。(規模) 現状で134×70×16cm(主軸方向) 推定S-58°-W(覆土)以下の4層に分かれるが、全体に焼土の影響が強い。



第252図 第1・2・3・4・6号炉穴 (SF-1・2・3・4・6)

馬 堤

第1層 暗赤褐色土 焼土粒・ローム粒・黒色土粒が多く点在する。しまりは弱いが粘性は強い。
第2層 暗赤褐色土 第1層より焼土粒の含有量は減少し、赤味が弱く全体的に明るくなる。
第3層 暗茶褐色土 焼土粒・ローム粒が点在する。しまり・粘性は強く、若干の炭化物を含む。
第4層 暗茶褐色土 しまりは弱いが粘性は強い。ロームに近い土層。

(焼土の状態) 60×44cmの範囲に広がり、厚さは約11cmである。きれいな赤色でサラサラする。
(炉跡) 80×74×8cmの不整円形を呈し、炉床は赤焼が顯著である。(遺物) 見られなかった。

第6号炉穴 (S F-6) (第252図)

(位置) C-3-9グリッド (形状) 東側は調査区外へ一部かかるため、全体の形態・規模は不明確である。現状では足場と2基の炉跡を有し、梢円形のプランを示すものと思われる。尚、2基の炉跡に切り合はれ見られない。(規模) 162×115×24cm (主軸方向) N-87°-E (覆土) 以下の5層に分かれる。全体的にしまり弱く、きめ細かいもののパサつく。焼土の含有も少ない。

第1層 暗茶褐色土 焼土粒が多く含まれる他、若干の炭化物を含む。しまり・粘性ともに弱い。
第2層 暗茶褐色土 茶褐色土にロームがしみ状に広がる。焼土の含有はほとんど見られない。
第3層 暗茶褐色土 焼土粒及びローム粒が多く分布する。若干の炭化物を含む。
第4層 明茶褐色土 しまり・粘性ともに弱い。焼土粒はあまり含まれず、ローム粒が多く点在。
第5層 明茶褐色土 きめが粗くしまりは弱い。ロームを全体に溶混する。

(焼土の状態) F₁-90×60cmの範囲を有し、厚さ約12cmを測る。赤褐色を呈しており、焼土粒と同ブロックからなる。しまり良く炭化物を多く含む。F₂-範囲は50×40cmで、厚さは約12である。赤褐色で焼土と加熱されたロームブロックからなる。(炉跡) F₁-95×70×10cmの梢円形を呈し、炉床は良く赤焼しているがやや軟質である。F₂-64×43×15cmの梢円形で赤焼はわずかとなる。

(遺物) 中央の覆土上位より第V群土器が集中して出土している。

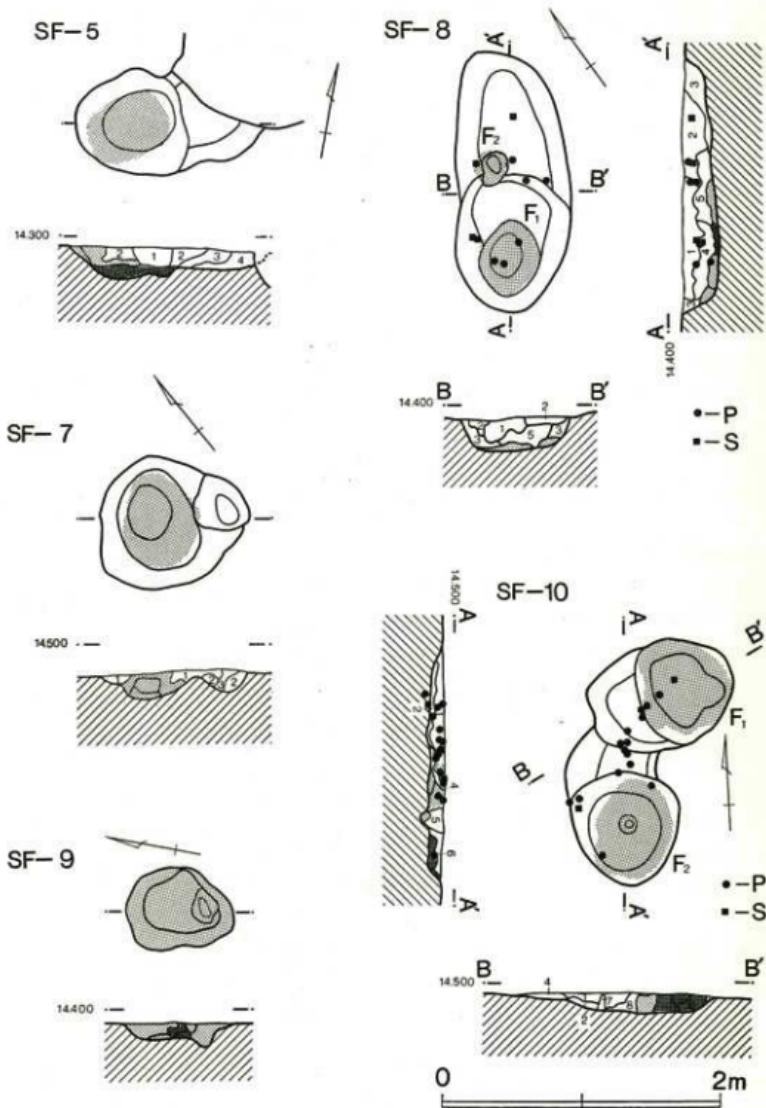
第7号炉穴 (S F-7) (第253図)

(位置) C-3-13グリッド (形状) 不整の円形プランを示すが、これが炉跡のみの残存体か否かは不明である。このため全体の規模と形態も不明確であり、ここでは一応炉跡として扱うこととした。(覆土) 以下の3層が認められるが、いずれもしまりと粘性の弱いものである。

第1層 黒褐色土 焼土粒及びローム粒をほぼ全体に含有し、炭化物も若干認められる。
第2層 明黒褐色土 焼土の量は少なくロームブロックが広がる。きめ細かくしまり・粘性強い。
第3層 暗褐色土 ほとんどロームにより構成され、きめはやや粗いが粘性は強い。
(遺物) 見られなかった。

第8号炉穴 (S F-8) (第253図)

(位置) D-3-3グリッド (形状) 足場と2基の炉跡からなり、長梢円形を呈する。炉跡間の切り合は見られないが、うちF₂は掘り込みが浅く焼土範囲もかなり狭い。(規模) 188×80×21cm (主軸方向) S-32°-W (覆土) 以下の5層に分かれる。全体にきめ細かくしまりが良い。



第253図 第5・7・8・9・10号坑穴 (SF-5・7・8・9・10)

馬 堤

- 第1層 黒褐色土 きめ細かくしまり強い。焼土粒が多く点在する。
- 第2層 黒褐色土 焼土粒はほとんど見られず、色調は全体的に暗い。
- 第3層 茶褐色土 黄褐色土がしみ状に広がり、しまり・粘性ともに強い。
- 第4層 暗茶褐色土 焼土粒が点在する。黄褐色土がしみ状に広かり、きめが細かい。
- 第5層 黒褐色土 焼土粒と加熱されたローム粒が点在する。しまり・粘性ともに強い。
- (焼土の状態) F_1 — $90 \times 75 \times 6$ cm。焼土及びローム粒で構成され、しまりが弱くバサツく。他に若干の炭化物を含む。 F_2 — $30 \times 25 \times 3$ cm のきれいな赤色の焼土粒からなり、しまりが弱くバサバサする。 F_1 に比して赤色は強いが、焼土の量は逆に少なくなる。(炉跡) F_1 — $98 \times 80 \times 8$ cm の楕円形で炉床は良く赤焼している。 F_2 — $24 \times 22 \times 3$ cm の円形で炉床はほとんど焼けておらず、むしろ軟質である。(遺物) 覆土中位より 6 点の第Ⅴ群土器が出土している。

第9号炉穴 (S F-9) (第253図)

(位置) E—3—1 グリッド (形状) 削平のため炉跡のみが残存するにすぎず、全体の規模及び形態は不明である。(焼土の状態) 範囲は炉跡の規模に等しく、焼土・ローム・黒色土によって構成される。暗赤褐色を呈し、きめや粗くしまり弱い。(炉跡) $77 \times 62 \times 12$ cm の楕円形で、炉床はわずかに赤焼する。(遺物) 見られなかった。

第10号炉穴 (S F-10) (第253図)

(位置) E—3—2 グリッド (形状) 2基の切り合いであり、その新旧関係は F_2 (古) $\rightarrow F_1$ (新) である。いずれも楕円形を呈すると思われるが、炉跡に比して足場は狭い。(規模) F_1 — $102 \times 74 \times 10$ cm F_2 —現状で $116 \times 65 \times 10$ cm (主軸方向) F_1 は $N-73^\circ-E$ F_2 はほぼ $N-S$ (覆土) 以下の 8 層に分かれ。主に第1・2層が F_1 、第3～8層が F_2 の覆土である。

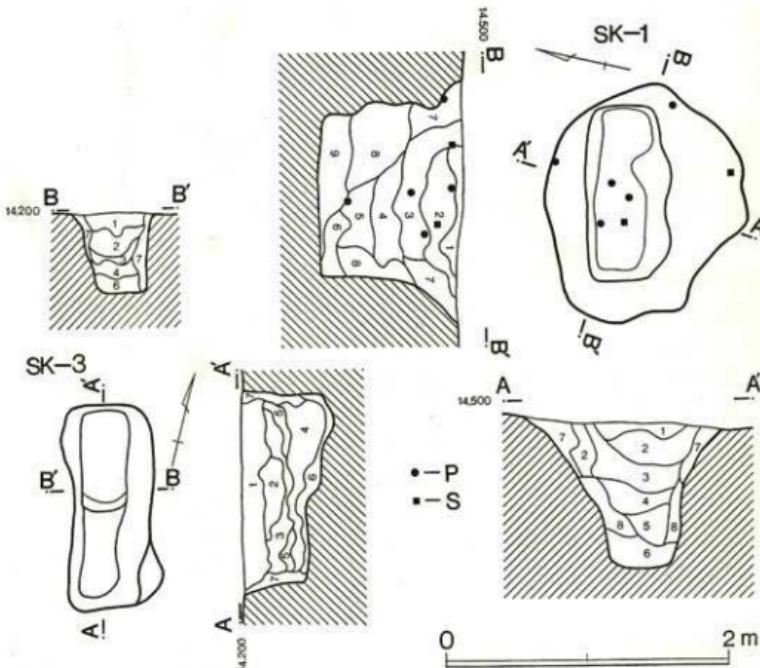
- 第1層 黒褐色土 きめ細かくしまりも良い。加熱されたローム粒と焼土を含む。
- 第2層 暗茶褐色土 ローム粒を多量に含み、焼土はあまり見られない。
- 第3層 明黒褐色土 ロームの含有量が増え、わずかではあるが焼土を含む。
- 第4層 茶褐色土 ロームが薄く溶け混んだ土層である。
- 第5層 暗褐色土 きめ細かくしまりも良い。焼土含有は少ない。
- 第6層 暗黄褐色土 きめ細かくしまり・粘性ともに良い。ロームブロックが多く含まれる。
- 第7層 暗茶褐色土 きめ粗くしまりが悪い。單一土層である。
- 第8層 暗赤褐色土 焼土粒を良く含み、きめ細かくしまりもある。わずかに炭化物を含む。
- (焼土の状態) F_1 — 70×55 cm の範囲を有し、厚さは約 14 cm である。きれいな完全焼土層で硬くしまっている。 F_2 — $80 \times 65 \times 6$ cm 焼土ブロックからなる。両者を比較すると F_1 の方が強くしまっており、きめ細かく色調も鮮かである。(炉跡) F_1 — $75 \times 68 \times 8$ cm の円形を呈し、炉床の赤焼は顕著でバリバリとなる。 F_2 — $80 \times 76 \times 5$ cm の円形で炉床はわずかに赤焼する。(遺物) 焼土中には見られないが、両足場を中心に第Ⅴ群土器が 15 点出土している。

(2) 土壌

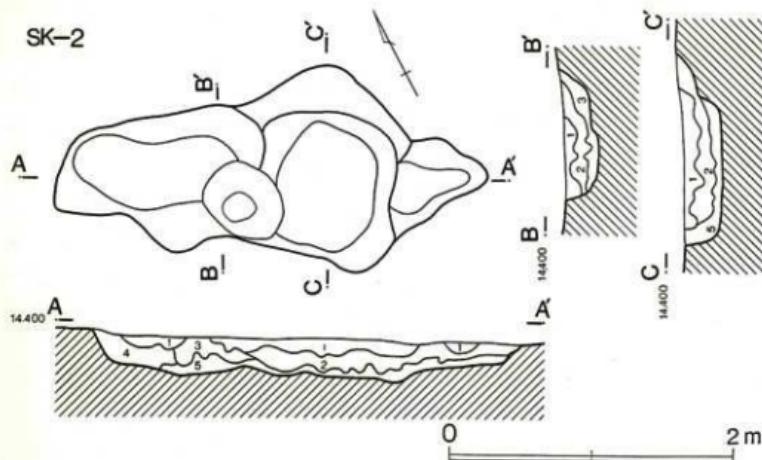
第1号土壌 (SK-1) (第254図)

(位置) D-3-7 グリッド (形状) 確認面では梢円形であるが、中位及び底面は長方形を呈する。壁は平坦な底面から直角に立ち上がり、所謂陥し穴となっている。(規模) 確認面—172×144 cm、中位—124×60cm、深さ105cm (主軸方向) N-78°—E (覆土) 以下の9層となる。

- 第1層 暗褐色土 ほぼ単一的で、しまりは強い。
- 第2層 黒褐色土 ごく少量の焼土粒を含むが、ロームはほとんど含まれない。
- 第3層 黒褐色土 多くのローム粒が含まれ、色調は明るい。
- 第4層 黒褐色土 上層に比してしまりが弱い。ローム粒もやや多く含まれる。
- 第5層 暗褐色土 色調が明るく、ローム粒も多く含まれる。しまりはやや弱い。
- 第6層 暗褐色土 ローム粒・黒色土粒を多量に含み、しまりは弱い。
- 第7層 暗黄褐色土 ロームに暗褐色土が薄く含まれている。



第254図 第1・3号土壌 (SK-1・3)



第255図 第2号土壤 (SK-2)

第8層 暗褐色土 全体に多量のローム粒が含まれる。しまりは弱く、全体に黒色土粒を多く含む。

第9層 暗褐色土 ロームブロックとローム粒を全体に含む。しまりは良いがややボソつく。

(遺物) わずか5点の小片であるが、第V群土器が出土している。

第2号土壤 (SK-2) (第255図)

(位置) C-3-23グリッド (形状) 円形及び梢円形土壤が組み合わさったような形態であるが、切り合いを示す形跡は見られない。壁は概ね急角度で立ち上がっており、底面は凹凸が激しい。

(規模) 308×148×26cm (主軸方向) N-62°-W (覆土) 以下の5層に分かれる。

第1層 黒褐色土 ローム粒を少量含み、きめ細かくしまりもある。

第2層 黒褐色土 第1層に比してローム量が増す。やや明るい色調となる。

第3層 暗茶褐色土 ロームが薄く溶け込み、若干の炭化物を含んでいる。

第4層 褐色土 第1・3層の中間的土層である。ロームブロックを多数含む。

第5層 暗黄褐色土 ロームが全体に溶け込んだ土層。黒色土粒がわずかではあるが含まれる。

(遺物) 見られなかった。

第3号土壤 (SK-3) (第254図)

(位置) D-3-11グリッド (形状) 長方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦であるが一段深い掘り込みを有している。(規模) 145×58×66cm (主軸方向) N-12°-W (覆土) 以下の

7層に分かれるが、全体にしまり・粘性の優れる土層となる。

第1層 黒色土 ロームブロック溶混が多く見られ、やや斑文を呈する。焼土粒を良く含む。

第2層 黒色土 少量の焼土、ローム粒を含む。きめ粗くボソつく。

第3層 黒色土 粘性は良いがややきめ粗く、ロームの影響が強い。

第4層 茶褐色土 ロームを強く溶混し、単一的土層となる。粘性強い。

第5層 茶褐色土 他層よりもしまりが悪く、ローム粒を多含する。

第6層 茶褐色土 ほとんどローム。しまり・粘性ともに強い。

第7層 黄褐色土 しまりは良いがややきめ粗く焼土粒を少量含む。

(遺物) 見られなかった。

(飼持 和夫)

第18表 井沼方馬提遺跡縄文時代炉穴一覧表

番号	グリッド	形態	規模(cm)	炉跡(cm)	主軸方向	出土遺物	備考
1	C-2-4	楕円形					
2	C-2-4	楕円形		80×52×?	N-1°-E		
3F ₁	C-2-9	円形	160×84×(8)	41×35×8			
F ₂	C-2-9	円形		52×48×12			
4	C-2-9	楕円形		92×75×8			
5	C-3-9	楕円形	162×115×24	80×74×8	N-87°-E		
6F ₁	C-3-14	楕円形	134×70×16	95×70×10 (推定)	S-58°-W	第256図1~4	
F ₂	C-3-14	円形		64×43×15			
7	C-3-13	円形					
8F ₁	D-3-3	楕円形	188×80×21	98×80×8	S-32°-W	第256図5~7	
F ₂	D-3-3	円形		24×22×3			
9	E-3-1	楕円形		77×62×12			
10F ₁	E-3-2	楕円形	102×74×10	98×80×8	N-73°-E	第256図8~13	
F ₂	E-3-2	楕円形 (現状)	116×65×10	24×22×3	N-S		F ₂ より新

第19表 井沼方馬提縄文時代土壙一覧表

番号	グリッド	形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	主軸方向	出土遺物	備考
1	C-3-23	円形及び椭円形土壙	308	148	26	N-78°-E		
2	D-3-7	楕円形		172	144	N-62°-W		
3	D-3-11	長方形	145	58	46(66)	N-12°-W		

(3) 遺構出土の土器

第6号炉穴（第256図1～4）

出土遺物は全て条痕文土器であり、有文土器及び口縁部破片は出土していない。1～4は同一個体と思われる。表裏面に一定しない条痕が施文され、纖維を多量に含む。裏面は剥落が著しい。色調は暗褐色を呈する。有文土器が出土していないため、第Ⅶ群土器か第Ⅷ群土器のいずれに属するかは不明であるが、纖維を多量に含むことや、色調・胎土等から第Ⅷ群に属する可能性がある。

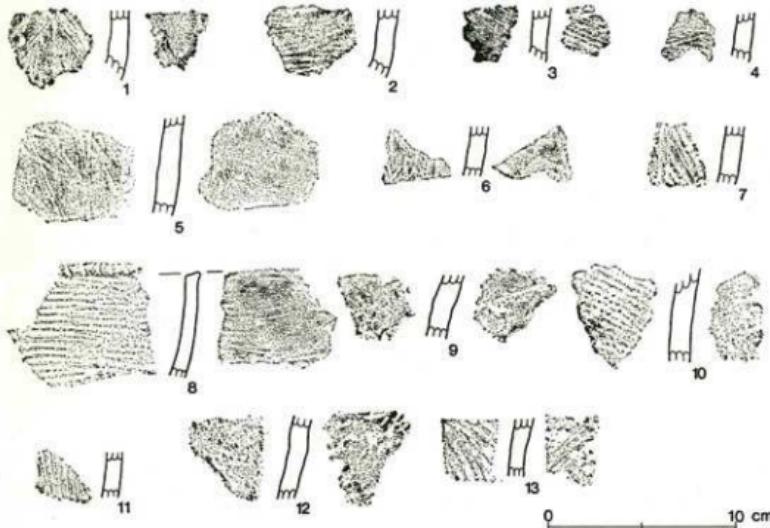
第8号炉穴（第256図5～7）

出土土器は全て条痕文土器であり、有文土器、口縁部破片は出土していない。5・6は同一個体である。表面に擦痕状の条痕が施文され、裏面には施文されていない。胎土に纖維を少量含むが緻密な土器であり、白色粒子が目立つ。焼成は良好で色調は赤褐色を呈する。7は表裏面に条痕が施文されるもので、胎土に纖維を多く含む。第Ⅷ群土器と思われる。

第10号炉穴（第256図8～13）

11は撚糸文の施文される第Ⅰ群土器である。比較的条間の密な撚糸Rが施文される。胎土に砂粒を多く含み、石英、長石粒が目立つ。

8は表裏面に条痕の施文される口縁部破片であり、角頭状の口唇部には切り込む様な刻目が施さ



第256図 遺構出土土器

れている。条痕は表裏面とも横位に施文されている。胎土には若干の纖維を含む。9は底部付近の破片であり、表裏とも僅かに条痕が認められる。10は表面にくっきりとした条痕が施文されるが、裏面には認められない。胎土に纖維を少量含み、焼成はあまり良くない。12は纖維を多量に含む胸部破片である。表裏面は剥落が著しいが、表面に僅かに条痕が認められる。13は纖維を多量に含み、表面にくっきりと条痕が施文されている。裏面は剥落が激しい。

(4) グリッド出土の土器

本遺跡から出土した縄文式土器は少量で、パンケース1箱にも満たないものであった。また、その殆どが細片であり、磨滅しているため所属時期の判定が困難なものであった。ここでは文様の判別が出来る破片を図示した。

第Ⅰ群土器（第257図1～6）

1は口唇部が丸頭状を呈し若干肥厚する口縁部破片である。間隔の粗い撚糸Rが施文されている。暗赤褐色を呈し、砂粒、長石、石英類が目立っている。2はやや太目で撚の弱い撚糸Rが、粗雑に施文されている。色調は橙褐色を呈し、白色粒子が目立つ。3は整然とした撚糸Rが、等間隔に施文される。色調は暗赤褐色を呈する。4は撚糸Rが無文部を挟んで、帯状に施文されている。器体外面は丁寧に研磨されている。撚糸の一部にはずれが認められる。色調は橙褐色を呈し、胎土は緻密である。5は細かな撚糸Rが施文されている。色調は橙褐色を呈する。6は底部付近の破片と思われる。撚糸Rが斜格子目状に交錯している。

7～11は無文土器である。7は丸頭状の口唇部形態を持つもので、表裏面に僅かに擦痕状の痕跡が認められる。胎土は緻密である。8は角のとれた角頭状を呈する口縁部破片であり、砂粒を多く含み、白色粒子が目立つ。9は丸頭状の口唇部形態を呈するものである。胎土は緻密で、色調は赤褐色を呈する。10、11は表裏面が良く研磨される胸部破片である。10は胎土に細砂、石英、長石類を多く含み、雲母片岩が若干含まれる。焼成は良好である。11の胎土は緻密であり、白色粒が少量含まれる。10が暗褐色、11が赤褐色を呈する。

以上1～6は稻荷台式に比定されるものであるが、7～11の無文土器が問題になる。10、11は稻荷台式の胎土に類似し、この段階に於ける無文土器と思われる。しかし、7～9は稻荷台式段階の無文土器の口唇部形態とは若干異なり、胎土等もやや異なることから、この群からはずれる可能性もある。

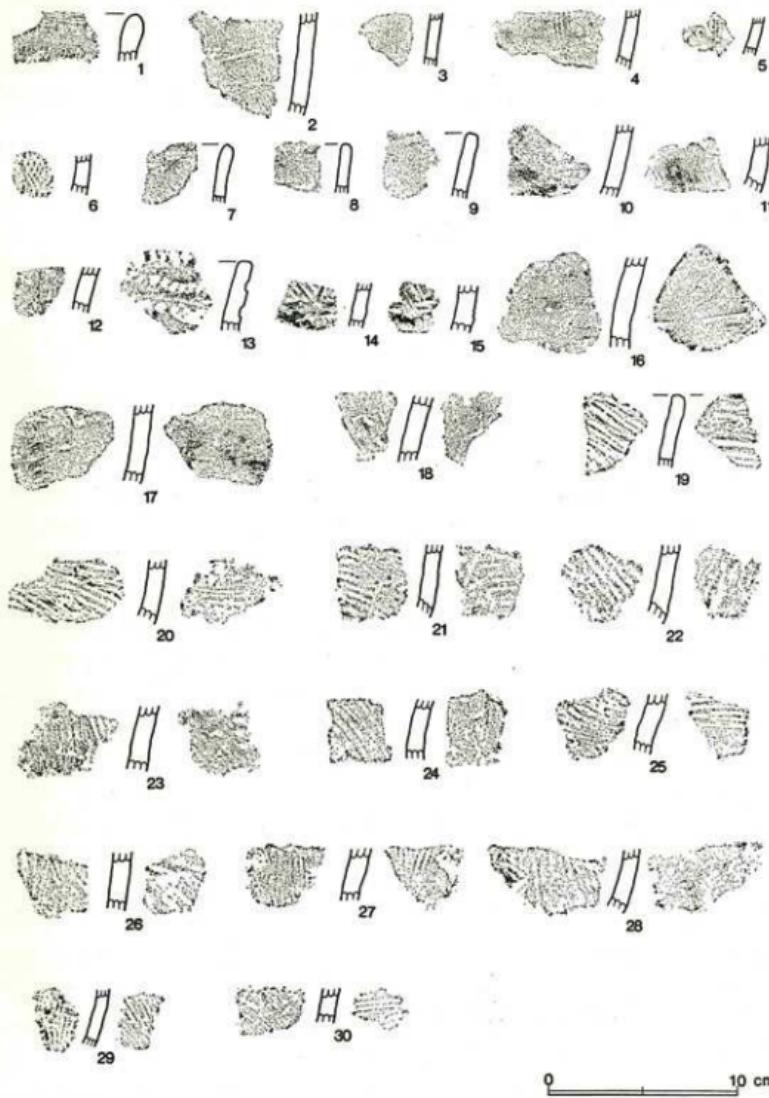
第Ⅱ群土器（第257図12）

貝殻腹縁文が縱位に施文されるもの。1点のみ出土したが、8は纖維を含まない様であり、裏面に条痕はみられない。胎土に細砂粒を多く含み、白色粒子が目立つ。貝殻腹縁文は田戸下層式、上層式、打越式等にみられるが、それ等とは胎土・器面調整・色調等が異なり、貝殻文系土器群に位置付けた。

第Ⅴ群土器（第257図13～30）

第1類（13）

角錐状工具により、刺突列が施文されるもの。13は口縁部に弧状の刺突列を二条施文し、口唇部



第257図 グリッド出土土器(1) 第I群・第IV群・第V群

にも同一施文具による刻目状の押し引き刺突が施されている。裏面の条痕は明らかではないが、粗い整形が成される。胎土は少量の繊維を含み、細砂粒が目立つ。

第2類（第257図14, 15）

野島式土器を一括する。14は細隆起線区画内に細沈線を充填するものである。15は沈線区画内に細沈線を充填するものである。両側縁に刻み込みがみられ、土錐として使用されていたものと思われる。両者とも繊維を少量含む。裏面に条痕はみられない。

第3類（第257図16～30）

第V群土器の胴部破片を一括する。条痕の施文方法の差異により、細分される。

第1種（18～30）

表裏面に条痕が施文されるものを一括する。18は表裏面に擦痕状の条痕が施文されるもので、繊維を少量含む。色調は橙褐色を呈する。貝殻ではなく、幅の広い施文具によって条痕が施文されている。

19は口唇部が丸頭状を呈する口縁部破片であり、口唇部に刻目は認められない。表裏面に条痕がくっきり施文されており、繊維を少量含み、白色粒子が目立つ。焼成は良好であり、赤褐色を呈する。

20～30は表裏面に比較的くっきり条痕が施文されるものであり、いずれも量の多寡はあるが繊維を含んでいる。20, 21, 25は表裏面とも横位の条痕が施文され、他は表裏面とも斜位か縱位の条痕が施文されている。21, 22, 28は白色粒子が目立っている。

第2種（第257図16, 17, 第258図9）

表面が無文で、裏面に擦痕が観察されるものである。16は繊維を少量含み、砂粒、小礫が多く含まれている。17は裏面に細かな擦痕状の条痕が施文されている。繊維を殆ど含まず、緻密な胎土であり、白色粒子が目立つ。第258図9はこの種の底部破片と思われる。

第VI群土器

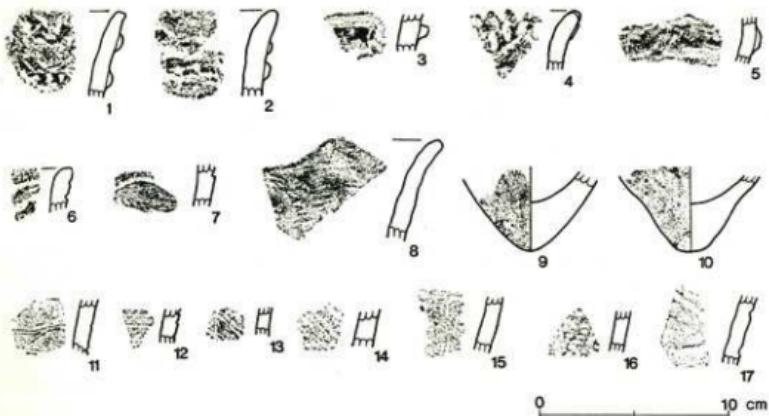
出土量は少ないが貴重な土器が出土している。文様要素の相異によって分類される。

第1類（第258図5）

絡条体圧痕文が施文されるものである。5はやや扁平な隆帯上に、絡条体圧痕文が方向を変えて、斜位に施文されている。絡条体の原体は0段の繩が使用されており、従って、細くてくっきりとした圧痕となっている。胎土は繊維を少量含み、細砂粒を多く含んでいる。

第2類（第258図1～4）

刻みの施される隆帯が貼付されるものである。1は断面が山形を呈する波状の隆帯が2本貼付されるものである。隆帯上の刻みはヘラ状工具を刺して広げる様な形に施文されている。口唇部は先細りとなり外反し、浅い刻目が施される。胎土に繊維を多量に含むため、表裏面の荒れが激しい。裏面には横位の条痕が施文されている。2は幅の広い低隆帯がやや波状に2本貼付されており、隆帯上には押し引く様な刻みが施されている。厚身の土器であり、口唇部は先細りとなり外反する。口唇上には浅い刻目が施されている。胎土は繊維を多量に含み、砂粒を多く含む。裏面には条痕は認められない。3は比較的高い隆帯が貼付されており、隆帯上に刻みが施される。繊維は多目に含



第258図 グリッド出土土器(2) 第IV群・第VII群・第VIII群

まれ、白色粒子が目立つ。4は波状の隆帯が貼付され、隆帯上に丸棒状工具で押捺した刻みが施されている。隆帯は幅広で低いものである。口唇部には刻目が施される。繊維は多目に含まれている。裏面は指頭状の圧痕がみられ、条痕は施されていない。

第3類（第258図6, 7）

波状沈線文が施文されるものである。6は口縁部破片であり、口唇部は先細りの丸頭状を呈し、刻目は施されない。沈線は深く、鋭いものである。胎土に繊維を少量含み、白色粒子を多く含む。7は半截竹管状施文具による波状沈線が施文される。胎土は繊維を少量含み、白針状物質を多量に含んでいる。条痕文は認められない。

第4類（第258図8, 10）

文様の施文されない土器を一括する。8は波状口縁を呈する口縁部破片で、比較的強く外反している。口唇部は丸頭状となり、刻目は施されない。表面に部分的に条痕が施文されているが、裏面には認められない。胎土は繊維を多く含み、砂粒を少量含んでいる。焼成は良好で、色調は暗橙褐色を呈する。

10は底部破片であり、先端がやや突出して小さな平底状を呈しているものである。繊維を少量含み、白色粒子が多く含まれる。内外面に条痕は認められないが、指頭で整形した様な凹凸がみられる。

その他の土器（第258図11～17）

11は概ね細沈線でモチーフが描かれ併行する沈線間に斜位の沈線が施文されるものである。胎土は繊維を含まず、緻密であり、白色粒子を多く含む。条痕文系土器群以前の可能性がある。

12は併行沈線が施文されるものであり、表面には擦痕が観察される。裏面は不明瞭であるが、条

痕は施文されていない様である。胎土は繊維を若干含むが緻密であり、焼成は良好である。第Ⅶ群土器に含まれる可能性がある。

13～16は縄文のみ施文される土器である。13は細かな縄文R Lが施文されるので、繊維が含まれる。第Ⅶ群土器と思われる。

15は表面の荒れが激しく、原体は不明瞭であるが、組紐状の痕跡が窺える。裏面はよく研磨されている繊維を多目に含み、第Ⅶ群土器と思われる。

14と16は繊維を含まない破片であり、14は細かい、16は太い縄文R Lが施文されている。第Ⅷ群土器の可能性が高い。

17は三角形状の連続刺突が2条単位で施文されるものである。連続刺突文は新道式の手法と類似するものである。胎土は緻密であり、白色粒子が目立つ。第Ⅸ群土器と思われる。

(5) 石器

本遺跡から出土した石器は、土器同様出土量が少なく、図示したものが全てである。殆どの石器が縄文時代所産と思われるが、砥石は新しいものである。説明の都合上縄文時代の石器と合わせて説明したい。

A類…石槍（第259図1, 2）

1は柳葉形のポイントで、基部と先端部が欠損している。両側縁の調整剝離が施されるが、粗い剝離であり、身も厚く全体的にやや粗雑な造りである。器面は風化が進行しており、欠損面も古い様相を呈している。石材は頁岩を使用している。2は、1よりも造りの粗いポイントであり、先端部を欠損する。石材は頁岩を使用している。

B類…石鎌（第259図3～11）

小さ目の石鎌が多く、抉込部が浅いものと深いものとの二形態が存在する。3～6は比較的抉込が浅く、その部分の調整剝離も細かくなっている。7～11は抉込の深いもので、7はその中にあっても大き目で薄く仕上げられている。他はやや身が厚くなっている。

9～11は一部を欠損している。9が黒曜石である以外、全てチャート製である。

C類…石斧（第259図12, 14）

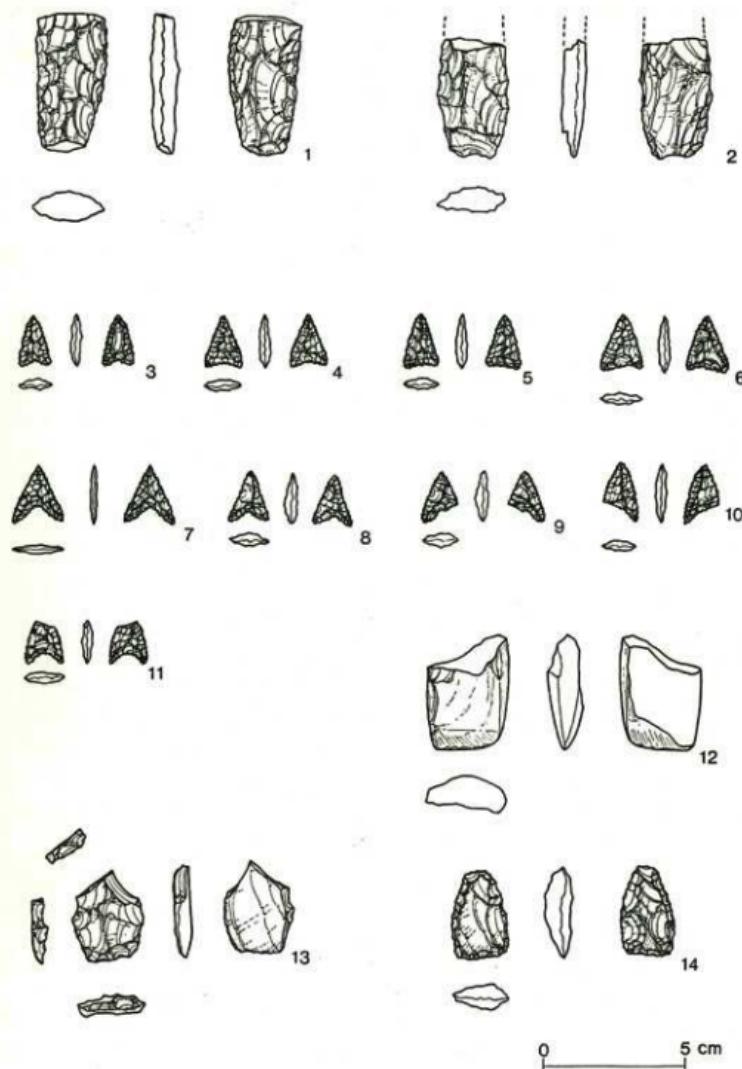
12は半磨製石斧であり、頭部が欠損する。調整剝離で形状を整えた後、部分的に磨っている。刃部は始刃状を呈し、直線状の刃線を呈する。石材は頁岩である。14は小形の石斧であり、実際使用されたものであるのか、ミニチュアであるのか判別されない。入念な調整剝離を施して、形状を整えているが、刃部は鋭利に仕上げられていない。石材はチャートである。

D類…削器（第259図1～5）

片側に主要剝離面を残し、主に他面に主として調整剝離を施している。剝離はやや粗いものであるが、刃部は両面からの粗い調整で三角形状に形成されている。彫刻刃の様な使用方法が考えられるよう。石材はチャートである。

E類…砥石（第260図1～5）

1は変形した柱状を呈し、4面が使用されている。4面の内2面に細かいすじ状の痕跡が存在す



第259図 石 器(1)